
Infinite Sky Knight <インフィニット・スカイ・ナイト>

RYUZEN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Infinite Sky Knight<インフィニット・スカイ・ナイト>

【Nコード】

N1117S

【作者名】

RYUZEN

【あらすじ】

インフィニットストラトス。通称ISが始めて大々的に表に出た白騎士事件以降、世界は戦いの矛を収めIS開発に躍起になっていた。しかし全ての戦争がなくなった訳ではなかった。アイスランドの東西を真つ二つに割った戦乱は『白騎士事件』以降も停戦することとはなく両軍は泥沼の戦争を続けていた。だがやがてその戦争も終結し、後には荒廃した自国の領土と、IS開発に圧倒的に遅れたという事実が残るのみであった。そんなある日、空軍の若きエースパ

イロツト『レナルド・レステンクール』の自宅に巨大なニンジンが
墜ちてくる。ニンジンと言った。「IS、乗らない?」と。

FLIGHT 1 人参が墜ちてきた日(前書き)

一応のプロットが定まったので投稿します。

FLIGHT 1 人參が墜ちてきた日

IS

正式名称インフィニットストラトス。稀代の天才発明家である篠ノ之東により開発された、全く新たな概念の兵器。ISの前では従来の戦闘機や戦車など物の数ではない。正に烏合の衆。どれ程の錬度があるうと、どれほど研鑽を積もうと、どれほど技量を磨こうとISという最強兵器の前では玩具に等しい。そしてISが何故か女性にしか扱えない以上、世界が緩やかに女尊男卑になっていくのも自然な流れのように思えた。認めたくは、ないが。

東西戦争。

アイスランドを東西の真つ二つに分けて殺しあつた戦いの名だ。そのまんまではないか、と思うが分かりやすいからいいのだろう。

狭い国土で発生した泥沼の戦争は、世界がISという兵器に夢中になつている間も終わる事はなく、両軍はまるで狂つたように戦いを続けていた。

やがて軍からはベテランパイロットやベテラン兵士が失われ、まだ若い少年といえる年齢の者達が、単短期間での育成コースを卒業させられ、戦場へ借り出されるのは日常茶飯事であつた。

そんな戦争でも、終戦というのは必ず訪れる。

勝利したのは西軍。これがまた面倒な勝ち方で、書くとき長くなる

ので省略する。

しかし戦争が終わったからといって、全てが解決する訳でもない。漸く一つに纏まったアイスランドがすべき事は沢山ある。その一つがIS。

先も述べたがISは最強の兵器だ。

もしこれの開発や研究に遅れることがあれば、簡単に先進国と言う名から脱落する。いや、というより既にアイスランドは脱落しかけていた。戦争にばかり夢中になって、ISのことなど殆ど見向きもしていなかったのだから。

だが、どうやら自分は祖国の底力というのを侮っていたらしい。

戦後驚異的なスピードで復興していったアイスランドは、軍直轄の研究機関でISを研究、製造を始めて僅か数年で、世界第四位のシユアを獲得するまでに到っていた。

なんでも、他国がISに右往左往してる間に、生の戦争をたっぷり味わっていた事が役に立ったらしい。が、それだけじゃないだろう。主観的に見ても客観的に見ても、今の軍総帥はかなりのやり手だ。東軍との戦争と同時進行で、他国からISの情報をちよるまかしていたとしても可笑しくない。

しかしその弊害はある。

ISが盛んになるという事は、即ち女尊男卑社会までもが浸透するということなのだから。

「レステンクール隊長！」

部下からの声に振り返る。

走り寄ってくる小動物のような少女……………に見える少年。

「どうした？」

「今日も使えないみたいです。なんでもISの実験だとかで……………」

「またかよ」

ISが重用なのは分かる。

しかしこつとも訓練が減るといふのは、流石に腹立たしさを感じずにはいられない。

もう一週間も飛んでないので、そろそろ苛々してきた。

それもこれも、よりによってアイスランドに四機しかないISのうち二機が配備されている基地の所属という事が悪い。

どうにかして別の基地に移動出来ればいいのだが。

「なんだか、最近ずっとですよね。」

こないだなんか、僕よりも小さな少女に呼び止められたと思ったら、ジューズ買ってこいよ馬鹿男、ですって。流石にカチンときちやいましたよ」

「ご愁傷様だったな、ロン。で、買ってやったのか？」

「買う訳ないですよ、レナルド先輩。無視しました、無視！」

ロンを適当にあしらいつつ、自宅へと向かう。

久々に飛べると思ったから意気揚々と来たというのに、これじゃピエロだ。

さっさと帰って寝るとしよつ。

自宅に戻ると散らかっていた。掃除なんてしないので当然といえばそれまでだが。一応これでも大尉なので、結構な広さだ。

適当に服やらを放りつつ、なんとかベッドの前まで辿り着く。冷蔵庫からビールを取り出して飲む。本来ならまだ飲酒は出来ない年齢だが、上官曰く軍人に未成年も糞もあるか！との事らしい。ヒヨッコの頃は良く先輩にからかわれたっけ。

「はあ~~~~~」

深く、溜息が零れる。

やるせない。

子供の頃から戦闘機のパイロットになりたくて勉強していたのが祟って、まだ高校入学前だというのにパイロットとして借り出されて二年。

戦って、戦って、ひたすら戦った。生き残るために、国を守る為に。だがその自分が守ったものが今の女尊男卑社会なのかと思うと色々と疲れる。

おまけに空軍のエースという称号も、ISというスーパー兵器の前では紙の様に吹き飛ばされてしまう。それもこれもISの……いや、それを作った。

その時。

軽快なリズムが鳴る。これは電話の着信音だ。一体誰からだろう。電話に出る。すると第一声は。

「おっ久しぶりだねー！ れっくん！ 皆のアイドル東さんだよっ

！」

切った。

それはもう、高速で。

聞かなかった事にしよう。そうらがいい。さっきの電話はなかった。

だが現実是非情なもので、再び電話が鳴る。

一瞬、このまま電話を破壊したい衝動に駆られるが、どうにか堪える。やがて諦め。

「もしもし」

『もしもす益荒男!』

「……………さよなら」

切った。

が、再び電話が鳴る。どうしようか。このまま無視するのはいいが、あんまり無視を続けると最悪アイスランドに核弾頭でも落としかねないし。仕方がない。これでも一応愛国心くらいはある。

『うう、れつくくんが酷いよ。DHCが足りてないよお!』

「で、何の用ですか？ 俺は今非常に機嫌が悪いので、単刀直入に言うてください。

あとDHCは足りてますからご心配なく。こんな対応をとるのは貴女にだけです」

『冷たいなあ。じゃ、ご期待に応えてバリバリ言っちゃうね!』

IS学園に入学しといちゃって!』

「はあ!?!」

何を言い出すのだ、この人は。

天才と馬鹿は紙一重というが、遂に完全な馬鹿になったのか。

『あつ。なんだか酷いこと考えてるでしょー』

性格破綻者の癖して妙に鋭い。

大体IS学園とは通常の高等教育ではなく、その名の通りISの訓練、運用法を学ぶ学校だ。そしてISを使えるのが女性だけなので、必然そこは女子高である。

男である俺が通う事自体が意味不明だし、そもそも入学試験を突破してない。

「……失敬。話の意図が見えないんですが。
エイプリルフルならまだ先ですよ」

『冗談じゃないよお。ほらほら、いつくんがISを動かしたっていうのは聞いたでしょ！』

いつくん、この人がそう呼ぶ人間は一人しかいない。

織斑一夏。戦前、自分が日本へと留学　　というより半ば追

放　　されていた時に知り合った男だ。彼とその姉である千冬、そして篠ノ之道場の人達には良く世話になった。色々と嫌な事もあったが、今となっては良い思い出である。まあ、若干一名ほど奇天烈な人に付き纏われるようになったが。

その織斑一夏が如何してだか男なのにISを起動してしまったというニュースは、この遠く離れたアイスランドにも届いてきた。

知った当初は驚いて日本へ電話したりもしたが、やはりどんなビッグニュースにも飽きというのはあるもので、一週間もすれば如何でもいい事になっていた。

「それで、一夏がISを動かした事と俺がIS学園に入学する事と何の関係があるんです？」

「どこぞの誰かが作ったISのせいで、中々飛ぶ事が出来なくなっ
て苛々してるんですよ」

『へえ、凄いな。そのどこの誰かって』

「……………」

切った。

ついでに篠ノ之束の電話番号を着信拒否に設定しておく。
だがまだ安心出来ない。念の為電源も切っておく。

「バッテリーも抜いておくか。それと……………」

寝る前だというのに仕事が出来てしまった。

この家に連絡してくる為の、ありとあらゆるルート想定しそれを遮断する。

相手は性格がぶつとんでいるものの究極の天才技術者だ。警戒し過ぎるということはない。

結局、あれから部屋に通信が入る事はなかった。

どうやらあの人も諦めてくれたらしい。

大体なにかIS学園に入学しろ、だ。

冗談はその頭脳だけにして欲しい。

一通りの仕事を終わらせ自宅に帰る準備をする。

今日も飛べなかった。まったく、いつそのこと軍を除隊して民間

の航空会社にも再就職するか。そしたらISの実験だから飛べなくなる事もないだろう。

「先輩。今日もデートですか」

後輩であり部下であるロン・フリーナがそう言って来た。

「どっこい、今日は直帰だよ。お前も彼女の一人や二人つくれよ？」

「いえ誘いを受けた事があるんですけど……その、どうも萎縮しちゃって。」

ほら世の中って今あれですし」

「アホ。そんな弱気じゃ一生童貞のままだぞ。お前もパイロットなら女の一人や二人囲むくらいの気合でやれ。そんな弱気だからケツの穴の青い雌餓鬼に舐められるんだ」

「しよ、精進します」

「じゃ、頑張れよ」

さて悩める後輩に的確なアドバイスをした所で帰るか。

ふと昨日の記憶が蘇るが………無視する。あれは関わってはいけないことだ。

基地から車で数十分。

間借りしているマンションに到着した。

軍からは結構な給料を貰っているので中々に上等な造りである。

「ただいま……っと言っても誰もいないんだけどな」

少し前までは黒髪のエキゾチックな女が出迎えてくれた。その前は一人の期間が少し続き、そのまた前は金髪の可憐な女が出迎えてくれた。そしてまた一人の期間が続き、そして今度はまた。

そんなスパイラルがこの部屋では起こっている。自分でも随分と節操がないことだと思うが、これはたぶん血統だろう。それにパイロットなんて大抵そんなものだ。

「……なんか、疲れた」

頭が痛い。

さつさとシャワーを済まい着替える。しかし着替えるといっても上半身裸に下はGパンだ。これで彼女がいる期間だったなら全裸でベッドインするところだが、生憎と今は独り身。

電気を消す。そのまま倒れるにベッドに横になり。

瞬間、爆音が鳴り響いた。

マンションの最上階にある自室の天井が破壊されていく。

「な、なんだ！？ テロリストの強襲かッ！」

慌てて締まっついていおいた拳銃を手取る。

そして突如として部屋に落下してきた物を凝視して、思わず啞然とする。

「ニンジン、ン？」

それはニンジンだった。

よくハイスクールの餓鬼が嫌うニンジン。兎と馬の好物であるニンジンだ。

しかしサイズが可笑しい。ニンジンというのは普通人の手に持てるサイズのはずだ。なのにこのニンジンはどう考えても人の背丈を越えている。

やがてニンジンに穴が空き、中から人が降りてくる。
特徴的なウサ耳。隈の出来た瞳。そして。

「IS、乗らない？」

そのニンジンの女性は。

篠ノ之束は人の自宅に突っ込んできておいて、そんな事を口にした。

FLIGHT 1 人參が墜ちてきた日（後書き）

一応、主人公は篠ノ之束と顔見知りという設定です。

「織斑一夏」がISを扱えたのは「篠ノ之束」が仕組んでいたからだった、というのが真実だった場合、色々と矛盾が発生してしまいますから。

篠ノ之束。

非常に認めたくない事だが、恐らく世界一の頭脳を持つ天才である。あの超兵器ISを一人で開発し、しかもそのISは現行兵器全てを圧倒するときている。

いや、ならば天才ではないか。人の領域を超えた才能。それは鬼才と呼ぶのだ。

頭がショートしたかと思った。

それだけに、目の前で起きた一連の出来事は脳の限界を超えていた。

何故ニンジン。そして如何して現在行方を晦ましている篠ノ之束が此処にいる。なによりIS乗らないというのは何だ？

「……………」

「おっひさしぶりだねー！ れっくん！
直接会うのは二年ぶりくらいだねえ！」

「……………」

取り合えず警察に連絡しよう。

不法侵入に器物損害、不法入国にテロ未遂。

十分に警察に頼る段階にきている。いや警察でこの人を止められ

るだろうか。

どうせなら軍に連絡してIS部隊でも突撃させたほうが……。

「ああそれと、ここら辺の電波は遮断してるから電話は使えないよ
お

「ちっ

手の早い。腐りきつても天才か。

ならいつそ肉弾戦で叩きのめしてから……。駄目だ。この人の事だ。生身の人間一人が襲い掛かった所で無意味だろう。なにかバリアみたいなものでも防いでも可笑しくない。

インフィニット・ストラトスという兵器と同じく、篠ノ之東という女性もまた規格外なのだ。

もはやこの人の事はただの人間ではなく、台風や落雷などの災害として扱ったほうがいいかもしれない。いや今直ぐにでも扱うべきだ。

「それで一体全体何の用ですか？
用がないなら今直ぐ帰ってください」

「うう、れつくんが酷いよお。

あの夜、激しく肌を合わせあったのを忘れちゃったの？」

「何時のことですか、それは。

幾ら俺でも貴女に”だけ”は手を出しませんよ」

「いけず」

「で、用件を聞きましようか」

東は少しだけ頭を捻って。

そして悪戯の成功した子供のような顔を浮かべた。

「はい、これ！」

「なんです？」

差し出してきた書類を受け取る。

そこには、なんと……………。

「IS学園の入学許可証!？」

「そう。しっかりと入学手続きとかも済ませておいたよお！」

その書類を、レナルドは……………破いた。

まるで親の仇でも引き裂くかのように、思いっきり。

「ああ〜〜! 折角IS学園にハッキングして用意したのに!」

「ハッキングかつ! 大体なんで男の俺がIS学園に入学しなきゃならないんだ!」

「えっ? 面白そうだから?」

「……………やっぱり、それですか」

深く、深く溜息を吐く。

もう駄目だ。この人相手に普通の対人マニュアルは使えない。

さて幸いにもニンジンと束がいる場所は窓際。このまま全力疾走でいけば扉まで到達できる。財布はポケットにあるし服は適当に上着を掴めばいいだろう。

タイミングを見計らう、そして。

「ああ！ れっくんが逃げたっ！」

抜けた。そのまま上着を掴んで外に出る。

夜の風がやや肌寒い。それでもレナルドの胸には、一つの脅威から脱した奇妙な達成感があった。もう彼を阻むモノはなにもない。

彼は風となつて夜の街を駆けて行った。

そして五日後。

突如として軍総帥からの呼び出しを受けたレナルドは、怪訝な気持ちになりつつも首都レイキャビクにある総帥執務室へと向かった。

「レナルド・レステンクール参りました」

「入れ」

許可が出たのと同時に入室する。

そこには、このアイスランドの実質的ナンバーツーが確かな貴禄と共に座っていた。

自分と同じ金髪碧眼。もう四十代だというのに未だに二十代にしか見えない甘いマスク。間違いなくアイスランドの総帥だ。

「さて、レステンクール大尉。君を呼んだのは他でもない」

「はっ」

「実は先日。これが私の下に届いてね」

指をパチンと鳴らす。

すると床の一部が割れそこから一つの物体が浮かび上がってくる。

「総帥、これは……！」

「そうだ。インフィニット・ストラトスだ。

無論、我が国の物でもなければ、他国の量産型でもない。

完全なオリジナルの専用機だ」

そのISは確かに見た事が無い物だった。

アイスランドの量産型ベオウルフよりもスリムで、どこか高い敏捷性を感じさせる造形。神秘的でありながらも全体的に黒色とフレームや間接部分が赤というポイントにより悪魔的なイメージを抱きもする。そんなISが………堪らなく、不愉快だった。

何故かは知らない。けれどこの不快感はどうしようもない。昨日もISのせいで飛行訓練が出来なかったせいだろうか。

「さて。それとISと一緒にこんな物まで送られてきてね」

「そ、それは……！」

間違いない。

五日前に自分が破り捨てた入学許可証だ。

ということは、やっぱりこのISを送ってきたのも。

「余談だが、このISと入学許可証の差出人は『篠ノ之束』だそう
だ」

「やっぱり」

もっと警戒するべきだった。

あの人が必要な簡単に諦める訳がないと、知っていた筈なのに。

「ではそのISを起動してみる………いや、まずは触れてみる」

「へっ？」

理解不能な命令に思わず啞然としてしまう。

「早くしろ、これは命令だ」

「イエス、サー！」

命令というのならば従わなければならない。

それが軍総帥なら尚更だ。

ISに触れる。すると

「！」

流れ込んでくる数多の情報。

分かる。これの扱い方が。これの起動方法が。

少し前までは遠い世界の理だったIS。

そのの基本動作、センサー制度、限界時間、アーマー残量。

まるで長年熟知した知識のように脳髄に直接流し込まれていく。

「こいつ……動くぞ」

手足が両足が胴体が、流石に自分の体と同等とまえばいかないが、なんとか動かせる。

何故だ。ISは女性にしか起動出来ないはずではなかったのか。

「決まりだな。」

お前はこれより日本の渡りIS学園に入学しろ。階級も一つほど上げよう」

「IS学園へ!？」

「その通りだ、レステンクール”少佐”。

麗しの篠ノ之博士から『この機体をれつくんにあづける』と書かれている以上、この機体は君の、引いては君が所属するアイスランド軍のもの、という事になる。

そしてISの実戦データを採る場所としてIS学園ほど相応しい場所もないだろう?」

「……………!」

正論だ。

世界一多くの種類のISが集まる場所、と言っても過言ではないIS学園。

そこには実戦データを採る為に多くの国々が、選ばれた代表候補生達に”専用機”を委ね入学させている。柵から牡丹餅で彼の篠ノ之博士が作り上げた専用機を手に入れてしまった以上、アイスランドがどうしても実戦データをとりたいたいと思うとは当然だ。

それでも、どうにかして拒否しなければならぬ。

「な、なら他のモノを乗せれば! 男とはいえISにおいては素人でしかない私よりも他の搭乗者を乗せたほうが!」

「残念だったな。篠ノ之博士によると、この機体は『れつくん専用機』だそうだ。他のモノを乗せれば、あらゆる手段を使って奪還する、ということだ」

「くっ……！」

甘かった。

ここまで先手を打たれると、怒りを通り越して尊敬の念すら覚える。

「念のために言って置くが、君にこの命令に対する拒否権は認められない。また現時点をもって特殊条項第11条を適用。自由意志での除隊権を認めないものとする」

遂に最後の砦まで落とされた。

忘れてた。強かなのは篠ノ之束だけじゃない。この総帥もまた、総帥就任僅か三ヶ月で西軍に勝利を齎せた怪物だった。

精々16、7しか生きていない若造の考えなどお見通しという事か。

「だけど、どうするんですか？

私は十六歳ですけど……」

高校入学は十五歳の時。

既にレナルドは年齢的には高校二年生になっている年である。

「どうするも何も……お前は高校に入学すらしていないだろう。転入ではなく入学だ」

「はあ」

「それに学校というものはいいものだ。通っておいて損はない」

しみじみと総帥が言った。

正論故に否定できない。高校入学前に軍に入ってしまった以上、レナルド・レステンクールは高校生になっていないのだ。

それに学校の大切さくらいは分かる。今でも発展途上国やアイスランドの一部には小学校にすら通えない子供達が多い。

ならどんな形とはいえ高校に通える、というのは有難いことだ。

「それで出発は何時ですか？」

「今日からだ」

「えっ！」

それが合図となったのか執務室にサングラスを掛けた黒服が入室してくる。

どうやら出発する準備をする時間すら満足には与えてくれないようだ。

もう一度レナルドは溜息をついて、その黒服に同行した。

人が集まってくるのが始まりであり、人が一緒にいることで進歩があり、人が一緒に働くことが成功をもたらす。

学校というのもそれが目的なのかもしれない。勉強するだけならば家でも出来る。けど数十人の人間が共に学び、共に遊び、共に青春を謳歌する場所は”学校”を置いて他にはないだろう。

レナルドが総帥直々にIS学園に入学せよ、との命令を受けてまだ24時間が経過していない今日。既に彼はIS学園の教室へと足を踏み入れていた。

余談だが、彼が一通りの準備を完了したのが五時間前。そしてIS学園に到着したのは一時間前。そこで授業道具一式と制服を渡され、今この席に座っているということだ。幸か不幸かポストンバツクのような荷物は黒服が寮に届けてくれるらしい。

そして広い敷地の校舎に迷いつつ、つい十分前に教室に到着したのだ。だが……。

「……………」

「……………」

重い沈黙。それはそうだろう。

例年ならいざ知れず、今年には異常な事に”男子”が二人もいるのだから。

IS学園は名目上は女子高ではない。男子は入学お断りなどは募集要項にも書かれていない。けれどISを起動出来るのが”女性”だけである以上、事実上IS学園は女子高となるのだ。

そんな女の園に紛れ込んだ男が二人。目立たない筈がない。

(はぁ……。ま、予測はしていたけどな)

嘗てレナルドが短期間パイロット要請コースを受けていた時も、男に混じって女性が一人だけいた。その女性の容姿もあって周囲の男達は随分と緊張したものだ。

これもそれと同じ。混じっているのが男性か女性かという違いはあれど、それでも随分と似たような状況。一つだけ幸いなのは、この教室にいる男子が一人ではなく二人ということだろう。

必然周囲の目も二人の男子に二分される。

だが今現在レナルドが直面している問題は、それほど生易しいものではなかった。

目の前には阿修羅の如き冷徹な怒りを漂わせる御仁、織斑千冬。そう認めたくない事であるが………レナルド・レステークールは入学早々から遅刻したのだ。しかも既に五時間目。かなり大幅にタイムオーバーしている。

「さて、言い訳を聞こうか？」

まるで死刑宣告のようにその教師は、織斑千冬は言った。少なくとも、それは六年ぶりに再会した顔見知りに対する声色ではない。

気付けば教室中が興味ではなく恐怖で静まり返っていた。

(何か言わなければ……さもないと殺^やられる！)

流石に一応IS学園は高等学校。遅刻したからという理由で銃殺刑になるような事はないと思うが、それでも今の織斑千冬という女性にはそれを為すかもしれないという凄味があった。

意を決してレナルドは言う。遅れた……言い訳を。

「実はこのIS学園に入学するよう国に命じられたのはつい昨日のことです……」

「ほう。それで」

「早急に準備しIS学園へ向かったのですが、既に時遅く！ また広大なIS学園の敷地に迷ったこともあって……その、遅れました」

「そうか。そういう事情があるのならば……」

「許してくれるんですか!？」

期待に胸が高鳴る。

「反省文三枚で勘弁してやる」

残酷に罰を告げられた。

やはり人生そう上手くはいかない、か。

取り敢えずは反省文三枚だけで済んだ。そうプラス思考に考えよう。

「……………イエス、ママ」

持っていた出席簿で頭を殴られた。

「ここは軍隊ではない。返事は『はい』でいい」

「はい、教官」

再び殴られた。

頭が割れる。軍隊生活で殴られ慣れてなかったら気絶しても可笑しくない一撃。

「教官ではなく織斑先生と呼べ」

「はい、織斑先生」

「よし。では席に着け」

一つだけ空いていた席に座る。

残念ながら一夏とは離れている。それも当然か。

なにせ此処は世界中から生徒が集まるとはいえ日本の学校。入学当初の席順は『あいうえお準』なのだ。そして一夏は織斑の『お』。レナルドはレステンクルの『れ』だ。

どうやら自分のハイスクールライフは最初っから躓いたようだ。

今日来日してから始めての溜息をつくとき、授業に集中した。

一つだけ理解出来た事がある。

それはIS。いやISの事が理解出来たという訳じゃない。つまりISの事が全く理解出来ないという事が理解出来たのだ。これぞ無知の知。一步前進だ……………そう思いたいのは山々であるが、そもいかない。なにより教室中の様子を伺うに、現状で授業についていけないのは自分と、そして同じ男子生徒である一夏だけ。ここに来る前に電話帳のように分厚い教本を渡されたが、幾らなんでも一日であの量を覚えるなんて人間には不可能だ。せめて一週間、いや一ヶ月は欲しい。

(頼むから指さないでくれよ……………)

もしも教師が「この問題を……………じゃ、レナルド君」なんて指名したらどうなるか。考えるまでもない。他の生徒にとつて出来ない筈がないような問題を間違えた生徒として『馬鹿』の烙印を押されてしまう。それだけは避けたい。唯でさえ初っ端に躓いているというのに。

懐に忍ばせた十字架に祈る。

物資にも味方にも現実にも自分にも、全てに見放された兵士にとつて最後に頼めるもの。それこそが神。今レナルドは一心不乱に神への祈りを捧げていた。

そして……………祈りは、届いた。

教師はレナルドを指す事は無く授業は終了。
休み時間へと入った。

レナルドは天を仰ぐ。

彼は勝利したのだ。この授業と言う名の地獄より、生還したのだ。何の犠牲も出さぬままに。

といつても指されていくのが名前準だったため『れ』のレナルド

は必然的に後回しになり、指される前に授業が終わっただけなのであるが。

それでもこの沈黙は如何にかならないものか。

(よし、なんとかしよう)

取り合えず行動を起こす事にした。

レナルド・レステンクールという少年は決して消極的でも内向的でもない。

比較的、友人達と喋ったり騒いだりするのが好きだし、わりと積極的なほうだ。

現在このクラス内に自分と面識のある生徒は二人。

一人は言うまでもなく織斑一夏。

そしてもう一人が篠ノ之箒。あの傍迷惑な天災発明家の妹であり自分と同じ被害者だ。

覚悟は出来た。色々。故に。

「一夏ア！」

「うお!?!」

レナルドの叫びに一夏だけではなく他の生徒まで驚いて肩を震わせる。

その隙を見計らい一夏の腕を掴むと、そのまま廊下に引っ張っていった。

他の生徒達は突然の出来事に反応できず立ち竦む。計画は成功だ。

「さて、久し振りだな。元気だったか」

一夏がポカンと口を開く

「ああ、元気だ。レナルドも久し振り」

一夏とレナルドは六年ぶりの再会を祝って笑いあう。

「それで空軍に入ったんだっけ？」

一夏が言う。

「何で知ってるんだ？」

質問に質問を返すのはマナー違反だが、気になった。

そのことを一夏に話した覚えは無い。というより六年前から一階も話してないのだ。

「昨日TVでやってたんだよ。もう一人の男でISを動かせる奴が見付かったって。

それで驚いて見てたら……………」

「俺だったのか」

しかし自分がISを扱えると分かったのは昨日。

そしてTVにそのニュースが出たのも昨日。情報が漏洩したといふのは考えずらいので、恐らくアイスランド側が積極的に宣伝したのだろう。しかし一夏の様子だと詳しい経歴まで流れたらしい。プライバシーの侵害、といたいだが今のアイスランドは独裁政権に近いし……………無駄だろう。

「おい」

「んっ？」

振り返る。

するとそこには長い黒髪をポニーテールにした女生徒がいた。

「箒じゃないかっ！」

「ああ、久し振りだ」

本当に懐かしい。

織斑姉弟だけじゃなくて箒もいるとは流石に予想外だった。

ちなみに彼女が束の妹だからといってレナルドに思う所はない。

寧ろ同じ被害者として同情するくらいだ。

そんな時だった。無情にも授業五分前を告げるチャイムがなったのは。

名残惜しいが仕方がない。それにもう何時でも会えるのだ。

「やばい、授業遅れるぞ！」

「わ、分かってる！」

慌てて教室に戻る。

その途中、一夏には聞こえないように。

「箒、一夏とは上手くいつてるのか？」

「い、いや………その………だな。私も今日再会したばかりで………」

そうか。反応で理解した。
"どうやら" "まだ" のようだ。

「そうか。まあ頑張れよ」

一夏の鈍感さは知っている。
だからせめてエールを送った。

「ああ、すまん」

そうやって話していると。

「何の話してるんだ？」

「なんでもないッ！」

まあ兎に角だ。

これからの学園生活。 退屈せずに済みそうだ。

FLIGHT 3 遅刻（後書き）

今回は導入部なので短め。

今回は束との出会い、そしてイギリス人との……

分別と忍耐力に支えられた炎のごとき情熱を持つ人は、一番成功者になれる資格がある。

だが資格があつたとしてつても、それは決して確定ではない。

分別と忍耐力、そして情熱があつたとしても叶わぬ願ひもある。

けれど人が叶わぬ夢を抱き続けてきたからこそ、今の時代があるのだらう。

遡ること八年と半年ほど前。

後にISを発表し世界を変革させた天才発明家である篠ノ之束。

この時点では、まだそれ程のビッグネームではなかつた。

周囲の評価としては『天才』『独創的』『変人』そこに『鬼才』というものはない。

ただ篠ノ之束という女性にとってそんなものは如何でも良かった。

元より彼女は他人の評価など興味もない。他人が自分をどう思うと関係はない。

何故なら自分が興味を抱くのは世界で”三人”だけなのだから。

その日も篠ノ之束は一人、公園でキーボードに指を走らせていた。通行人がそれを見れば『ちよつと可愛い女子学生が公園でパソコンをしている』くらいにしかならないだらうが、実際に彼女が行っ

ているのは、名門大学の教授であろうと理解出来ないほど高度な”数式”である。

IS、宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツの基礎理論。けれど束が考えている通りならばISとは

そんな時であった。

束が走らせているキーボードに飛行機が落下してきた。といっても本物ではない。本物に似せて作られてある模造品。ようするにラジコンだ。

「あーっ！」

数時間の労力が水の泡と化した事に流石の束も絶叫する。パソコンを調べてみるが………完全に破壊されていた。

流石にイラっときた。他人に興味がない彼女であるが、自分の今までの労力をパーにしてくれた下手人を、何もしないで許すほど束も人に無関心ではない。

さて下手人を探し出そう、としたところで。

「お、俺のラジコンがあ！」

探す手間が省けた。

どうやらラジコンの所有者であり自分の労力を破壊した下手人はこの外国人の少年のようだ。

しかしそういう事では余り酷い事をする訳にもいかない。別に彼女自身この少年のことなど全くもって如何でもいいが、そんな事をしたら興味対象である”三人”との関係を大いに壊してしまう。

だけど………

「折角俺の作った二十七機目の相棒。スーパーデビルが……………」

「へえ、これ自分で作ったの？」

気付けばそんな事を質問していた。

特に思惑があった訳ではない。けれど少年の年齢は見た目的に小学生。そして少年曰く自作のラジコンはどう考えても小学生の作るレベルを超えている。尤もそういう束は小学生の頃にはもっと凄まじい物を作れたが。

「えっと…………誰ですか？」

「私の事はどうでもいいよ。で、これ君が作ったの？」

冷たい口調で束が言った。

「そう、だけど……………」

「ふうん、将来はパイロットになりたいとか、そういうことが」

この年頃の子供が抱く、ごく普通の願望。

それで束の興味は少年から外れた。もう何か仕返しをするという考えもない。

考えてみればこの数時間行っていたのは対して重要なものではなかった。また作ればいいし、無理に少年に仕返しをして興味対象である三人の気分を悪くするほうが死活問題だ。

そう。少年は篠ノ之束の興味から外れた筈だった。だけど幸か不幸か、少年が次に放った言葉はまたしても篠ノ之束の興味を引いた。

「違うよ。俺はソラを飛びたいんだ」

「空？ パイロットになるのと何処が違うの？」

「だってパイロットじゃ空は飛べてもソラは飛べないだろ」

「はあ？」

天才の頭脳をもつてしても理解不能なことを少年は言った。

何を言っているのだ。空が飛べてもソラは飛べないとは。支離滅裂、子供の戯言。そう片付けても良かったのだが、特にやる事もなかった束はもう少しだけ少年の言葉を聞くことにした。

「だってさ。地球の外にはもっと広い『宇宙』^{そら}が広がってるじゃないか。

勿論最初はこの星の空を飛び回るのもいいかもしれない。けど何時かは空と宇宙を自由自在に飛び回ってみたいんだ」

真つ直ぐで純真な瞳。

少年は情熱の籠った視線を真上にあるソラへ向けていた。

余りにも愚かで馬鹿らしくて、けれど何よりも貴い少年のその願い。篠ノ之束は興味を持ち、肯定する。妹とも違う。千冬とも違う。そしてあの少年とも違う。ただ、ひたすらに一つの馬鹿みたいな願いを抱く子供。純粹に面白いと思った。

「そっか。それじゃあね。

もし君がその願い事を、大人になってもずう〜と持っていたら
「

いられたら？」

不思議そうな顔で少年が問う。
篠ノ之束は、満面の笑顔で答えてやった。

「私が翼をあげる。どんなソラにでも飛んでいける翼を」

「ほ、本当!？」

「うん　お姉さんとの約束だよ」

それは全国規模で見れば小さな出会いだっただろう。

けれど篠ノ之束という女性にとっては大きな出会いだった。

妹と親友と、親友の弟に続く四人目の興味対象。

それが吉と出るか凶と出るかは、神のみぞ知ることである。

何事にも終わりというのは訪れる。

このIS学園においても一日の終わりは平等にやってくるのだ。

そして全ての授業を消化したレナルドは始めて学園の寮に訪れていた。

「なんとというか、やっぱり同室だな」

どこか安心したような、どこか残念のような。

そんな風にレナルドが言った。

「そりゃそうだろ。だって他の奴と一緒にだったら男女相部屋になるじゃないか」

新しい同居人。

織斑一夏がそう返答した。

「……………そうだな。なんか少し残念な気もするけど諦めよう。それに俺と女子が相部屋になると、部屋にいるのが二人から三人になっちゃうかもしれないからな」

「……………敢えてツツコまないぞ」

それにしても立派な部屋だ。

自分がパイロットになった時など五人一部屋でしかもこの部屋よりも狭かったというのに。

これが国立を通り越した国際立というわけか。

掛かっている金が他の名門私立大学とは比べ物にならない。

「そういえばクラスの生徒が噂しているのを聞いたんだけど……………
…お前、イギリスの代表候補生とクラス代表を決める為の決闘をする事になったらしいな」

「そういえばレナルドは三時間目遅刻してきたから居なかったっけ。ああ、そうだけ。別にクラス代表っていうのは興味なかったけど、なし崩し的に」

「そうか。随分と自信があるんだな。
やっぱり千冬さんからIS操縦のコツとか徹底的に教え込まれてるのか？」

「いや全然。千冬姉はISのことは教えてくれなかったし、授業内容も殆ど分からなかったからな」

「……………まさか、何も考えずに喧嘩売ったのか？」

「何が？」

ポカンと口を空ける一夏。

そんな一夏に友人としてレナルドは真実を告げてやった。

「いいか、代表候補生といえばエリート中のエリート。その戦闘力だつて恐ろしく高いんだぞ」

「けど、あいつそんなに強そうじゃなかったぞ。偉そうな雰囲気はあつたけど」

「あのな。仮にも国家の代表に選ばれるのがモヤシな訳ないだろ。

ISを動かすにも体力は必要不可欠らしいし。

いいか、代表候補生じゃない筈でも剣道の全国大会で優勝する程の戦闘力なんだぞ。

代表候補生だつたら素手で白熊を撃破しても不思議じゃない」

「そ、そんなに凄いのかっ!？」

「ああ。ISを起動できただけの素人なんか『戦闘力：たったの5か：ゴミめ』なんて言われてコテンパンにされるのがオチだぞ」

「マジか？」

「大マジだ」

すると漸く現実を知った一夏が青い顔になっていく。

無理はない。自分が決闘しようとしているのが、生身で白熊を倒せるモンスターだと認識してしまつて恐怖しない人間はいないだろ

う。

「レナルド。何か勝つ為の秘策でもないか？
ほら。空軍での経験を活かして」

「ふうむ。けど作戦を練ろうにも相手の情報がないと……………」

「そうかあ。白熊を倒す戦闘力たつて空手で倒すのか関節技で倒すのかくらいは知っておきたいからな」

(白熊はジョークのつもりだったんだが……………)

二人して頭を捻らせる。

だけど情報が足りない。せめて相手の得意分野でも分かれば。

次の日。

結局、コレといった名案が思いつかなかったレナルドは。

「あー、そのイギリス人」

相手から直接情報を聞き出す事にした。

金髪盾ロールのいかにもお貴族といった風貌の少女。セシリア・オルコット。

「なんですの……………って貴方は、誰かと思えばつい最近まで醜く争っていたアイスランド人じゃありませんこと」

その瞬間。

あくまで平和的に情報を引き出そうというレナルドの考えは消滅した。

というより情報を引き出すという事自体を忘れた。

ちなみに言うとレナルドはイギリス人が嫌いである。祖国であるアイスランドと昔いざこざがあった事やその他多くの理由でイギリスが嫌いだった。

「伝統しか取り得の無いような年寄り国家の人間が良く咆える。イギリス人というのは礼儀を知らないようだ」

レナルドが嫌味を込めて言う。

するとセシリアもまたカチンとくる。

「あら、野蛮なアイスランド人に礼儀をご教授されるとは思いませんでしたわ。

ですがご心配なく。私は貴方のような蛮人より遥かに淑女としての嗜みを心得ておりますので」

「淑女？ あんな糞不味い狗の餌のような食事しか作れない国の人間が淑女だとは。

失敬。いつから狗が淑女と呼ばれるようになったんだ？」

「死にたいのですか、蛮人？」

「死にたいのか、俗人」

二人の間に火花が飛び交う。

もはや休み時間の平和な雰囲気は欠片もなかった。

「それで、私に何の用ですか？」

「単刀直入に言うと、お前の戦闘方法の詳細を吐け」

「断りますわ。例えゴキブリに教えても貴方に”だけ”は教えませ
ん」

「狭い女だ。」

これだから紅茶のような濁った汚水を美味しい美味しいと賛美する
イギリス人は理解出来ない」

「理解できなくて当然ですわ。」

貴方のような蛮人風情に紅茶の良さが分かる訳がないでしょうに」

「紅茶など邪道。コーヒーこそ至高の存在だ」

「コーヒー!?!」

驚きましたわ。あんな泥水を至高というような低俗な人種がいるだ
なんて……」

再び二人の間に飛び交う火花。

そして二人はほぼ同時に。

「決闘だつ（ですわ）!」「」

教室中が震撼した。

その気迫に、その真剣さに。昨日、一夏とセシリアが繰り広げた
物とは比べ物にならない緊張感。当然だ。これは下らない喧嘩やプ
ライドで発生したものではない。互いの魂の尊厳を掛けて争う類の
真剣勝負だ。

「俺のコーヒーとお前の紅茶。果たしてどちらが上か……」

「決着をつける必要があるそうですわね」

それで言う事は済んだのかセシリアとレナルドは席に戻る。
ただレナルドは席に戻る前、一夏に。

「安心しろ。例えお前が倒れたとしても、お前の仇は必ず俺のコー
ヒーが討つ」

そう言って席につくレナルド。

色々と奇妙な展開に置いていかれた一夏は思わず呟いた。

「なんでね」

FLIGHT 4 四人目の興味対象（後書き）

はい。セシリアとレナルド相性最悪でした。

天敵ですね、天敵。

なんか色々とセシリアヒロインフラグが消滅しましたw

どんなつまらない雑草でも花でも、懐かしい日記の一片となり得るのである。

つまらない一生というのは何だろう。友達が一杯いれば面白い一生？ 一人孤独ならばつまらない一生？ 普通に生きて普通に死ねばつまらない一生？ 浪漫に生きれば面白い一生？

下らない。つまらないか面白いかなど、個人の主観で決めるべき事だ。つまり当人が面白いと感じているのならそれは面白い人生なのだろう。

さてと。お忘れかもしれないが俺の名前は織斑一夏だ。

ついこの前まで世界で唯一ISが使える”男”だった。けれど今は違う。もう一人の男が見付かったからだ。そいつの名はレナルド・レステンクール。何の因果か俺の昔馴染みである。

レナルドは基本的には良い奴だ。

初めて出会ったのは小学生の頃。小学生っていうのは俺も含めて大抵馬鹿だ。ちょっと自分達と違うモノを見れば直ぐに悪口を言うし、かなり下らないことで怒ったり喧嘩したりする。

レナルドもまたその金髪碧眼のせいで苛められて

いや逆だ。苛めようとしていたガキ大将とその子分達を逆に苛め返してしまい、それを俺が止めたのが切欠となって知り合ったのだ。

レナルドはなんでも父親から格闘術を叩き込まれていたらしく、かなり強かった。ちよつと体が大きくて腕っ節の強いガキ大将なんか相手にならぬくらい。

しかしそれを止めた俺も箒の実家である篠ノ之道場で剣道だけじゃなくて古武術を叩き込まれていた身。やがて止める筈が喧嘩に発展し、その戦いは確か放課後の六時まで続いた。最終的には帰りのが遅いのを心配して、学校まで迎えに来てくれた千冬姉に、二人とも拳骨を貰ったんだっけ。

今思い出すと……………いや、今思い出しても痛かった。少なくともあれは小学生に喰らわす拳骨ではない。もし俺が鍛えてなかったら気絶していた。

とまあそんなこんなで千冬姉がレナルドを家に呼んで、それから心配して来てくれた箒も混じって鍋を突っついて……………気付いたら友達になってたんだよな。

そんなレナルドなのが現在。

「駄目だ！ このコーヒーではまだ完全とは言えない。もっと至高のコーヒーをブレンドしなければ！」

そう。あろう事か部屋に籠ってずっとコーヒーをブレンドしているのだ。

というが、そのせいで部屋の匂いが凄い事になっている。

「おお。帰ったのか、一夏」

「……………ああ、それでこれ一体なんなんだ？」

それにしても来るべきクラス代表決定戦の為に、箒との剣道で汗

を流していた俺を、出迎えるのがコーヒーの匂いとは。
せめて出迎えるならスポーツドリンクにしてくれ。

「なんなんだって………コーヒーに決まってるじゃないか。

来るべき決闘であのハルマキ女を、地べた這い蹲らせてから泣いて謝罪させないといけないからな。ふふふふ、漸くコーヒーこそ至上と証明する時が来たようだな」

地べたは這い蹲らせるって。

しかしあのセシリアとレナルドがここまで相性が悪かったとは。

俺もあの何処か他人を見下したような態度に思わない事がない訳じゃない。けどレナルドはそんなもの関係なく敵愾心を燃やして
るような気がする。

「どうしてそんなに怒ってるんだ？」

気になったので聞いてみる。

するとレナルドは決意の籠った視線で。

「怒ってるんじゃない。これは宿命の戦いだ」

「しゅ、宿命!？」

何時からそんな事に。

ただのドリンクバトルじゃなかったのか。

「俺はあのハルマキを倒し、コーヒーの美味さを証明する。

これはもはや決闘ではなく戦争とっていい」

「戦争って………」

「勝たなければならぬ。
多くのコーヒー党の者達の為にも」

「そうか。まあ頑張ってくれ」

俺の方もそんなに余裕がある訳じゃない。
今日だって筈にコテンパンにやられたし。ISだって動かさせたのは入試の時だけだ。

千冬姉はなんだか専用機をくれる、みたいな事を言ってたけれど肝心の専用機もまだ届いていない。

あれから一週間。

俺は後少しのところで負けてしまった。

言い訳するわけじゃないけど、本当に後少しだったのだ。

俺の専用機である白式の単一仕様能力

ISが操縦者

と最高状態の相性になったときに自然発生する固有の特殊能力

である零落白夜が発動したのはいいが、それでも時既に遅く、俺は敗北した。零落白夜の能力。それは自身のシールドエネルギーを消費して、相手のエネルギーを消滅させる力。しかしシールドエネルギーが既に危険域だった白式は零落白夜のせいでエネルギー残量がゼロとなり敗北した。

せめて零落白夜の能力が良く分かっていたら………いや、それでも負けていたか。あの時点でシールドエネルギーの残量も不味かったし、零落白夜を使わなければ負けていた。

つまりどっちも蟻地獄だ。

零落白夜を使っても負けたし、零落白夜を使わなくてもあの

ままでは成す術もなく負けていた。まあ惜敗だとしても惨敗だったとしても負けは負けだ。

ただ何故かセシリアが俺にクラス代表を譲ってしまった事もあって、結局は俺が代表になってしまった。まあそのセシリアもあれから随分と態度が柔らかくなったし………まあいいか。

そして今日。

運命の日が訪れる。

教室に対峙するレナルドとセシリア。

二人は互いに自信の魂が籠った作品を手に持ち教壇に歩み寄る。

審判は千冬姉。なんでも二人に頼まれたらしい。

妥当な選択だろう。コーヒーと紅茶の味が分かりそうで尚且つ正確なジャッジが出来そうなのは千冬姉くらいしかない。

山田先生辺りだと例え味が分かっていても「二人とも頑張ったので引き分け」とか言っちゃいそうだからなあ。俺も人の事言えないけど。

「では先ずオルコットの紅茶からだ」

「どうぞ、織斑先生」

にこやかにセシリアが言う。

でもあれ、顔が笑っていても目が全然笑ってない。

千冬姉がセシリアの紅茶を飲む。

形の良い眉がピクリと動いた。

「どう、ですか？」

流石のセシリアも判定を受ける時には緊張するらしく、僅かに強張ったように言った。

「上々だな。淹れ方も温度も完璧だ」

「当然ですわ。このセシリア・オルコットの淹れる紅茶に、不味いの文字はありませんわ！」

「ふむ。では次はレステンクールのほうを」

「どうぞ」

レナルドのコーヒーを飲む千冬姉。

セシリアの紅茶は飲んでいないが、レナルドのコーヒーは良く実験台に飲まされたので知っている。あれは美味い。そこいらの缶コーヒーが不味く思えるほど美味い。そんなコーヒーを飲んで千冬姉は。

「これも上々だな。程よい苦味が良い味を醸し出している」

「当然です」

「こちらも自信満々のレナルド。

どちらも自分の勝利を疑っていないようだ。

「では勝敗を」

「二人が同時に息を呑む。そして、

「勝者は

なし。引き分けだ」

「……なっ!」「……」

セシリアとレナルドだけじゃない。

クラス中全員が驚いた。

まさかあの千冬姉が、そんな甘い裁定を下すなんて。

そうなるとう当然怒り出すのが。

「納得いきませんわっ!」「」

「俺もです!」

どう考えても俺のウルトラロイヤルマウンテンMK-?が紅茶如きに劣っているはずがありません!」「」

どうでもいいけど、レナルド。名前長すぎないか。ついでに格好良くないぞ。

大体MK-?って。ロボットやISじゃあるまいし。

「口で言っても納得しないだろう」「」

「「当たり前です!」「」

「ならば………ほれ、飲んでみる」「」

「「!」「」

千冬姉はセシリアにレナルドのコーヒーを。

そしてレナルドにセシリアの紅茶の渡した。

だけど二人は動かない。まるで親の敵を見るかのように手に在るモノを睨んでいる。

「まさか恐いのか？」

自分の作ったモノより相手にモノが美味しいという事実を知るのが」

「飲みます」

二人は同時に互いの作品を飲んだ。

そしてみるみる内に顔が強張っていく。

「これは……………認めたくないが、美味しい」

「有り得ませんわ。私の最高の紅茶と同じレベルのコーヒーなどは……………」

「理解したか。」

私が引き分けと言ったのは別にお前達の努力を鑑みて勝敗を着けなかったのではない。

生憎と私は物事をはっきりと言う口でな。努力したから引き分けなどと言うつもりはないさ。

ただ敢えて引き分けという結果を出したのは、単純にお前達二人の作品が完全に同レベルだったからに過ぎない」

「……………」

「では私はこれで失礼する。

これでも忙しい身なのでな。

それと、美味しかったぞ。二人とも。今後も精進しろよ」

颯爽と去っていく千冬姉。それは弟である俺ですら惚れ惚れするほど格好良かった。

女子の何人かが「きゃー、抱いてー！」と叫んでいるが、聞かなかった事にしよう。

ちなみに当の二人は。

「次こそ、俺の究極的コーヒーでお前の紅茶を打ち破る」

「受けて立ちますわ。私の伝説的紅茶で貴方のコーヒーを叩き潰してあげますわ」

「お前が伝説なら俺は幻のコーヒーで戦う」

「なら私は世界一の紅茶を以て受けて立ちましょう」

「では俺は宇宙一の」

「でしたら私は全宇宙一の」

まあ、なんだ。

IS学園は今日も平和だ。

「あ…ありのまま今起こった事を話すぜ！

『俺はISの二次創作を書いてたら、いつの間にかグルメsssになつていた』。

な…何を言っているのかわからねーと思うが、

俺も何をされたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…ティータイムだとかBOSSだとか、

そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…」

成功は必ずしも約束されていないが、成長は必ず約束されている。

どのような才能でも磨かなければ、それはダイヤとして輝けない。世間一般で天才と呼ばれている篠ノ之束にしても、彼女なりに努力はしている。

実質的に世界最強の存在である織斑千冬もそう。彼女が第一回モンド・グロツソで頂点となりえたのは彼女の才能があったのもそうだが、彼女が誰よりも努力したという純然たる事実があるのだ。

レナルド・レステンクールの朝は早い。

起きて直ぐに眠気覚ましのコーヒーを飲んでから意識を覚醒させると、直ぐに外出用の服装に着替える。向かう先は第三アリーナ。やる事は決まっていた。

「ふう」

レナルド以外に誰もいないアリーナ。

好都合だ。レナルド・レステンクールという男は、基本的に他人に努力を見られるのを嫌う。特に女性には。男としての矜持もあるのだろう。それにアイスランドなどでは部下の手前、弱気になることは出来なかった。

それに幾ら二人だけの男に多少お祭り騒ぎになつてるとはいえ、IS学園は基本的に実力が物を言う。珍しくとも、その人気に感じていて努力を怠れば、最後には”弱者”のレッテルを貼られて見放されるだろう。

彼とて軍人やパイロットである前に一人の人間。女だらけとはいえ学園と言うコミュニティーから除外されるのは嫌だった。

あの一夏もあれで結構努力をしている。学校に残って山田先生の補修を受けるのはほぼ毎日だし、箒と剣道の鍛錬もしている。

努力というだけならば、クラスで一二を争うのではないだろうか。

けれどレナルド・レステンクールは、その一夏よりも努力をしなければならなかった。

理由は単純である。

(……………こい)

右手の薬指にある、赤と黒の装飾が施された十字架の首飾り。

それがレナルドの専用機が待機状態の時の姿であった。

その指輪を強く握り締め念じる。ISを、専用機を身に纏う為に。

(……………ええい、まだか！)

再び強く握り締め念じる。

けれど一向に反応はない。そのまま時は過ぎ五分後。

漸くヒカリの粒子が形となりレナルドのISが展開した。

全体的な”黒”に間接部分やフレーム部分を深紅に染めたその姿は、まるで墮天使のような奇妙な神秘性と悪魔性の両方を感じさせる。

「今度は五分二十一秒。前回より五秒縮まったけど、これじゃあな」
熟練したIS操縦者は展開まで一秒と掛からない。
担任教師である織斑千冬はそう言っていた。
だというのに自分が展開するのに必要としたのは五分。
熟練した操縦者の321倍の長さだ。ここまでくると笑えないを
乗り越して笑えてくる。

「一夏はもつと早くやってたからなあ」

自身の古い友人でもある織斑一夏は、当初こそ展開に戸惑っていたが、それでもレナルドよりは遥かに早く展開していた。

空軍のエースだった事もありISの基礎中の基礎は僅かに知っていたレナルドは、知識ならば一夏に勝っていたが、こと実技においては劣っていた。それというのも。

「駄目だこりゃ」

散々やった結果。

このISのメイン武装であるライフル一つ出すのに三分必要とした。

はつきり言って駄目駄目である。最低でも0.07秒で出すようにと言われているのに、レナルドが必要としたのは三分。ぶっちゃけ壊滅的だ。

「これじゃあ不味いよな」

戦闘機で例えるなら発射シークエンスの段階で戸惑ってる感じだ。そしてレナルドだったら、そんな人間に空は絶対に飛ばせない。

見知らぬ兵器に乗って直ぐに乗りこなすなんていうのは、漫画やアニメのヒーローだけに許された特権だ。そしてその特権をレナルド・レステンクールは持っていない。

兵器にしろ自動車にしろ操るには練習に裏打ちされた技量と知識が必要であり、現在のレナルドには前者が全く足りていなかった。

「ふうん、見かけによらず努力家なんだねえ。レナルド・レステンクールくん」

「！」

飛び退く。

一体何者だ。全く気配に気付かなかった

「お前は……………」

「おはよう」

後ろに立っていたのは、リボンの色と服装からしてIS学園の二年生だった。

扇子を持ち、どこか自分の上官である総帥に似た余裕を感じさせる女性。

正体が分かった所で一安心しようとして 直ぐに警戒し直した。

「おたく、どなたですか？」

レナルドとてアイスランド軍の押しも押されぬエースだ。嘗て力自慢の大男が絡んできた際に、地面の冷たさを再確認させてやった事もある。

そんな自分に全く気配を悟らせずに後ろに立つ。もしかしたらISの能力かと疑うが、その女生徒がISを使ったような様子はない。つまりこの女生徒はただ純粹な人間としての能力だけで、このレナルド・レステンクールの後ろをとったのだ。そんなことが、幾らIS学園とはいえ普通の一般生徒に出来る筈がないだろう。

「はじめまして、ね。私は更識楯無。

この学園の生徒会長よ」

「生徒会長、ですか」

成る程、言われてみれば確かに彼女には、猛者揃いのIS学園の生徒達を束ねている貫禄のようなものがある。それに何時だったか記録かなにかで見た事があるような気がする。

「そうだよ。レナルド・レステンクール少佐」

「……………随分とお詳しいようで」

「そうでもないよ。

第一君自身は良く認識してないみたいだけど、結構君って有名人なんだよね。

当時若干16歳でありながら、東西戦争において21機の戦闘機を撃墜した空軍のエース。

軍事関係の雑誌なんかでも紹介されてるし、ルックスもいいし、極め付きには世界で二人目のISが操縦できる男性っていう看板もあるし」

自分のニュースが世界中に流れた、というのは知っていた。

だけどその事実を認識したのは始めてである。これが自分の知ら

ない誰かが自分の事を知っているという感覚なんだろう。
嫌悪なんて抱きはしないが、不思議な感じである。

「それで生徒会長閣下が、俺のような一生徒にどのような御用ですか？」

誰にも見られなくなかった訓練を見られた事で、レナルドの口調には多少の棘があった。

けれど生徒会長、更識楯無はまったく気にした様子はなく。

「んー。最初は見てるだけのつもりだったんだけど………そうだ。これから私が君のISコーチをしてあげようか？」

「はい？」

「知ってる？ IS学園生徒会長というのは、最強の称号なんだよ。絶対に後悔させない自信はあるけど、どう？」

「いいんですか！」

正直、願ってもない申し出だった。

確かにレナルドとてこうやって密かに訓練しているのを誰にも見られたくはない。

けれどコーチないし教官という存在を否定して、自らの才能を信じて暴走するほどレナルドは馬鹿でも子供でもなかった。

同級生で教えてくれそうなセシリアと篤が、コーチに向いていないのは一夏のお陰で分かっているし、同級生に教えを請うというのは、レナルドの中にある自尊心というものが傷つく。

「その代わりと言っては何だけど、ちょっと生徒会の仕事手伝って

ね

「それくらいならば」

こつ見えて書類作業は得意だ。

パイロットの仕事とは飛行機を飛ばすだけじゃないのだ。

しかも隊長にまでなると相応の事務仕事もある。

「それじゃあ決定ね。レナルド・レステンクールくん。

素直な子はおねーさん好きだよ」

「レナルドでいいですよ、会長閣下」

「なら私も楯無と呼んで貰おうかな。たっちゃんでも良いけど」

「では楯無先輩と呼ばせて貰いますよ」

この出会いが吉と出るか凶と出るかは分からない。

けれどこの生徒会長ならば、凶が出ても実力で吉としてしまつようなパワーがある気がした。

「ああそれと」

「はい？」

「もう直ぐSHR。遅刻したら大変だよお。織斑先生は厳しいことで有名だからね」

「んなっ！」

時間を見る。

確かに不味い。後十数分もすればSHR開始。

そして遅刻したならば……………考えたくもない。

「失礼します、楯無先輩！」

兎に角急ごう。

レナルドはISを待機状態に戻してから走って教室へと向かった。

前に遅刻した時は、複雑な事情もあったので反省文三枚で許された。

けれどもし次、もう一度遅刻したならば。

(仏の顔は三度までだが、ブリュンヒルデの顔は一度までだ。

奇跡的に一度は最小限の被害で済んだのに、それに二度目があれば……………)

銃殺刑。

不吉な単語が脳裏を掠める。

ちなみにブリュンヒルデというのはモンド・グロツソ総合優勝者に与えられる最強の称号だ。

そして織斑千冬は初代ブリュンヒルデである。

故にレナルドは走った。

幸いにして彼は長い軍隊生活の恩恵で、体力は人並み以上にある。10kmほどの距離ならば鼻歌交じりに完走するだろう。それでも間に合うかどうか。

「 見えた」

あれこそが目指したゴール。
どうやらまだ担任は来ていない。ならば。

「 その情報、古いよ」

なんだか扉の向こう側から声が聞こえたような気がするが、そんなものはどうでもいい。

今分かつている現実。それは急いで教室に入らなければ遅刻するという一点のみだ。

だからこそ、レナルドは勢いよく教室の扉を開き、中へ突撃した。そこに何があるかも知らずに。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単じゃぶげらっ

」

ぶつかる。レナルドと女生徒が。

どうやら扉の背を預けるように立っていたらしい女生徒は、猛烈な勢いで入ってきたレナルドに突き飛ばされ、そのまま吹っ飛ぶ。哀れ女生徒はそのまま壁に頭をぶつけ、動かなくなつた。

「……………」

「……………」

「……………」

向けられる無数の視線。

セシリアが箒が、呆然とレナルドを凝視している。

「あれ、こいつ鈴じゃないか！」

クラス中が『今直ぐに保健室に連れて行くべき』という事を思い出したのは、一夏のKYな発言のお陰であった。

FLIGHT 6

麗しき 生徒会長（後書き）

今回もなんだか後半の鈴でシリアスが破壊されたような……………w

ISは殺伐としてないので書いていて気分が楽です。修羅場はあり
そうですがw

義を見て為さざるは、勇無きなり。

この世の中、自分の信じる正義を実行できる人間がどれだけいるだろうか。

街で不良に囲まれている老人がいたとして、そして自分に不良と戦う力がなかったとして、どれだけの人間が立ち向かえるだろう。戦う力があるのならばいい。その暴力で不良を退散させるなりすればよいのだから。けれど暴力がなければ……。だからこそ人は軍事力という名の暴力を無くす事が出来ないのだろう。

一時間目の授業が終わり、保健室にはレナルド、セシリア、箒、そして一夏が集まっていた。ちなみに一夏だけは付き添いで一時間目が始まる前からいる。

ベッドで眠るのは、当然ながらレナルドが激突した東洋人だ。

「それで、こいつ誰だ？」

箒とセシリアが口を開かなかったので、代表してレナルドが問うた。

「誰も何も………あ、そうか。箒とレナルドは知らなかったのか」

一人だけ合点が言ったという風に頷く一夏。
当然、箒とレナルドには理解出来ない。

「一人で納得してないで、さつさと吐け。
ええと名前が鳳鈴音って事はジャパニーズじゃなくてチャイニーズ
だろう？」

何て純粋な日本人のお前が中国人と知り合いなんだよ。
中華のナンパストリートで、女でも漁ってたのか？」

「なっ、一夏！」

「見損ないましたわよ、一夏さん！」

「ちょっと待った！ 箒もセシリアもそんな目で俺を見るな。
そんな馬鹿みたいな事してねえよ。レナルドも変なこと言うなよ」

「ほんのジョークじゃないか」

レナルドが肩をすくめる。

別にレナルドも本当に一夏が女漁りをするとなんて思っただけはない。
そんな器用な事が出来ない奴だというのは良く知っている。

ただ何処の世界でも男だらけの社会で生きると、このような発言
が稀に自然と出てしまうようになるというだけ。他意はない。

「ま、まあそんな事だろうと思いましたわ。

この私とした事が、こんな野蛮人の言葉を鵜呑みにするなんて」

「黙れハルマキ。お前は言葉じゃなくて料理でも鵜呑みにしろ。」

勿論イギリス特有の便所の糞にも劣る不味い料理をな」

「下品ですわね、これだから野蛮人は」

「俺が野蛮人ならば、その野蛮人より不味い料理しか作れないイギリス人は一体なんなんだ？

狗か？ 猿か？ 雉か？ キビ団子でも貰って尻尾振ってる」

「……………」

「待て二人とも！

セシリア、兎も角ISを展開するのは止める！ レナルドもお願いだからナイフを仕舞え！

もし保健室で乱闘騒ぎなんてしたら千冬姉に殺されるぞ！」

「……………ッ！」

それは確かにヤバイ。

アリーナなら兎も角、保健室でやり合えば良くて停学。悪くて私刑だ。それにレナルドは決して短絡的な男ではない。自分と恐敵との間にはIS操縦者として純然たる差が横たわっている。勝機があるとしたら一瞬。一秒以内に意識を刈り取るしかない。恐敵と自身との距離は2m。相手が一般人なら十分であるが、セシリアも押しも押されぬ代表候補生。熟練した兵士五人分の力量はあると考えたほうがいい。

(いやいや、少し落ち着こう)

つつい如何にして目の前の敵を排除しようかに、思考がずれてしまった頭を元に戻す。一夏の言う通り保健室で戦うというのは、

ベッドで横たわる中国人や保健室の先生にも迷惑が掛かるし、なにより千冬が怒る。なので仕方無にナイフをしまった。

セシリアもレナルドと同じようにで渋々であるが待機状態のISから手を放した。

「まったく病室で事を構えようとはどういう神経をしているのだ」

箒にまで怒られる。

しかし言っている事が正しいので反論できない。

「話を戻そう！ で、結局こいつは何処の誰で、お前とはどういう間柄なんだ？」

仕切りなおすようにレナルドが言う。

そうなる箒とセシリアの視線が再び一夏に向いた。

「誰も何も幼馴染だよ」

「「幼馴染？」」

「ほら箒が引越したのが小四の終わりで、レナルドはそのちょっと前だろ。」

この鈴が転校してきたのは小五の頭だから………丁度入れ違いなんだよ。で、中二の頃に中国へ帰ったから会うのは一年ぶりだな」

「なんだ、そうだったのか……」

そういえばアイスランドに帰国して直ぐだったか。衆愚政治にまで墜ちた民主主義を打倒する為に共産主義者達がアイスランド東側で蜂起したのは。

チャイムが鳴った。

これは予鈴。だから授業はこれから五分後に始まる。

「さて、そろそろ戻るぞ。」

「夏も。二時間目には戻るようにと先生も言っていたぞ。」

「あ、ああ。」

幸い鈴は精密検査の結果、ただ気絶しているだけとのこと。

なんでも寝不足気味だったらしい。

IS学園には各国の重要人物であるIS操縦者が一箇所に集う場所であるので、名前は保健室でも実際には大学病院並みに設備がある。なのでこのような時は非常に便利だ。

「そつだな、戻るか。」

「一夏の一言で取り合えず皆教室に戻る事にした。」

レナルドもそれに続く。謝罪は目が覚めてからにしよう。

「さてと、ここだったな。」

素早く昼食を終わらせたレナルドは、やや早足で生徒会室へ向かっていた。

理由は単純。三時間目の休み時間のおり、当の会長ご本人から昼休みに生徒会室に来るよう言われたからである。幸い学園の地図は用意済みだ。

やがて生徒会室の前に到着する。
伊を決して中に入った。

「失礼します」

思ったより広い。

流石はIS学園。いや、学園最強の本拠地というべきか。

レナルドを出迎えたのは、眼鏡をかけた如何にも仕事が出来そうな女生徒だった。

「ようこそ、生徒会室へ。会長から話は聞いているわ。レナルド・レステンクールくん。」

飲み物は紅茶とコーヒーの

「コーヒーで！」

即答した。

コンマ一秒の間もなく。

「そ、そう。じゃあ会長が帰ってくるまで待っていてね。その椅子にでも座って。」

直ぐにコーヒーを用意するから」

「ありがとうございます」

お礼を言って椅子に座る。

すると目の前に見知った人物が一人。

「おろ、確かおたくは」

「あれ、れすてんだ。おはよー」

確か名前は布仏本音、クラスメイトだ。

此処にいるという事は彼女も生徒会役員なのだろう。かなり意外であるが。

それとどうでもいいが、今まで「レナ」やら「ドナルド」なんて言われてきたが「れすてん」と呼ばれるのは始めてだ。

「……………今は昼だぞ」

「へえ、じゃあこんにちわー」

「はあ」

相変わらずマイペースな人だ。

けど仮にも生徒会役員。もしかしたら途方もない戦闘力が秘められているのかもしれない。

「どうぞ」

コーヒーが置かれる。

「感謝します……………おお、これは」

空軍一のコーヒー狂と畏怖されたレナルドを満足させるほどの味。どうやらこの眼鏡の女性はかなりのやり手のようだ。

「お気に召しましたか？」

「ええ。どこのハルマキとは大違いです」

イギリス人は馬鹿の一つ覚えのように紅茶ばかり。前回は引き分けという無念な結果に終わったが、次こそはコーヒ―こそ世界一ということを証明しなくてはならない。と、レナルドが再び再戦の意志を固めていたところで。

「皆揃ったみたいね」

麗しの生徒会長の声がした。

「おかえりなさい、会長」

眼鏡の女性が挨拶した。

「うんうん。ああ、紹介するわ。本音のほうは分かるわよね。同じクラスだし。こっちが布仏虚。本音ちゃんの姉」

「姉、ですか……」

そう言われれば何処と無く顔の造形が似通っている気がする。性格は似ても似つかないが。

「それで如何して俺を呼んだんです、先輩」

「如何してって、手伝いだよ手伝い。生徒会の仕事を。一応これでも会長だからね」。仕事はしっかりとしないといけないし。

こうやって昼休みに仕事を片付けちゃえば放課後も時間が沢山とれるでしょ」

「……………なんだか、すみません。俺の為に」

「いいんだよ。私が好きでやってるんだから。」

それに、隠れた努力家っていうのおねーさんは嫌いじゃないしね。あ、でもおねーさんと言っても年は私と同じか」

「ええ、一応。」

俺は中学すら満足に卒業していなかったのだから」

東西戦争のおり人材不足に悩んだ軍は、遂に学徒出陣に踏み切った。

といつても流石に最低限のモラルがあったのか、形としては徴兵ではなく募兵。レナルドはそれに応募してパイロット短期育成コースへと編入されたのである。

卒業証書を受け取ったのは、短期集中コースでの宿舎でのことだ。そして戦争が終結したのが丁度去年の五月。高校に入ろうと思えば除隊して入れたが、軍での生活にも慣れてしまったし、結局高校には行かず軍に残ったのだ。だからレナルドは本来なら高校二年生でありながら高校一年生なのである。つまり会長と同じ年ということだ。

「そっか。なら別にタメでもいいよ」

「いえ、年は同じだけど学年は違いますから」

「わりと真面目だねー。それじゃあ仕事をさっさと済ませちゃおうか。」

タイム・イズ・マネー、時は金なり。時間は有効に使わないとね」

尤もお言葉だ。

レナルドは息を吐いて、書類作業へと取り掛かった。

怠情は、おだやかな無力から生まれるものである。

無力というのは嫌だ。反攻する事も意見することもなく、その権利は無視されるから。

だが無力は罪だろうか。異端であるというのは悪足りえるだろうか。そして弱者とは本当に、弱者なのだろうか。

全ての授業を消化し、誰もいない第三アリーナへとやって来る。

そこで待っていたのは更識楯無。IS学園の最強にして生徒会長。

「申し訳ありません。待たせてしまって」

「いいよ。けど、なんだか恋人同士の待ち合わせみたいだね、レナルドくん」

「いやあ、そうだったらいいんですけどね」

曖昧に笑う。

確かにこの生徒会長はルックスこそトップクラスなのだが、どうにも腐れ縁のウサ耳とテンションが似通っているので苦手だ。

実力もウサ耳と同じで規格外。

(IS学園は広いな……)

流石は倍率一万倍。

生徒の質だって他の学校なんて到底及ばない。

もし仮に自分が女だとして、そしてIS学園を目指して努力したとしても、入学出来る確率はごくごく低いだろう。

「早速始めようか。手始めに初歩の初歩。

ISを起動させる事からだけど」

「……………はい」

レナルド・レステンクルの最初にして最大の壁。

それが起動時間の長さである。

これをどうにかしない限り、どれほどISの操縦が熟練していてもレナルドは三流のままだ。

「実を言うと、こういう例がない訳じゃないんだよね」

「そうなんですか!？」

「そう。特に君のように、ISじゃなくて通常兵器に熟練した人なんかは特にね」

「俺のように……………」

「なまじ普通の兵器に慣れ親しんでしまった分、ISという全く新しい概念の兵器に対応出来なくなる、って言えば分かり易いかな」

「戦闘機から戦車に乗り換えるようなものですか?」

「ちよっと違うかな。」

戦車や戦闘機っていうのは当たり前過ぎる兵器。戦闘機と同時代のね。

けどISは違う。

ISはただトリガーを引いただけじゃ弾丸は出てこない。

しつかりとイメージ出来なければ、満足に起動させる事すら不可能。従来の兵器とは何もかもが違う」

パチンつと扇子を開く。

何故か扇子に描かれた文字は『浪漫』

そういえば先程見た時の文字は『鍛錬』であつたが、何時の間に入れ替えたのだろうか。

「成る程……」

自分の中にある疑問が氷解していくような気がする。

思えば、どうもISをイメージするというのが苦手だ。起動も銃も、全てが。

「そうだな。それじゃアレナルドくん」

「はい」

「ISを体に纏う、じゃなくてISに乗り込むようなイメージでやってみてくれるかな？」

「乗り込む、か」

やってみる。

ISを纏う、ではなく搭乗する。

従来の兵器と同じように

乗り込む。

「でき、た」

五分どころじゃない。

掛かった時間は、ほんの、十秒。

「ほら。コツを掴めば簡単でしょ。

それと同じようにアサルトライフルもショルダーから出すようなイメージで」

「分かりました」

軍服を着ている自分をイメージして、そして銃を取り出す。

一瞬、粒子が周囲に舞う。

手にはアサルトライフルが握られていた。掛かった時間は七秒。

「これで起動はもういいね。コツを掴んだら後は数をこなすだけだから。

後は一人でも練習できるよ」

「ありがとうございます、先輩！」

深くお礼を言った。

それにしても本当に教えるのが上手い。

箒なんて長島式というのに。あのハルマキに到っては意味不明な事をほざくだけで全く意味が分からない。ハルマキの限界というところが。

「うーん、後は操縦なんだけど……………大丈夫？」

「それなら、なんとか」

最初こそISを動かす事すら手間取ったが、自分の体の延長線
と思えばどうにか動かせることが出来た。といっても”地面を動く
”だけ。

大地を這いずり回る事は出来てもソラを飛ぶことは出来ない。

「うんうん　その顔分かるよ。」

自分は地面じゃなくて空を飛びたいからパイロットになったんだっ
ていう目だね」

「！……………何で、それを？」

「うん。別に大した推理じゃないよ。」

ただレナルドくん。君ってよくぼくごとく空を眺めている事が多い
しね。

空軍のパイロットになったのも、そこら辺が理由かなと思ったの
よ」

まったく最強なのは力だけじゃなくて推理力もらしい。

文武両道とはこの人の事を言うのだろうか。

「まあ大まかには。」

けど陸軍や海軍じゃなくて空軍のパイロットにこだわったのは、ど
うせ戦争行って死ぬなら、地べたじゃなくて、昔っから憧れてた空
が良かっただけですよ。

何の因果か、こうして五体満足で生きてますけどね」

「駄目だよ、そんな言い方しちゃ。」

生きてるだけでも儲け物と思わなきゃね」

「そう、ですね」

言われてみればそうだ。

幾らISのせいで空が飛べなくなったのが悔しくても、死んでいれば悔しがる事すら出来なかったのだ。生きているだけでも自分は幸運だ。

会長が笑っているのが、妙に神秘的だった。

「ふう〜〜〜〜」

やはり体を動かした後にシャワーを浴びるのは良い。

一日の疲れが流れ落ちていくようだ。

結局、会長とあれから二時間みっちり飛行訓練をした。最初こそ駄目駄目であったが、最後のほうは形だけは何とかなっていたと思う。

「しかし本当に凄い人だった……」

教え方も上手いというより巧いのだ。

一つ一つが要点を射ているというか、言い表せないが更識楯無の教えは、すんなりとレナルドの頭に浸透していった。まるでスポンジが水を吸収するように。

シャワーを止める。

体を拭いてGパンだけ履いて出た。

一夏にシャワーが空いたことを教えなければ。

レナルドは訓練の出来が上々だった事もあり思いつき扉を開い

た。

「うりい！」

変な叫び、というより呻き声。

見ればドアの前に何時かの中国人が倒れていた。

理由は分からないが、どうやらこの部屋から猛烈な勢いで走り去ろうとした所、自分が扉を開いたせいで激突したらしい。

「あー、大丈夫か？」

「いつう〜」

幸い前と違い意識はあるようだ。

顔を抑えながら中国人の少女が立ち上がる。真っ赤な鼻血が生々しい。

「アンタ！ 今日、私を後ろから突き飛ばしたっ！」

「……その折は、すまなかった」

「この、馬鹿ア！」

中国人のグーが迫る。

避けようと思ったが、今日の朝の事と今の出来事が思い出され。

(目には目を、齒に齒を……)

目を瞑り、そのパンチを受けた。

そのまま吹き飛ばされる四肢。流石は中国四千年の神秘。

素晴らしい威力のパンチだ。

「ふん！」

走り去っていく中国人。

それを床に倒れながら、呆然と見送る。

やばい。どうやらあのパンチの威力は強烈だったようだ。もう意識が……………。

「なあ、大丈夫か」

一夏が心配そうに声を掛けてくる。

「いや、これは駄目だ。

それにしても一夏。お前の幼馴染というのは誰も彼も、途方もない戦闘力、を……………」

そのままレナルドは意識を手放した。

だけど一つだけ学んだ。

一夏の幼馴染の性能は化物だ。

FLIGHT 8 会長からの訓示（後書き）

このSSの不幸大賞は……鳳鈴音に、決定ですね。

鈴ファンの皆様、申し訳ありませんでした。

FLIGHT 9

すぶたのなく頃に（前書き）

えー、変なテンションで執筆していたら変な話になりました。

はっきり言いましょう。色々と無茶苦茶です。

恋が狂気でないとしたら、そもそもそれは恋ではない。

正直に言えば恋に狂ったことが一度もない。

ルックスは良かったし、空軍のエースともなれば女にモテるから、そちらに苦労した事はなかったが、長続きの事はなかった。

何時も中途半端に、終わる。一年以上続いた事がない。

それは、愛に狂ったことが、一度もなかったからだろう。

「それで、理由を説明してくれるよな」

「お、おう」

強烈な一撃を貰って気絶してから数時間。

漸く覚醒したレナルドは一夏に事情を問いただしていた。

「あの中国人がお前の幼馴染なら、この部屋にくる理由は分かる。一年ぶりくらいの再会なら誰でも懐かしくて会いたくなる、ああ、それはいいさ。ただ何であんなに怒ってたんだ？」

「それなんだけど………実は酔豚が」

「酢豚？」

酢豚と言うとあれだろう。

中華料理の酢豚だろう。確かに彼女もチャイニーズだが、一体何の関係があるのか。

「ああ、酢豚を奢ってくれるって言うのを思い出したんだよ」

「は？」

意味が分からない。

いや、そのままの意味として受け取るのであれば、さっきの中国人が一夏に酢豚を奢るといって、それを一夏が思い出したら、中国人は怒ったということだが。

「それが前に鈴と『料理の腕が上がったら毎日酢豚を奢ってくれる』って約束したんだよ。だけど何故かそれを言ったら怒られて……」

「毎日、酢豚を？」

それは随分と太っ腹だな。胸は小さいのに」

「……………お願いだから、それ絶対に本人の前で言うなよ。かなり気にしてるから」

それにしても、酢豚か。

最後に食べたのは何時だったか。

けれど酢豚。酢豚といえば豚。豚といえばピク。つまりは。

「酢豚の隠し味はレッドブルだな」

「その心は」

「飛べない豚はただの豚」

「うまい！ 座布団一枚！」

そんな馬鹿を言っている場合でもない。
しかし酢豚か。酢豚といえば。

「あとルームメイトに女が一人欲しいところだな」

「その心は」

「ブタもおだてりゃ木に登る by おだてブタ」

「うまい！ 座布団一枚！」

男二人じゃ駄目だ。

やっぱりドロ ジョがないと。
しかし酢豚か。酢豚といえば。

「マイホームでも購入するか」

「その心は」

「三匹のブタ」

「うまい！ 座布団一枚！」

やっぱり家は藁でも木でもなくてレンガの家だな。
けど最近ならコンクリートもありかも。
しかし酢豚か。酢豚といえば。

「マラカスを振りたいな」

「その心は」

「救いのマラカス。いでよブリブリざえもん。クラスはセイヴァー」
……………ブタだけに」

「うまい！ 座布団一枚！」

「ブタがブツダってか」

それにしてもブツダか。

酢ブツダを奢ってくれる……………まてよ。酢ブツダ？

そもそも仏陀とは一体誰だ？

インド人？ H O T O K E ?

つまり酢ブツダというのは仏にお酢をかける行為であり……………。

「俺は何を意味のわからない事を考えているんだ？」

「どうした？」

「なんでもない」

軽い自己嫌悪に陥る。

どうやら中国人のパンチのせいで脳味噌が混乱しているらしい。

「それで酢豚か……」

「何か分かったのか？」

「いやいやヒントが足りない。しかし何故酢豚なんだ？ 確かに彼女は中国人だが、それと何か関係があるのか……」

「ああ、あいつの家って中華料理屋だったんだよ。それで何度も食べに行ったっけな」

「！」

そうか。

そういう事だったのか。

「謎は全て解けた」

一度言ってみたかったセリフを言う。
気分はさながら江戸川コ ンくんた。
蝶ネクタイと麻酔銃がないのが悔しい。

「毛利君。犯人は誰なのかね？」

流石は一夏。

よく分かってる。いや違う。

今の一夏は織斑一夏であって織斑一夏ではない。

彼は……… 目暮警部だ！ ちなみに本名は目 十三。

「警部殿、実はそもそも間違いは最初からだったのです」

「最初からあ？」

「そう。鳳鈴音にショックを受けさせ、そして間接的にこの私の顔を陥没させた犯人は。」

貴方だ！ 目暮警部……………じゃなくて織斑一夏

！

「な、なんだって!？」

「いいですか、ヒントは三つッ！」

「いやそれコンじゃなくて探偵 園Qだろ」

「細かい事を気にするな……………兎に角！ 問題となるのは三つ」

『幼馴染』

『中華料理屋の娘』

『常連客』

「これ等を一つ一つ整理していけば、自ずと正解は導き出せる」

「おおお！」

「一つ目のヒントである幼馴染。」

これ自体に特に謎はない。

”織斑一夏は鳳鈴音と幼馴染である”これは赤で宣言されている

「今度はうみ こかよ！」

妙な事を口走る一夏を置いて話を進める。

ちなみに、あのラストはないと思う。更に余談だが” が赤で『
が青だ。

分からない人はWIKIPEDIAで。うねこのなく頃にとって
検索すれば出てくるから。

「『織斑一夏の証言に嘘がある可能性がある』！」

「な、何の証拠があつて……。」

大体、そんな事を嘘ついてどうするんだよ」

「そう返してきたか。”人間は物事を忘れる生き物”！

だから『一夏が鳳鈴音との約束を正確に記憶していない』という事
態が十分考えられる！

復唱要求！【織斑一夏の記憶は正確であり、過去の約束を一言一
句完全な形で記録している】！」

「くっ……復唱を拒否する……自分の記憶に自信がもてない」

「認めたな。つまり”織斑一夏の証言した約束は正確ではない”。

故に”織斑一夏と鳳鈴音との間で約束の齟齬が発生している”！
『鳳鈴音がその齟齬が原因で怒った可能性が高い』！」

「そうか、それで！」

「驚くのはまだ早いぞ。

次は二つのヒント。

即ち”鳳鈴音は中華料理屋の娘”と”一夏は常連客”
その二つを解き明かす。

では復唱要求！「鳳鈴音は一人娘である」！」

「そうだ。」鈴は一人娘だ”
他に兄妹はいない。俺の知る限りじゃ」

「それが聞きたかった。」

先程の復唱要求そしてヘンペルのカラスにより、

『鳳鈴音を中華料理屋の店長後継者と仮定する』！

その仮定により、『鳳鈴音が次期店長として厳しい特訓を受けていた』
という推理が成り立つ。

しかし”料理には味見する人間が必要だ”

店長や料理関係者は勿論だがお客の生の感想、これも必要だ。

恐らく鳳鈴音は『織斑一夏に味見をさせるつもりだった』！

何故ならば”幼馴染”だから！

しかし”鳳鈴音は中学二年生の頃に転校してしまい会えなくなってしまった”！

ただ彼女が努力を続け『一年後の今日、遂に自他共に認める至高の酢豚を誕生させることに成功し、実際に店頭に並ぶレベルに達する』！

「まさか！」

「気付いたようだな。」

ヒントは三つ。そして真実は一つ。

つまり鳳鈴音は……『一夏にお前の酢豚は無料が精々だ』と言われたと感じたんだ」

「奢るっていう事は無料だからな。」

美味さが高さに比例する、なんて言つつもりはないけど……そうだ

ったのか」

「直ぐに謝って来い」

「ああ。お前の酢豚は”千円出す価値がある”って言えば許してくれるよな」

一夏は良い笑顔で部屋から出て行った。

これで全て解決だ。

「全然違っわよっ!」

その推理が完全なる間違いだったと知ったのは、
クラス対抗戦が終わった後だった。

FLIGHT 9

すぶたのなく頃に（後書き）

次回こそ……………シャルル陛下とラウラを……………

男が妻に対して不実をおこなったら、女は同情のまとなる。女が不貞を犯したら、男は嘲笑のまとなるだけだ。

俺の父は、俗に言う女つたらしだった。愛人を自宅に連れ込むなんて朝飯前。しかも自分の息子の前で平然とラブシーンをやるものだから始末に終えない。

本当に、父親としては最悪の男だった。

クラス対抗戦から数日。

なんだかんだで一夏も胸のない中国人と仲直りしたらしく、今ではちよくちよく自分と一夏の部屋に来るようになった。

その際に自分の格好（上半身裸にGパンだけの姿）を見て激怒されたりもしたが、まあそれはどうでもいい。

何故か中国人だけじゃなく箒やハルマキにまで文句を言われたが直す気はない。

その際に常識がどうのこうの、モラルがどうのこうのと、言っていたが失敬である。これでも世間一般でいう常識くらいは理解している。

自室という自らのテリトリーなら兎も角、廊下では上着をしっかりと着る。

ジャパンの旅館というのは旅館内ならテリトリーらしく浴衣とかいう動き難い服を着ているが、西洋のホテルは自室だけがテリトリーなのだ。当然上半身裸や寝巻きでは歩き回らない。

それに寝る時は上半身裸にGパンか全裸！

これはこの十七年間の人生で身に着いた習慣である。

インド人がカレー食べるのと同じ、巨人ファンが阪神が優勝して不機嫌になるのと同じ習慣だ。

これを変える事など絶対に出来ない。

さてIS学園は今日も平和である。

遅刻した女生徒が織斑先生に怒られて何故か悶えている事や、一夏が美少女二人とハルマキに囲まれたりしているが、概ね世界は平和だ。

「れすてん、これで、もう逃げられないよ」

「なんとっ!!」

戦力差は絶望的だった。

のほほんと笑うのほほんさん。

そして退路を全て封じられ逃げる事が出来なくなった状態。

全面には無数の兵士。背後には龍。

これは……………もう、無理だ。

「負けました」

「おお、勝ったー」

「はあ。まさかのほほんさんに負けるなんて…………」

この国では不慣れな事も多いかと思いますが、皆さん宜しくお願ひ
します」

にこやかに転校生の一人、シャルルが告げた。

しかし何故だろうか。シャルルという名前に聞き覚えがあるよう
な気がする。いや歴史上の人物に『シャルル』という人物なんて腐
るほどいるのだから当然といえば当然だが、もっと宇宙意志とい
うか根源というか、そういう根本的な意味で近い場所に『シャルル』
という人物がいるような気がするのだが……………。

(何故だ。シャルルと聞くと……………チクワを、思い出す)

シャルルと名乗った少年を見る。

チクワは……………ない。髪は濃い金髪。中世的な顔立ちで『お
ボク』の主人公を張れるくらいの逸材だ。美少女にも見間違えるそ
の雰囲気は、嘗ての自分の部下を思い起こさせた。

そういえば現在自分が隊長を勤めていた『ナイト小隊』はロンが
隊長代理を務めているらしい。まあなにせよ頑張れだ。

「きゃ……………」

一人の女生徒がそうもらす。

レナルドはこれから起こる出来事を予測し、両手で耳をふさいだ。

『きゃああああああああああっ!!』

爆音。

或いは台風とでもいうべきか。女子の歓声は瞬く間にクラス中に
伝播する。

「男子！ 三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

騒がしい。

どうやら男だらけだろうと女だらけだろうと、性別が一緒の者が大勢集まれば騒がしくなるという鉄則に違いはないようだ。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

織斑先生の鶴の一声で騒がしかった教室が静まっていく。流石、としかいいようがない。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから」

そこでクラス中の意識が、もう一人の転校生へと向けられる。

男であるシャルル程ではないが、もう一人の転入生である彼女も一際人の目を引くような異端であった。

蛍光灯のヒカリに反射され輝くような銀髪のロングヘア。綺麗ではあったが整えられている様子はなく、ただ切らなかつたら何時の間にか伸びていた、というようなイメージ。

極め付きは左目の眼帯。それもB級アクション映画に登場する大佐がしてそうな黒いソレだ。

成る程、彼女には自分と同種の職業、即ち軍人の臭いがする。

「……………」

当の本人は相変わらず口を開かない。

ただ腕を組んで、まるで見下すように生徒達を見るだけだ。

「……………挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

ラウラというらしい少女が、確かな尊敬の色を乗せて返答した。どうやら彼女も少なからず織斑千冬という伝説に憧れを抱いているらしい。

（まさか生粋のM属性、っていうようなオチは止めてくれよ）

レナルド・レステンクールは数年の軍隊生活のせいか、基本的に他人の性癖に関しては寛容だ。

友人の一人にはゲイの奴もいるし、熟女好きの奴もいるし、レズの女もいる。

だがさすがの彼も「お姉様、もっと罵って〜」とか蕩けた目で懇願する生徒のことは理解し難かった。というか出来れば関わりたくない。

ゲイやレズはまあ理解出来る。彼等はただ自分と同姓の者を愛してしまうというだけで、自分達と何の違もない人間だと確信しているからだ。無論、自分は女が好きだが。

（けど幾らなんでもM属性ってというのはな……………）

はつきり言ってひく。

理解出来ないし、理解したいとも思わない。

けれどレナルドは別段他人の性癖に口出しするほど野暮な男でもないので、結局は放置という方向に落ち着くのだが。

(もしこいつも同じタイプだったら、最悪だな)

最悪というよりは悪夢だ。

あの生真面目そうな顔で「私を奴隷にしてください」だなんて千冬に言い出したならば、もう色んな意味で悪夢だ。即刻この小説はノクターンしなければなくなるだろう。

だけど幸か不幸か、ラウラという少女にはその趣味はなかったよ
うだ。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。」

私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

もう一度注意深く聞くが、その声色に『尊敬』はあっても『情欲』はない。

つまりラウラという少女は、少なくとも織斑千冬に恋心は抱いていないという事。

取り敢えずは一安心だ。

ラウラという少女は伸ばした手を体の真横につけ、足を踵で合わせて背筋を伸ばしている。

やはり軍人だ。間違いない。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

沈黙。クラスメイトは続く答えを気にしているが、ラウラが次を

言う気配はない。

それにしても『ラウラ・ボーデヴィツヒ』。
どこかで聞いた事がある。確かあれは軍事関係の雑誌で……。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

山田先生が悲しそうな顔になる。しかし今のラウラは気にした様子もなく、つつかかと歩いていく。目指しているのは一夏の席。

「貴様が」

レナルドは見た。

少女の手の平が一夏に迫るのを。そして、パシンッ、そんな音。
織斑一夏はラウラ・ボーデヴィツヒに殴られたのだ。

「いきなり何しやがる！」

必然。一夏が怒って立ち上がる。

それはそうだ。幾ら相手が美少女だろうとオカマだろうと突然殴られて怒らない人間なんて、それこそM属性の変態くらいだろう。

「ぶん……」

対するラウラは一夏の言葉を意に返そうともせず、すたすたと去っていく。

その様は実に冷たい水のように……まで。冷たい水？

「そうだ、思い出した！」

黒ウサギ隊のラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ！」

何故こんな事を忘れていたのだろう。

ラウラ・ボーデヴィツヒといえば、ドイツにある十機のISSのうち三機を保有している独軍最強部隊の隊長の名前だ。顔こそ知らないが、その名前は雑誌で何度か見た事がある。

と、気付けばクラス中の視線が自分に集中していた。

それもそうか。なにせ突然大声でラウラという転入生の情報を喋ったのだ。注目を浴びるなというほうが無理がある。

そして当のラウラは何故か驚愕したような顔つきでこちらに歩み寄ってきて、レナルドの前に来るとピタリと止まった。

「すまない。貴官はレナルド・レステンクール大尉で相違ないか？」

「あ、ああ。今は少佐だけだ」

どうしてそれを？

その言葉はラウラが次にとった行動で吹っ飛んだ。

「サインを、くれ」

「はい？」

どうやら自分の学園ライフは平穩を失ったようだ。

思えばこの時からだろう。

レナルド・レステンクールが部外者から当事者へと変化していったのは。

だけどまだ彼は、まだそんな変化に気付きもしていなかった。

「わしが神聖ブリタニア帝国第九十八代皇帝シャルル・ジ・ブリタニアであるう！」

『……………』

言葉が、出ない。

というより色々は無茶苦茶だ。

確かに名前は『シャルル』だろうが、色々と出る作品を間違っている。

「学生は！ 平等ではない……………」。

生まれつき成績の悪い者、スポーツ万能な者、オタクな者、変態性欲を持つ者、

点数も性癖も才能も、学生は皆、違っておるのだあ。

そう、学生は、差別されるためにある！

だからこそ学生は争い、競い合い、そこに新たなリア充うが生まれる。

リア充は！ 悪ではない……………。リア充の定義を決め付けることこそが悪なのだ！

萌えを平等にしたEUはどうだ。全員がメイドインヘヴンしておるう。

彼女を重視した中華連邦は……………。高校生のお母さんばかりい。

だが、我がブリタニアはそうではない。争い競い、常に学級崩壊を続けておるう。

ブリタニアだけが前へ！ 破滅へと進んでいるのだ。

我が息子シュナイゼルの非行も、ブリタニアが学級崩壊を、続けているという証。

闘うのだ！ 競い奪い獲得し支配する。その果てに、新たなリア充がある！！

オール・ハイル・ハイスクール！！！！！！

」

そしてもう一人の転校生は……。

「我がナチスの科学力はアアアアアアアアア 世界ーイイイイイ
イイ」

さて、これは夢だ。

寝よう。寝るしかない。

目の前にいるチクワ皇帝とナチス軍人はなにかの幻覚だ。
そうだ。そう思うしかない。

「オール・ハイル・ハイル・ハイスクールツ！」

「我がナチスのISはアアアアアアアアア 世界ーイイイイイ
イ」

もう嫌だ……。

早く退学届けを提出しよう。

FLIGHT 10 転入生 二人（後書き）

えー、なんかラストに皇帝が御入来されましたが……本編とは関係ないです。たぶん。

FLIGHT 11 無自覚な対応

老人に忠告するのは、死人に投薬するようなものだ。

よく年寄りには頭が固く考えを変えないというが、それは違うと考えている。

老人は考えを変えないのではない。変える事が出来ないのだ。

六十年、七十年、八十年と生きてきた老人にとって自分の考えというのは一つのアイデンティティだ。それを変えるというのは、今までの自分の人生を否定する事に他ならない。

今日何度目になるか分からない沈黙。

そう今クラスは静まっていた。

恐らく、転校生の全く以て予想外な言葉に。

「失敬。サインって……………何で？」

少なくとも自分はTV画面の向こう側で活躍する芸能人ではない。なので赤の他人、それもドイツ人にサインを強請られる様な事をした覚えはないが。

「貴官の高名は聞き及んでいます！」

若干十六歳でありながら21機の戦闘機を撃墜したエース、と。

お会いできて光栄です、少佐！」

(そういえば会長が意外と有名みたいな事を言ってたっけな。成る程、民間人じゃなくて軍事関係者にはちよつと知られている訳か)

「まあ、どうも」

取り合えず礼を言っておく。

それにこうやって誉められて悪い気分はしない。

特に最近、女には戦闘機なんて過去の兵器と見られてエースっていう看板も下に見られていたから尚いい。しかもこの女性はただの女性ではなく世界屈指のエリートであるIS学園の生徒だ。そんなスーパーエリートに尊敬されているだなんて空軍のパイロットとして鼻が高い。

「けどサインって何処に書くんだった？」

「あつ……………色紙を入手して出直してきます」

「そこまで畏まるなよ。ここでは同級生だし、階級だって同じ少佐だったろう」

「しかし……………」

「ですよね、織斑先生？」

「レステンケールの言う通りだな。

外では兎も角、このIS学園では代表候補生だろうと落第生だろうと等しく生徒である事に変わりがない。敬語は不要だ」

「了解しました、教官。
そしてレステンクールしょ……………いや、レナルド。これからも宜しく頼む。サインのことも」

「分かってるよ」

そう言っただけは、一度こちらに敬礼した後に着席する。

本当に素晴らしい対応だ。どこぞのハルマキとは大違いである。

決めた。自分が将来アイスランド軍の重鎮やら政治家になった暁には、ドイツ軍と同盟を結ぼう。

それがいい。そしてイギリスを火の海にしてやる。紅茶なんて廃止だ。この世から消し去ってくれる。

「紅茶と言う存在が間違っている。

珈琲こそが至上にして最高峰。最強にして無敵。

そうこの世全ての原典とは珈琲也。

故に全てのルーツ、いや宇宙意識の根源こそ珈琲という一大文化を礎として生誕したといっても不思議ではなくコーヒー即ちデステイニー。

珈琲とは脳を活性化されることにより、人という哺乳類に新たなる新境地を到来させることも不可能ではない。つまり珈琲の珈琲による珈琲のための社会。神聖珈琲帝国を建国し、その首都をアイスランドのレイキャビクに制定。そして全世界を珈琲へとして、更なる珈琲の超化学及び超能力の発現。いやいや珈琲の魔術。学園都市ならぬ珈琲都市。レベル5。一方通行……………コーヒー変換、ビリビリ、帝督、ダース・ベイダー、青髪ピラス、幻想殺し、オール・ハイル・麦のん。麦のんこそ至上。麦のんとコーヒー。つまりはヤンデレ。ツンデレ、クーデレ、ヤンデレ。そして最終的な目標は最強を超えた無敵の珈琲。レベル6。未知なる根源。全世界、いやプロトカルチャーの遺産。珈琲・おぼえていますか……………」

「織斑先生えー。なんかレナルドくんが根源の渦に到達しちゃってます」

「気にするな。おい織斑とデュノア。コイツを男子更衣室に連れて行け」

「それにしても、一夏。

お前とこうして離れ離れになる時が来るとはな……」

「それ、聞く人が聞けば物凄い勘違いされそうだぞ」

今レナルドは一通りの荷物を纏め終わり、寮の自室から出て行くとしていた。

無論、家出という訳でも一夏と喧嘩をした訳でもない。

「ごめんね。僕のせいで……」

そう理由は転入生であるシャルル・デュノアだ。

寮の部屋は丁度偶数。即ちピツタリ。二人部屋を一人で使用している生徒はいない。

だから通常ならば二人の転入生がいた場合、100%の確率で二人は同室となるのだが、今回は通常とは違う。なにせシャルル・デュノアは男。

つまり本来ならば一夏やレナルドと同室なのが望ましいのであるが、生憎と三人部屋なんていうのは寮にはない。故に都合一人が女子 即ちもう一人の転校生であるラウラ と相部屋 という事態が発生してしまうのだ。

となると問題となってくるのは、誰をラウラ・ボーデヴィツヒと同室にするかだ。

一夏は論外。転入早々からラウラといざこざを起こしている時点で不味い。あの敵意と彼女が軍人という事から、最悪の場合として一夏が再起不能になる可能性もある。

シャルルは、一夏よりはマシであるが彼は比較的大人しい性格であるし、常時臨戦態勢のラウラと同室になったら……。と主にクラスの女生徒達が叫んでいた。

そして最後に残ったのがレナルド。

レナルドは一夏と違い敵意を抱かれておらず、寧ろ好感をもたれており、しかも国こそ違いが同じ軍人同士だ。なにかと適任だろうという織斑千冬直々のご指名で。

「こうなったわけか」

「どうしたの？」

「なんでもないさ」

それにしてもこの部屋とも今日でお別れか。

いや直ぐに別の部屋が用意されるとは思っけど。

流星に男子と女子相部屋なんて一時的なものだろう。

「さて一夏、餞別だ。」

これを俺だと思って大切にしてくれ。ヨヨヨ」

「おう……………ってこれエロ本じゃないかっ！」

「思春期の男子にとって掛け替えのないパートナーだろ。あ、ちなみにお前の好みに合わせて教師物と姉弟物の二つを用意した」

「知るかよ！ 大体このエロ本をどうやってお前と思うんだよ！」

「えと、もしかして趣味が合わなかったか。

仕方ない。じゃあこの『緊縛調教 墜ちた美人教師』というDVDを」

「お前の目から見て俺は一体どんな人間なんだ？」

「ええと……シスコン？」

「その情報は知りたくは無かった」

「じゃあこのス トロ物で……」

「ハードになり過ぎだ！ お前はこの小説をノクターン送りにしたのかっ！」

「いいじゃないか。ノクターン。」

ノクターンにして二人でIS学園を制覇しようぜ。性的な意味で」

「一人でやってろ！」

「三人寄れば文殊の知恵というだろうに。なあシャルル。お前も男として一緒にノクターンしようぜ」

「~~~~~」

レナルドが問いかける。
しかしシャルルは何故か石の様に固まっている。
一体どうしたのだろうか。

「おい、シャルル。生きてるか。欲求不満なのか？」

「はっ！ ち、違うよー！」

「まあまあ思春期万歳。ほらお前には俺が極秘裏に入手してきた秘蔵流出物を……」

「要らないよ、そんなの！」

大体、そういうのは……その、……十八歳になってからで……」

「生真面目だなシャルル。

お前のような奴を見ると………ダークサイドに墮としくなる」

「ひい！」

「おいレナルド。シャルルが困ってるじゃないか」

「一夏。まさかお前………」。

そうか。大丈夫、俺の友達にもお前と同じ性癖の奴はいた。
ゲイは病気なんかじゃない。一つの、個性だもんな」

「知るかア

「！」

何故か猛烈な勢いで一夏に部屋から追い出された。
しかしシャルルか。あれが男の娘というのだろう。

創作の世界にしかないと思ったが、実在していたとは。

「ええと、新しい部屋は……ここか」

扉を開く。

内装は殆ど元の部屋と変わらなかった。

しかし当然ながら。

「ラウラ。なんで服を着てないんだ？」

「私は寝る時は何時もこうだが？」

「……………そうか」

ならば仕方ない。

習慣とは人其々だ。その習慣を否定するという事は、その人物を否定してしまう事でもある。

なにより眼福であるし、問題ないだろう。

「寝るか」

その日の夜。

何故かチクワ皇帝と黒髪のコヤシが喧嘩している夢を見た。

ええと、レナルドがシャルにセクハラしたりラウラの裸を黙認したりした今回。

「なんだか」に到達していたような気もしますが、まあ大丈夫でしょう。

禁書いいですよね禁書、超電磁砲も。

とある騎士の肉体言語、なんて小説も面白いかもw

能力者や魔術師を、純粹たる肉体言語のみで撃破していくというハートフルストーリー。

さてそんな馬鹿話は置いて、次回もまた見て下さい。では！

アイデアの秘訣は執念である。

嘗て人々から無謀だ、馬鹿だと後ろ指を指された発明家達がいた。彼等は等しく不屈の執念でアイデアを生み出していき、やがて人は空へ羽ばたけるまでになった。

しかし彼らに”執念”がなかったのならば、人は何時まで経っても地面を這い蹲っていただろう。

思い起こせば、今までの人生の中で、あの時ほど惨めで真つ暗だった事はないだろう。

遺伝子強化試験体として、生まれる前から戦いを義務付けられていた私は、自画自賛ではなく、一つの事実として”優秀”だった。

体力、ゲリラ戦、戦術、戦略、戦車、戦闘機、狙撃。

ありとあらゆる成績において最高の成績を叩き出していた頃の私は、深い満足感に浸っていた。

私にとって戦う事は全てだ。生きる理由といってもいい。

このまま私は最高の軍人として、最高の戦士として生きていくのだ。

そう、何の迷いも無く思っていた。

それが変わったのが、あの時。

白騎士事件。

初めて大々的にインフィニット・ストラトス、通称ISが大々的に脚光を浴びた事件。

その日から世界は変わった。

一つの例外を除いて、各地の戦乱は一先ず矛を収め、次々にISの研究に乗り出していったのである。

それも当然か。

私はただ戦う事だけではなく、戦術や戦略についても叩き込まれている。

だからこそISという兵器が如何に凄まじいかが良く分かった。

女性にしか扱えない、という唯一の欠点を除けばISは無敵の兵器だ。

現存する他の兵器を圧倒する機動力、防御力、火力、そして戦う場所を選ばない汎用性。

それだけじゃない。なによりISは小回りが利く。

恐ろしい事だが非常にデリケートで膨大な計画と時間を必要とする作戦でも、IS一つあれば簡単にそれが可能となるのである。

強さだけじゃない。

確固たる理屈があつて、ISは最強の兵器だった。

だから、幸い女性であつた私にも、ISの技能を磨くように指令がくるのは当然といえた。

それが私の転機。

今まで最高の成績を叩き出していた私は、ISとの適合性向上のために行われたヴォーダン・オージエが何故か不適合で片目が金色

に変色。ISが上手く扱えず、軍からは欠陥品の烙印を押されるようになった。絶望。当時の私には絶望しかなかった。

私は戦うために生まれた！なのに戦えなくなければ、私はどうやって生きればいい。

だけど、そんな精神状態だったからだろうか。

ある日見つけた雑誌は、私を酷く複雑な感情にした。

『アイスランド空軍の若きエース。レナルド・レステンクール中尉』

雑誌では金髪碧眼の、まだ少年とっていい年頃のパイロットが敬礼をしていた。

そう、ISの登場で世界中の戦争はストップしたが、一国だけ戦争を続けていた国家があったのだ。それがアイスランド。

レナルド・レステンクールという男はなんと十五歳。私と一つしか変わらなかった。

素直に尊敬した。私とそう変わらない年頃でありながら、立派に戦士として、エースとして活躍する彼に。同時に嫉妬する。ISではなく戦闘機や戦車が戦力の主であるアイスランドの戦争そのものに。そこでなら私は優秀な戦士でいられたのに、と。

ただ今となつてはそんな嫉妬はない。

その後私にISの技術を叩き込んでくれた織斑教官に出会った事もあるし、再び部隊内でトップの実力になったこともある。

今の私にあるのは敬意だ。先駆者としての尊敬。

彼と同じクラスでよかった。

私の配属されたクラスときたら、どいつもこいつも腑抜けばかり。

認められるのは教官と、同じ軍人であるレステンクール少佐……ではなくレナルドだけだ。

そして織斑一夏。

奴だけは許せない。

弱く愚かで、教官の栄光に泥を塗った愚弟。

第二回モンド・グロツソ。誰もが教官の二連覇を信じて疑わなかった決勝戦。

あの男が誘拐などされなければ、教官は絶対に二連覇という偉業を成し遂げていたのだ。

だから教官がなんとしようと、必ず奴を、この手で

暗い。

驚いた。世界と言うのは、こんなにも絶対零度だったのか。

一寸先、いや1キロ先もまた闇なのではないだろうか。だとしたらこの永遠の暗闇から、どう抜け出せばいいのだろうか。

必死になつて。歩いた。

一步。

二歩。

三歩。

四歩。

五歩。

六歩。

七歩。

八歩。
九歩。
十歩。

どれだけ歩いただろうか。

先が見えない。

嫌だ。もうこんな場所は………嫌なんだ。

走った。ひたすら前へ走った。

此処にいちゃいけない。いたら呑まれる。

だから走る。全身が悲鳴をあげても走った。無心に。

光。

あそこに光がある！

もう直ぐそこ。手を伸ばす。

掴んだ。溢れ出す光は祝福のよう。

やがて視界が開け。

「んっ………朝か」

知っている天井……じゃなくて天井だ。

がばつと起き上がる。起きたばかりだというのに妙にスッキリしている。

時刻を見ると朝の七時。

「しまった。これじゃ朝練は無理だな」

仕方ないのでジャージに着替えた。

朝練が出来なくともランニングくらいする時間はある。

未だにスヤスヤと寝ているラウラを起こさないように廊下に出る。

「あれ、レナルド。早いね、どうしたの？」

この声はシャルルか。

「ああ、ちょっとランニングに。

どうだ、お前も、一緒……………に？」

そこにいたのはシャルルではなかった。

それどころか高校生ですらなかった。

男だ。それもチクワのような髪のおっさん。

「な、なな……………」

「ランニングう？ それは結構。

弱者に用はない。それが、我がクラスメイトというものだ。

励むのだ。奪い獲得し支配する。その果てに授業があるッ！

オール・ハイル・ブリタニアアアアアアア！！」

「
」

言葉が出ない。

一体何がどうなっている。

さっきまでは確かにシャルルの声だった。

なのに今の声はまるで……………まるでホル・ースのようである。

(あれ……………シャルルって元からこういう奴だったっけ？)

記憶が激しく混乱している。

思い起こせば、転入して来た時もこうだったような……。

「こんな朝っぱらから何をやっている。朝から騒いでは迷惑だろう」

「ああ、箒。実はシャルル、……………うがア!？」

そこにいたのは、黒髪を束ねた如何にも大和撫子な美少女である
篠ノ之箒ではなかった。

淡い紫色の着物。そして全身に巻かれた包帯。両目の有る所から
僅かに見える素肌は焼けどで爛れている。

「ああ! どうした? 人斬りでも見たような顔をして。
だとしたら……………まあ正解だけどな」

いや、何でよりによって 雄? もはや声優どころか刀を使う
所しか共通してないだろ、というかお前は男じゃなくて女だろう、
という突っ込みしたいのは山々なのだが、この男の雰囲気は突っ込
みを許してくれなかった。

「あの一、貴方は……………誰?」

「篠ノ之箒だ」

(嘘付け!!)

しかしこの包帯男に嘘をついた様子は微塵もない。
それに、なんだか前から箒はこんな奴だったようが気が……………。

「こんな所で何をしているんだ、シャルル?」

ハルマキの声が聞こえてきた。

ああ、今度こそ間違いない。この声は絶対に。

「えっ！」

「なんだ、そんな死んだ魚のような目をして。通行の邪魔だ。どけ」

声は……同じだ。

しかし顔が違う。緑髪に黄色い目をした少女。額には不死鳥が羽ばたくようなマーク。

「Who are you？」

つい日本語を使う事すら忘れてしまう。

だが相手は一応英国人？ 英語が分からない訳はなかったようで。

「突然なんだ。私の名はC・C・

もういいな。私は一刻も早くピッツアを食すという崇高にして絶対の天命があるんだ。

お前に使っている時間などない」

何が一体、どうなって……………。

確かIS学園の男子は三人だけだった筈じゃ。

気付けば廊下には人が溢れていた。しかも、誰も彼もが何処かで見たような人物ばかり。

しかも全員が……………危険度Sの極悪人揃い。

「諸君 私は戦争が好きだ

諸君 私は戦争が好きだ

諸君 私は戦争が大好きだ

殲滅戦が好きだ

電撃戦が好きだ

打撃戦が好きだ

防衛戦が好きだ

包囲戦が好きだ

突破戦が好きだ

退却戦が好きだ

掃討戦が好きだ

撤退戦が好きだ

平原で 街道で

塹壕で 草原で

凍土で 砂漠で

海上で 空中で

泥中で 湿原で

この地上で行われるありとあらゆる戦争行動が大好きだ

戦列をならべた砲兵の一斉発射が轟音と共に敵陣を吹き飛ばすのが好きだ

空中高く放り上げられた敵兵が効力射でばらばらになった時などがおどる

戦車兵の操るティーゲルの88mmが敵戦車を撃破するのが好きだ
悲鳴を上げて燃えさかる戦車から飛び出してきた敵兵をMGでなぎ倒した時など胸がすくような気持ちだった

銃剣先をそろえた歩兵の横隊が敵の戦列を蹂躪するのが好きだ
恐慌状態の新兵が既に息絶えた敵兵を何度も何度も刺突している様

など感動すら覚える

敗北主義の逃亡兵達を街灯上に吊るし上げていく様などはもうたまらない

泣き叫ぶ捕虜達が私の振り下ろした手の平とともに金切り声を上げるシュマイザーにはたばたと薙ぎ倒されるのも最高だ

哀れな抵抗者達が雑多な小火器で健気にも立ち上がってきたのを80cm列車砲の4.8t榴爆弾が都市区画ごと木端微塵に粉碎した時など絶頂すら覚える

露助の機甲師団に滅茶苦茶にされるのが好きだ

必死に守るはずだった村々が蹂躪され女子供が犯され殺されていく様はととても悲しいものだ

英米の物量に押し潰されて殲滅されるのが好きだ

英米攻撃機に追いまわされ害虫の様に地べたを這い回るのは屈辱の極みだ

諸君 私は戦争を地獄の様な戦争を望んでいる

諸君 私に付き従う大隊戦友諸君
君達は一体何を望んでいる？

更なる戦争を望むか？

情け容赦のない糞の様な戦争を望むか？
鉄風雷火の限りを尽くし三千世界の鴉を殺す嵐の様な闘争を望むか

？
「

撃つていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ！」

「てめえのものさしで語るんじゃないよ。
所詮この世は弱肉強食。強ければ生き弱ければ死ぬ」

「CCO、そのチエリー食べないのか？ガツつくようだがぼくの好物なんだ…くれないか？レロレロレロ」

「花京院。空気読め」

「またつまらぬ物を斬ってしまった」

「弱者に用はない。それが高校生というものだ」

「あゝやだやだ、文化を知らない奴は」

「超時空シンデレラ！ ランカちゃんです！」

「ザ・ワールド！ 時は止まる！」

「バイツァ・ダスト！ 時は元通りになる！」

「キング・クリムゾン！ 時は消し飛ぶ！」

「メイド・イン・ヘヴン！ 時は加速する！」

「まずは、そのふざけた^{時間}幻想をぶち殺す……ッ！」

どうなってる？

これは一体、カオスだ。カオスの権化だ。

世界は、IS学園は何処に行った。

筈は？ ハルマキは？ 胸無中国人は？ 一夏は？ シャルルは

よかった。夢だったのか……。

「どうしたんだ？」

ラウラの声が聞こえてきた。

振り向こうとして、躊躇する。

今話しかけてきたのは本当にラウラなのか。

もしかしたら、ナチス軍人かも……。

有り得そうで、恐い。

ゆっくりと振り向く。すると、そこには

「どうした？ 私の顔になにか着いているか？」

良かった。

ラウラはラウラのままだった。

嗚呼、俺は満足だ。

「まことに軍人冥利に尽きる夢だった……。
やれやれ、最悪な夢過ぎて二度寝の淵にありながら語るべき言葉がない」

FLIGHT 12 悪夢 ナイトメア（後書き）

こんな学校にだけは転校したくありませんねー。

さて漸く次回からはシリアスになっていけるかなあ、と思う今日この頃。

我々の人生の前半は親によって、後半は子供によって台無しにされる。

時々考える事がある。もし親がいなかったならば、どうなっていたか。

幾ら嫌っていようと親は親。そして子供というのは”親”から色々な事を学ぶものだ。

ではその”親”がいなければ………今とは全く別の人間になっていたのかもしれない。

IS学園での授業が、比較的穏やかなものになったのはつい最近の事であった。

当初こそ予備知識ゼロの状態で放り込まれたせいもあって、授業に全く着いて行けず、いつ先生に指名されなにかビクビクしていたが、山田先生の放課後補習や麗しの生徒会長からの訓示もあり、座学はそこそこ着いていけるようになってきている。ISもそれなりに扱えるようになってきているので、順調ということだ。

さて、学業が順調だとそろそろ少しだけ”余裕”が出来てくる。訓練や勉強が大嫌い、と言う程ではないが自分とて休みたい時やブラブラしたい時もある。

折角だから誰かを誘って外出でもしようか。そう思って休み時間、

シャルルに声を掛けてみた。

「おい、シャルル」

「な、なに？」

そういえば前の引越しの一件以来、何故かシャルルに避けられているような気がする。

気のせいだといいいのだが。

どうせなら三人しかいない男子。仲良くしたいと思うのが人情だろっ。

「今日、外に遊びに行かないか？ ほら一夏も誘って」

「い、一夏も!？」

「おい、何故そこで満面の笑みを浮かべる。まさかお前……………ゲイか？」

「違うよ！ 大体僕はお」

「お？」

「お…おお……………御徒町は……………上野の隣です……………」

「確かに山手線で御徒町は上野の次の駅だけど……………それが、どうかしたのか？」

「え、ええと、いいもんだね、山手線って。あはははっはは」

「そうか、シャルルはゲイじゃなくて鉄オタなのか」

「て、鉄オタ!?!」

「ああ悪い。生粋のフランス人には分かり難かったか。鉄道が好きってことだよ」

「ま、まあ嫌いじゃないけど、別に特別好きっていう訳じゃ」

「なら如何して突然、御徒町がどうたらこうたらって言い出したんだよ」

「え、えと! …………… そう上野じゃない。秋葉原だよ! 僕は秋葉原に行きたいんだ!」

「あ、秋葉原って…………… 確かに秋葉原も御徒町の隣だけど。何の用があるんだ?」

「だって秋葉原って有名な

」

「ポルノ街だろ」

「そうそう、ポル…………… じゃなくて電気街だよ!」

「そうだったけ? 俺も日本に来るのは久し振りだから詳しくは知らないけど、なんだかジャパニーズアニメーションのヌードグラビアやら、何故かメイド服の売春婦が大量にいるって聞いた事があるけど」

「…………… 僕は良く知らないけど、それ絶対に間違ってると思うよ」

「そうなのか？」

で、それでその秋葉原に何の用があるんだ？
やっぱり、売春？」

「違うよ！　ただ、ちょっと電化製品を見たいかなーって」

「ふうん。けど今から秋葉原は遠いから、また今度にしようぜ。ほ
ら次の休みにでも」

「そ、そうだね！　それじゃあ僕はこれで！」

そう言うときシャルルはそそくさと退散していった。

一体何を慌てていたのだろうか。

「やべ。放課後遊びに誘うの忘れてた」

まあ次の休み時間に誘えばいいだろう。

そう思いなおして、再び授業を受け、次の休み時間。
結局それは不可能になった。何故ならそれは。

「この距離だけは慣れないな」

「同感。この学園内に男が使えるトイレが三箇所しかないという現
状はなんとかかして欲しい」

一夏とレナルドの二人は走っていた。

何故か？

決まっている。男なら、いや女であろうと哺乳類ならば絶対に避
けられない行為。

即ち排泄だ。小便ともいう。

二人は即座に用を足し、そして帰りの全力疾走の途中であった。

「何故こんな所で教師など！」

「やれやれ……」

ふと、足を止める。

この二つの声。両方とも聞き覚えがある。

「一夏」

「ああ」

ただならぬ予感を感じてか二人は声の方向へ歩み寄る。
すると、そこには。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

やはり声の主は織斑先生とラウラだった。

どうやら、ラウラのほうが食って掛かっている様子である。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。」

ここでは貴女の実力は半分も生かされません」

「ほ」

ドイツといえば、一昔前に初代ブリュンヒルデである織斑千冬が

ISの教官として一時期赴任していたという噂があったが………
二人の口調からして、噂は真実だったらしい。

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません
ん」

「何故だ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションかなにかと勘違
いしている。」

そのような程度の低い者達に教官が時間を割かれるなど

「

「そこまですておけよ、小娘」

「っ……………！」

底冷えするような声。

殺意や敵意こそ含まれていないが、相対する者を問答無用に黙ら
せる覇気が籠ったその言葉。

流石のラウラも黙り込む。

「少し見ない間に偉くなったな。」

十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……………」

分かる。ラウラは震えている。

圧倒的な力に対する恐怖と、尊敬した者に拒絶されるかもしれない
という恐れ。

「さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」

「……………」

早足で去っていくラウラ。

数秒ほど如何しようか考えて。

「仕方ない。一夏、後は任せた」

「お、おい！」

ラウラを追う。

幸いレナルドは軍人の中でも足が速い部類に入る。ラウラのほうもそれほどスピードは出していなかったので直ぐに追いついた。

「ラウラ！」

「レナルド！……………見ていたのか？」

「偶然だよ。それにしても如何してあんな事を言ったんだ」

疑問を問う。するとラウラは答えた。

織斑千冬が何故ドイツに教官として赴任したのか。何故転校初日に一夏を叩いたのか。

「成る程。つまり千冬さ……………織斑先生がモンド・グロツソの二連覇を為しえなかったのは、一夏が誘拐されたから。だから一夏が許せないのか」

「そつだ。あの男さえ、あんな弱い男の為に、教官は……！」

(さて、どうしたものか……)

思わず頭を抱えなくなるのを堪える。

推測するにラウラの感情は恐らく”嫉妬”。

ラウラの織斑千冬に対する感情は尊敬と憧れ。恋慕こそ抱いていないようだが、妙な独占欲なものだろう。これは全人類に言える事だが、好きなモノを自分だけのモノにしたい、というのは誰でも抱くような感情だ。ラウラも同じだろう。

(こつという悩みが一番難しい)

レナルドとて若いながらも隊長として部下の相談にはよく乗っていた。

恋愛、飛行技術、故郷に残した恋人の事、戦死した友人。

だけどこのような感情の問題というのは、レナルドにとって答えにくい事だった。

これがもつと大人のパイロットならば上手く相談にのってやれるのだろうが、生憎とレナルドはまだ未成年。それなりの戦いを潜り抜けてきたとはいえ、人の感情のような明確な答えがない相談は、余りされたくない。

けれど、このまま放置しておいてもラウラが暴走する危険性もある。

最悪、一夏に闇討ちをかけないとも限らない。

流石に突然奇襲をかけるなんて事はしないだろうが、挑発して決闘に持ち込む事くらいは……… たぶん、するだろう。

それで万が一決闘がエスカレートして死合にまで発展したら、国際問題になりかねない。

更に言えば、レナルドという男はイギリスは嫌いだがドイツは好きだった。

ラウラ・ボーデヴィツヒという少女にそれなりに好感も覚えてい

る。
少なくともあのハルマキより遙かに。

(こつという時は……そうだ！)

自分では明確な答えが出せない。

ならばどうするか？

決まっている。問題を………先送りにするのだ。

「ところでラウラ。今日の放課後なんだけど

」

FLIGHT 13 問題 未解決（後書き）

ええ、次の次辺りにISバトルに入れそうです。

遂に束お手製、レナルド専用ISがそのベールを脱ぐ時が！

「時」は全ての怒りを癒す妙薬である。
時は怒りだけじゃない。哀しみや嘆きも癒してくれる、最も残酷な妙薬だ。

誰もが嘆き悲しみ、そして時間という妙薬がその苦しみと、そして感情を消していく。

人は忘れていく生き物だ。記録として思い出として残ったとしても、感情の伴った記憶はそう長くはとどめられない。やがてどんな感情も色あせ消えていく運命。

しかしそれでも尚色褪せない記憶があるのならば、それを永遠と定義するのだろうか。

「ほう、これが日本の街か」

放課後、ラウラを伴い繁華街を歩く。

当然ながら一夏やシャルルはいない。二人がいたら

特に一夏が ラウラとの間で一悶着が起こるのは目に見えている。というより一夏がいたらラウラのほうは来ないだろう。

「そうだよ。流石に秋葉原やら原宿には劣るけど、それなりの街だ。なにせ天下のIS学園のお膝元だからな。一通りの物は揃う」

「では装備を揃えたいのだが。私の愛銃が最近壊れてな」

「それなら個人的に伝手のあるアイスランドの武器商人を紹介しよう。」

あいつは俺に借りがあるからな。大抵の無理は聞く」

「信用できるのか？」

「ああ。狡賢い奴でゲイだが最低限の信義は守るタイプだ。

今日頼めば一週間中には日本に密輸……………じゃない！ 何で繁華街来て装備を揃えようなんて発想に到るんだ、お前は！」

「駄目か？」

「駄目だ！」

「……………帰ったらその武器商人を紹介してくれ。ナイフ以外の武装は殆ど持ち込めなかったのだ」

「日本は銃が持ち歩けないらしいからな。

あれは参った。第一俺は手元に銃がないと落ち着いて眠れない」

「同感だ。ISがあるとはいえ、やはり銃が手元に欲しい」

二人して意気投合する。

立場は多少違えど同じ軍人同士だけあって何か通じるものがあるのだ。

そのまま二人は物騒な会話を続けながら街を散策する。

「ところでレナルド」

「なんだ」

「教官を、再びドイツでご指導して貰うには、どのように説得したら良いと思う？」

「っ！」

いきなりその質問をするか。

どうやら遊びまわらせて忘れさせる作戦は失敗のようだ。けれど、どういう対応をしたものか。

レナルドは千冬とそれなりに親交がある。実の弟である一夏ほどではないが、その性格も知っているしああ見えて、弟である一夏を深く愛しているのも、なんとなく分かる。

ただでさえブリュンヒルデ織斑千冬の弟であり、しかも世界で三人しかいないISを操縦できる男だ。そんな弟をあの織斑千冬が放置するだろうか。いや、絶対にない。

ドイツへの恩も一度教官として赴任したことで返しているだろうし、今になって織斑千冬がわざわざ遠いドイツで教鞭をとるなど特にメリットがないのだ。というより彼女として日本人。外国でしかないドイツよりかは日本のほうが大事だろう。

レナルドとてアイスランドとドイツのどちらが大切かと問われれば、やはり祖国であるアイスランドのほうを選ぶ。

(なんだか厄介事ばかり巻き込まれている気がするな)

思えば最初からそうだった。

若干十六歳で小隊長、IS学園への入学、専用機、そして今回。安息の地は何処に。

「何で、そんなに織斑先生に固執するんだ。大体別にドイツじゃなかったって、学園でいればお前の事だって面倒見てくれるじゃないか」

「それでは駄目だ。こんな能天気な場所では、教官の実力は全く発揮出来ない。

だからもっと最高の場所で。教官のような強い人がこんな所において、完璧でいられないではないか！」

「ああ、ラウラは織斑先生に憧れているのか？」

「……………そうだ。」

誰よりも強く、そして気高い。私の理想だ」

漸くラウラ・ボーデヴィツヒという少女に親近感を覚えた。

尊敬や敬意、嫉妬などが複雑に絡み合った問題は、自分では良く分からない。

けどその感情ならば良く分かる。そう、憧れならば。

「なあラウラ。お前、なにしたいんだ？」

「なに、とは？」

「何でもいい。織斑先生をドイツに連れ帰るとかいうのじゃない。

もっと根本的に、ラウラ・ボーデヴィツヒは何を目指しているんだ？」

「私は……………」

ラウラが目を瞑る。

やがて、強い意志を秘めた瞳で言った。

「私は到りたい。あの人の強さに。あの気高い姿に。

嗚呼、そうだ。あの諸人には到達出来ない強さへと到達したい。

それが私の生きる目的であり、存在理由」

「そうか。なら飛べばいいじゃないか」

「飛ぶ？」

「憧れたんだろう？ なら迷わず飛べばいい。

俺もそうだ。ソラに憧れたから軍隊に志願してパイロットになって

飛んだ。

何時かは空を越えて宇宙ソラを飛びたい。

それが俺の生きる目的であり、存在理由」

「ソラに？」

「そうだよ。だからお前も迷ったりする必要なんてないんじゃないか。

織斑千冬という人に憧れたんだったら、何にも考えず飛べばいい。

成果や過程なんて後からついてくるもんだよ。少なくとも俺はそう

だった」

（まあそのせいで小隊長やらESやらを押し付けられたんだけどな）

口には出さず心の中で愚痴っておく。

「成果や過程なんて後からついてくる、か。

感謝する。胸のつつかえが少し取れたような気がする」

「どういたしまして、と。

それじゃ……………ッ！」

ピタリと足が止まる。

レナルドの両眼が驚愕で見開かれた。

「どうしたんだ、突然止まったり、なんか、して……………なっ、貴方は！」

そこには軍関係者ならば絶対に知っている、一人の男がいた。目が覚めるような金髪的美青年。一見隙だらけのように見えるが、その実一分の隙もない佇まい。なによりも全てを見透かすかのような蒼い瞳。

「久しぶりだな、レナルド。

お前がIS学園に旅立って以来か」

透き通るような声。

慌ててラウラが敬礼した。

「お初お目にかかります、”レステンクール”総帥。私はドイツ軍少佐、ラウラ・ボーデヴィツヒであります！」

ラウラの言葉に含まれる感情は、畏怖。

当然だ。この男は五年の歳月に渡る戦乱を僅か三ヶ月で治め、尚且つその後国を急速に復興させた怪物なのだから。

「お久しぶりです、総帥」

「今はプライベートだよ、レナルド」

「そうかよ、この糞親父」

そうこの男。

アイスランドの戦乱を鎮めた英雄こそ、レナルド・レステンクルの実父であった。

ラウラは特に驚いた様子もない。当然だろう。レナルド・レステンクルが雑誌によく掲載される理由の一つが”ソレ”なのだから。

「しかし、もしかして逢引か？
だとしたら悪かった。

私も息子とはいえ、他人の恋路に口出しをする気も邪魔をする気もない」

「他人、ね」

昔からこの父はそうだった。

世間一般で言うところの親としての自覚がない、とでもいうのだろうか。

今もそれは変わっていない。

「それより一応あんたみたいな人でもVIPなんだから。

いいのか、こんな場所をSPも着けずに一人で歩き回って」

「護衛対象より脆弱なSPなど邪魔なだけだろう。

自分の身くらい自分で守るさ。第一SPなんて無粋な連中を連れていては、この国の魅力的な美女とお近づきになれないじゃないか」

「四十代のおっさんが良く言う」

「知らないのか？ 天才は年をとらないんだ」

「……………」

確かに認めたくはないが、この父は四十代でありながら二十代、いや二十歳と言われても信じられる程の若々しさを保っている。

「それより、知っているか？」

「なにを」

「今度IS学園で開かれる学年別トーナメントは、二人組みでの参加らしい」

「なに」

学年別トーナメントというのは文字通り、学年全員がトーナメントを勝ち抜き優勝を目指すものだ。特に最高学年である三年生のトーナメントには、各国の重鎮や技術者などが見物　　ーというよりは見定めに来る程だ。

成る程、この父が此処にいるのもその辺りが理由ということだろう。

「期待しているぞ、レナルド。」

よもや初戦敗退なんていう醜態を見せるなよ。

お前は仮にもアイスランドの代表候補生なのだ。お前の敗北は即ちアイスランドの敗北でもある。

そして私は、弱者に用はない」

「一軍人に随分なご期待で」

「それが国の威信を背負うということだ、覚えておけよ。国の威信というのは、存外重い」

そうやって父は、レステンスクール総帥は去っていった。相変わらずの様子で。

「ラウラ。ペア、組もうぜ」

「それはいいが、本当に事実なのか？
今度の学年別トーナメントがタッグマッチなどと」

「あの糞親父は親としては最低の部類だけど、総帥としては最高だ。情報は確かだろうさ」

「……………レナルド」

「帰るぞ。そしてトーナメントに備える。
ラウラ、お前はどうする？」

「私も帰ろう。トーナメントの情報が真実だろうと嘘だろうと、私には倒すべき相手がいる」

一夏のことだろう。

ならいい。闇討ちや私闘ではなく試合で決着をつけるのならば健全だ。

危なくなっても審判が止めに入る。

「参ったな」

呟くように言った。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。即席とはいえ自分の相棒となるのなら
ば、

「負けない理由が二つになった」

彼女の助けもしなければならぬ。

それが、仲間だ。

FLIGHT 14 チーム アンド ファザー (後書き)

漸く、次話でISバトルが……。

というより十五話になって初です。

ここまで戦わなかった主人公もある意味珍しいかも。

だからこそ次話では大暴れさせなければなりません。

不可能とは、臆病者の言い訳なり。

嘗て”不可能”を”可能”にする為に戦った男がいた。

彼の願いは余りにも気高く崇高で、そして夢物語だった。叶うはずのない絵空事、誰もが彼の願いを否定して、そんなものはないと断じた。

しかし彼は辿り着いたのである。結果的にそれが為されなかったとしても、”不可能”を”可能”にすることが”可能”となる所にまで到達したのである。

だからこそ、彼の願いは尊い。

何の因果だろうか。

学年別トーナメント、その第一回戦の相手として選ばれたのは【シャルル&一夏】のペア。

本当に出来すぎている。まるで狙い済ましたかのような組み合わせだ。

そして今日。

決戦の時を迎える。

「レナルド」

一夏が声を掛けてきた。

だが敢えて無視してアリーナへと歩いていく。一夏はほんの僅かに目を瞑り、そして同じように黙ってアリーナへと歩いていく。レナルド・レステンクールと反対側の地に。

それでいい。幾ら昔馴染みの友人とはいえ、こうやって対峙している以上の敵。情けをかけるつもりも掛けられるつもりもない。敵として立ち塞がる以上、女子供であろうと敬意をもって全力で叩き潰す。

数少ない、父からの忠告で心に留めているものだ。

「ラウラ」

隣にいるラウラへと声を掛けた。

そう誰かに為に、というのなら彼女の為にだ。

自分はその養親父の前で無様を晒す気がない。ラウラは一夏を倒したい。

利害は一致している。だからこそ、二人は心技体全てが最高のコンディションだった。

一夏とシャルルと向き合う。

もはやどちらのペアも何も言わなかった。言うべき言葉が存在しなかった。

アリーナにいる四人が一齐にISを展開する。

シャルルはオレンジ色のラファール・リヴァイヴ・カスタムEII
ラウラはシュヴァルツエア・レーゲン

一夏は白式。

そして最後の一人、レナルド・レステンクールの為に鬼才発明家篠ノ之束が用意した専用機。

「FX-02S ホワイト・スコピオン。漸く初陣だ！」

レナルドの言葉と共にISが展開される。

ホワイト、と名づけられていながらもISのカラーリングは黒と赤。

何を思っこのチグハグな名前がつけられたのかは知らない。けれどそんなものは仔細なことである。レナルド自身そんなものに大した興味はない。

「始まりましたね。それにしてもデュノアさんと織斑くんの連携が凄いです。

特に織斑くん。とても初心者には思えません。

それに織斑くん達と比べると少し荒いですけどボーデヴィツヒさんとレステンクールくんのペアの連携も中々ですよ」

教師だけが入室を許される観察室で、モニターに映し出された戦闘映像を眺めて、山田真耶が感心したように言った。

「ふん。あれはデュノアが織斑に合わせているだけだ。誉めるとすれば織斑ではなくデュノアだろう。

ボーデヴィツヒとレステンクールは………二人とも隊を率いてきた経験があるからな。

尤もレステンクールのほうが素人同然のことと、ボーデヴィツヒが連携という分野においてデュノアに劣ることもあって、織斑達のそれと比べればやや劣るが。

「それにしても、あれがレナルドくんの専用機。

篠ノ之博士が自ら手がけたISというから、その……」

「どんなトンでもないISが出てくるかと思ったか？」

「……………はい」

再びディスプレイに映る戦闘映像を見る。

レナルドの専用機は束お手製だけあって、量産型を超えた性能が伺えるが、特に目立った装備も出力もない。ごく平均的な第三世代と同等の機動力だ。

白騎士事件で世界を変革したといってもいい篠ノ之束が作ったISにしては大人しすぎるのではないだろうか。山田真耶がそう考えってしまうのも無理はない。

「どんな優れたISだろうと操縦者が素人ならば単なる鉄屑だ。ISの性能の差が戦力の決定的違いではない」

初代ブリュンヒルデである千冬が言うと奇妙な説得力がある。

しかし千冬の言う事は正しい。

彼女ほどの操縦者ならば、学生の操るISなど、それこそ生身にISの刃を展開しただけで圧倒してしまうだろう。

右腕がなくなれば左腕を使えばいい。両腕が無ければ足で蹴り殺せばいい。四肢がないなら、敵の喉笛を噛み切れればいい。

どんなコンディションでも一流の結果を出すのがプロフェッショナルなのである。ISの性能を言い訳にするような者はまだまだ二流三流だ。

（しかしラウラ。変わったな。

ドイツで私が指導していた頃は強さを攻撃力と同一と考えていたが

……………。
この試合、分からなくなった)

「もらった!」

一夏が背後から迫ってくる。

事前の情報で白式には近接戦闘用のブレードしかないのは分かっているのだ。故に距離をとって銃弾の嵐を浴びせてやれば倒せる相手なのだ。

ホワイト・スコーピオンのメイン武装。ビーム兵器と実弾兵器を瞬時に変更することが出来る可変ライフル。白式相手ではビーム兵器は有効打に成り得ない。だからこそ今回の試合においては実弾オンリーで戦っている。

その可変ライフルを一夏へと照準。この距離、そして両者のスピード。

当たる。レナルドはそう確信したが。

「やらせないよ!」

シャルルが尽かさず援護射撃をしてきた。しかもラウラの相手をしながら一瞬の隙を見計らって。

成る程、代表候補生とは伊達ではないらしい。あのハルマキ婆ならまだしもラウラを相手にしながらも、一夏の援護をするなど並大抵の力量では不可能だ。

(この距離は!)

B T シールドを展開し銃弾を受け止める。
だけど、それは。

「貰ったア

ッ！」

「！」

一夏の接近を許してしまう事となった。
即座に自己の淵へ埋没しイメージする。想像するのは白式のブレードよりかは短い近接戦闘用武装。嘗て会長と訓練したのが役立つ。懐からナイフを取り出すイメージをもって、自らの手中にその武装を呼び出す。

金属音。

刃と刃がぶつかり激しい音を鳴らす。

アサルトナイフと雪片式型との間で鏝迫り合いになる。

しかし此処で機体の特徴の差が現れた。白式は近接戦闘特化型。

対するホワイト・スコープイオンはオールマイティーに戦える汎用型。通常の戦闘ならばホワイト・スコープイオン有利であるが、こと近接戦ならば白式は段違いだ。

やがてアサルトナイフが弾かれ。

「うおおおおおおおおおおおっ！」

発動する白式の単一仕様能力、零落白夜。

これは避けられない。

轟音。雪片式型の直撃を受けた。

きしむIS。だが、それでも。

「一太刀浴びせたくらいで、勝ったと思うなッ！」

アサルトナイフが弾かれてしまっているので、白式の胴体を思いっきり蹴り飛ばす。

「……………くそっ。決まったと思ったんだけどな」

「残念だったな。あのウサ耳アホ科学者お手製を舐めてもらっちゃ困る」

そうは言うレナルドだが、実は内心ではヒヤヒヤしていた。

ぶっっちゃけると、レナルド自身あれば負けた、と思ってしまうていたのだ。

これが通常の機体、いや例え専用機でも既に負けているだろう。しかしレナルドの専用機ホワイト・スコピオンにはまだまだ余裕がある。

(成る程、このタフさがこのIS最大のウリということか)

地味だが素晴らしい性能だ。

タフさというのは兵器において重要な要素の一つだ。元々空軍のパイロットだったレナルドには良く分かる。自分も含め、誰だって簡単に壊れたり破壊されたりする脆弱な戦闘機になんて乗りたくはない。例えその戦闘機が世界最高のスピードと世界最高の火力を持つていたとしても。

戦場で命を賭けて戦う兵士達にとって大事なものは性能よりも、搭乗者を最後まで守り通してくれるタフさと安全性なのだ。

ならば、このISは実に自分の理想通りといえる。

だけど、それでも。

未だに超えていない壁というものが存在する。

ISという兵器に触れた年数が少ないという絶対的な壁が。

『レナルド！ そっちに行っただぞ！』

「！」

銃弾の雨。

一夏に実弾兵装が搭載されていないのは分かっている。だから相手側で射撃武器を使ってくるのは必然一人しかいない。

「配役交代だよ！」

「ちい！」

気付けばラウラを一夏が。

そしてシャルルが自分を、という構図へと入れ替わっていた。

シャルルの専用機。

リヴァイヴがミサイルを発射してくる。

迎撃するが数が多い。避けられればベストなのだが、こちらにはそれをする技量がない。

『レナルド！』

ラウラからプライベート通信が入る。

『今直ぐにこの男を振り払ってそっちに！』

織斑一夏

『やめろ、それが狙いだ!』

そう、もしラウラが無理にこちらを援護しようとするれば、未熟な一夏でもラウラを抑え易くなる。そして無理に動けば致命的な”隙”が生まれてしまう。その隙を、この強かな同級生^{シャルル}は絶対に見逃す事はないだろう。

「いい判断だね。けど!」

ラビット・スイッチ
高速切替。

大容量の拡張領域を活かした戦闘と平行して武装を変更するスキル。

今シャルルの手に握られているのは、四つの巨大な銃口。
あれを受ければ、流石のホワイト・スコープIONでも。

「くそおおおおおおおおお」

一瞬の静寂。

土煙が上がり、アリーナの全容は見えないがホワイト・スコープIONが今の攻撃の直撃を受けたのは明確であった。

同時にホワイト・スコープIONが敗れたのも、観客達は悟る。

各国から来た技術者は政治家達もそれを疑わない。

ある者は篠ノ之束が作り上げたISを破ったシャルルの技量に舌を巻き。

またある者は篠ノ之束の作り上げたISを操縦していながらも敗北したレナルドを嘲笑した。

そんな中。

一人だけ。アイスランドの総帥でありレナルドの実父でもある男だけは、嘲笑ではない笑みを浮かべてみせた。

（まだだろう、レナルド。）

お前はこの程度では負けはしない）

彼は知っていた。

レナルド・レステンクールという男の反骨精神を。

軍隊で揉まれそんな精神は消えたかのように思える。しかし違うのだ。

レナルドの反骨精神はそもそも社会に対するものではなく、この自分唯一人に向けられているのだから。その自分が見ている戦場でレナルド・レステンクールが容易く敗れる訳がないのだ。

それにレナルドはまだ自らの専用機の真価を全く発揮していない。

おおッ！

歓声上がる。

そう、やはりそうだった。

レナルド・レステンクールは、まだ飛べる。

土煙の中から一つの、いや、一機の機影が飛び出してくる。

それも従来のISを遥かに超えるスピードで。

ざわめきが大きくなる。

それはそうだろう。

飛び出してきたのはISではなく、多少小型ではあるものの『戦闘機』だったのだから。

【FX-02S ホワイト・スコピオン】

搭乗者：レナルド・レステンクール

分類：第四世代型IS

製造：篠ノ之束

生産形態：レナルド専用機

<武装>

『可変ライフル』

読んで字の如く。FX-02Sの主武装。

瞬時に実弾兵器とビーム兵器を瞬時に交換する事によってあらゆる戦局に対応可能。

『アサルトナイフ』

MF-02の近接戦闘用武装。

目立った特長はないがかなりの切れ味を誇る。

『マイクロミサイル』

誘導性のあるミサイル。

このISの生命線ともいえる武装。

『可変バズーカ砲』

大威力のバズーカ。

可変ライフルと同じように実弾兵器とビーム兵器を瞬時に入れ替える事が可能。

<詳細>

レナルドの為に篠ノ之束自身が開発した第四世代IS。

搭乗者の好みに合わせたのか束が作ったにしては特殊性のある武装がなく、武装も実弾兵器とBT兵器を有しており如何なる戦局、如何なる相手にも対応できる仕様となっている。

また白式や一般的な第三世代型とは違って燃費・安全性・汎用性を

第一に設計されており、ある意味においてISという兵器の理想系。最大の特徴として戦闘機フォームへの変形機構を有する。

FLIGHT 15 Wings to FLY (後書き)

皆大好き可変型です。

え？ 武装が地味すぎる？ 浪漫がない？

いえ違います。ノーマルな武装にこそ！ 漢の浪漫が詰まっているのです！

MSだってビームサーベルとビームライフルさえあれば問題無し！
それ以外の武装なんて余計なだけなのです！ 電子専用やら狙撃
用やらは別ですが。

自分を心から愛せるようになると、他人をもっと深く愛せるようになる。自分の欲求を敏感に察知できるようになると、他人にも大らかに優しくなれる。

俺は自分を心から愛せているだろうか。恐らく愛していないだろう。自分が嫌い、と言うほどではないが、かといって愛している訳でもない。

だからなのかもしれない。幾ら誰かと付き合っても長続きしなかったのは。

戦闘機。

それは既にISによって空戦の主役から落とされた兵器だ。理由を挙げるなら多くある。

先ず戦闘機という兵器には小回りが利かない。対するISはPI Cにより空を自由自在に浮遊することが可能だ。戦闘機が旋回するのに一々大回りをしなければならぬのに対して、ISは急の方向転換というのも簡単に出来てしまう。

そして最大の違いは耐久性だ。

例えばであるが、戦闘機がビルや地面に激突したらどうなるだろうか。そんなもの考えるまでもない事であろう。当然ながら戦闘機

は木っ端微塵になり爆散する。

しかしISは違う。鉄壁のシールドバリアは通常のミサイルや砲弾だけじゃなく、猛スピードで障害物に激突したとしても機体と操縦者を無傷で守る。

そう現代において”戦闘機”など脇役。

決して主役として脚光を浴びる事のない存在だった。

今日、この日までは

「まじ、かよ」

空に雄大と羽ばたく戦闘機を見て、織斑一夏は呆然と呟いた。

一夏とて男だ。子供の頃からその威容には多少なりとも憧れがあった。

嘗て現代の戦いにおける主役だったそれは、この日蘇る。

「一夏！」

シャルルだ。

お陰で漸く我に帰る。

そうだ。戦闘機だろうがなんだろうが今はあの戦闘機は敵だ。

「シャルル、レナルドの相手を頼む！俺は！」

あいつを、ラウラ・ボーデヴィツヒの相手をする。

その間にシャルルがレナルドを倒してくれれば、二対一でラウラと戦う事が出来る。

けど、やはり。

「やっぱり格好良いよな、飛行機って」

少年織斑一夏は、そう純粋に思った。

「たつく、あのニンジンウサ耳アホ科学者も偶には良い仕事をする。………本当に『たまに』だけど」

風を切って空を飛翔する戦闘機、いやホワイト・スコープイオンの内部でレナルドはそう呟いた。

しかしこれは変形というよりは変身に近いかもしれない。

先程までISだったそれは完全に戦闘機へと姿を変えていた。

ホワイト・スコープイオンはその姿形だけではなく、その大きさまでも変わっていた。

通常のISのサイズが多少小柄な戦闘機へと変化している。当のレナルドは戦闘機のコックピットに普通の戦闘機と同じように座っていた。

操縦方法やその他の機能については、殆ど今まで乗ってきた戦闘機と変わらないらしい。本当に良い仕事をする。やるべき時はやる女、とでもいうのだろうか。

「レナルド！ 悪いけど、やらせて貰うよー！」

「シャルル……………面白い、やってみる」

そう言い返して、漸く理解した。

最初にこの機体を見た時、どうして自分が不快感を抱いたのか。簡単だ。自分はこれがISの姿でいることが我慢ならなかったの

だ。
ただ。今だけは違う。愛機はその姿を変え、黒い翼を羽ばたかせている。

「言われずとも！」

リヴァイヴからミサイルが発射される。
数は二十。

何時も慌てて迎撃するところだが。

「魅せてやる、シャルル。」

エースパイロットの名前は伊達じゃあない」

右から六、後ろから五、前から七、左から二。

なんだ、この程度か。

この程度でこのレナルド・レステンクールを大地に墜とそうなど片腹痛い。

ホワイト・スコピオンで接近するミサイルに突進する。そして直撃する寸前で機体を急上昇させスクロールさせた。

そのまま再びマックススピードで振り払う。後方では爆発したミサイル。

「さあてお仕置きタイムだ、シャルル！」

「くっ」

身構えるシャルル。

戦闘機形態だけあって小回りこそ効かないが、その分スピードは圧倒的だ。

従来のISを遙かに超えたスピードが容易く出せる。だからこそ、シャルル・デュノアが身構え、ほんの僅かに隙が出来たのを見逃さずに……………それを素通りした。

「えっ？ ま、まさか…………！」

そのまさかだよ、シャルル。

ホワイト・スコピオンのコックピットでそう呟いた。

レナルド・レステンクルの目的は一つ、それは。

「一夏ア！」

「れ、レナルド！？」

そう何もわざわざ強敵であるシャルルを相手にする必要などない。そんなギャングブルをするよりも零落白夜を使用してエネルギー残量の少ない白式を倒した後に、ラウラと二人でシャルルを相手にしたほうが確実に安全だ。だから。

「FIRE！」

ありつたけのミサイルを白式に浴びせた。避けようとした一夏であるが。

「私を忘れるな、織斑一夏」

「くそっ！」

ラウラによって阻まれた。

もはや一夏に成す術はない。そのままミサイルの爆煙に吞まれー

夏は敗北した。

「残りは！」

残った敵。シャルルを相手しようとしたが。

「この距離なら外さないよ」

「んなつ！」

驚愕する。

シャルルは既に空にいなかった。彼がいたのはラウラの背後。そしてシャルルは攻撃力だけならば第二世代最強と謳われた装備があつた。

六十九口径のパイルバンカー。通称『グレイトスケール楯殺し』

「くうあああああああああああああああああつ！」

ラウラの叫びがアリーナに響いた。

強力な一撃がモロに叩き込まれる。しかしそれで終わらない。『楯殺し』はリボルバー機能により即座に次弾が装填される。つまり連射が可能な兵器なのだ。

二発、三発。立て続けに叩き込まれ、ラウラの胴体はゆっくりと倒れていった。

「この、野郎！」

ラウラがその顔を苦悶に歪め倒れる。その光景を直視した時、レナルドの中で何かが切れた。

「うおおおおおおおおおおおおおっ!!」

機体を大空へと飛び上がらせる。

戦闘機形態は確かに速い。圧倒的スピードだ。しかしアリーナのような狭い空間ではその性能を半分も発揮出来ない。もっと広い海上などなら兎も角、シャルルのような強かな相手と一対一だと勝てるかどうか。可能性は五分五分どころか良くて10%だろう。

だからこそレナルドは飛んだ。急上昇した後はひたすら大地へ。

一夏だったら即座に理解しただろう。現在レナルドのつた先鋒こそ、嘗て太平洋戦争で多くのパイロット達がその命の炎を燃やし尽くす事により可能した悲劇の攻撃。即ち、

「カミカゼ、アタアツクツ!」

「ええええええええええええええええええええええつ!」

シャルルの絶叫が響いた。

それでもレナルドは止まらない。ただ真つ直ぐにシャルルのリヴアイヴをアリーナの藻屑とする為に突進する。特攻。そういえば分かりやすいだろう。

「だけど、直線の動きなら避けられ、ば……」

「おっと、そうはさせんぞ」

「ラウラ!」

逃げようとするシャルルの両足を、既に死に体のラウラが掴んだ。慌てて振り払い逃れようとするが、遅い。もう直ぐ底にカミカゼを纏った戦闘機が。

「死ねば諸共だ！ 喰らえッ！」

「きゃっ」

ぶつかる。戦闘機とISが。

だがそれだけじゃない。レナルドは衝突の寸前、全てのミサイルと弾薬のありつたけを発射していた。しかしアサルトライフルだけではなくミサイルを至近距離で発射するということは。

「爆散！」

その言葉通り爆発した。

至近距離で爆発したミサイルはシャルルとレナルドを両方巻き込み、やがて全ての音を奪い去った。

「……」

ゆっくりと体を起き上がらせる。

見慣れた天井。どうやらIS学園の保健室のようだ。

「目が覚めたか、この馬鹿者」

「千冬さ」

出席簿で殴られた。

「織斑先生だ」

「……………織斑先生、ここは。それに試合」

そつだ試合はどうなった。

自分が覚えているのは、確か戦闘機形態のホワイト・スコピオンで特攻して、それで。

「それなのだがな」

そして聞いた。

勝負は引き分け。シャルルが戦闘不能になったのは良いが、当のレナルドとラウラまで戦闘不能になったかららしい。

そしてなんでもトーナメントも中止になったそつだ。

理由は……………なんというか、最後の特攻で観客席に被害が出てしまつたらしい。それでこれ以上は危険だとかなんとか。

「しかし如何してあんな無茶をした」

「それが……………コックピットに『カミカゼ』というスイッチがあまりまして、それを押したら……………」

事実だ。ホワイト・スコピオンのコックピットに赤いボタンに白い文字で『カミカゼ』というスイッチがあつたのだ。

それを押したら一時的に限界速度を突破だの全弾発射などというのがオートで発動して、後はそのままの勢いで突っ込んだという訳である。

「まつたく束のやつは……………。漸くまともな機体を作つたと思えば、やはりトンでもない機能を用意してあつたか。」

戦闘機形態とはいえISだったから良かったものの、通常の戦闘機
だったら即死だったぞ」

「そうですね。俺も二度と同じ真似はしたくありません」

「そうか。だが念の為、あれは二度と使うなよ。」

安全面でもそうだし、なにより心臓に悪い」

「了解です」

言われずとも同じようなするつもりはない。

というより出来ない。レナルドとて戦闘気乗り。特攻は恐いのだ。

「そういえば如何して俺は保健室に。ISの絶対防御は」

「簡単な話だ。特攻した後にお前のISの展開が解除されてな。

お前の怪我は、その際に地面に落下して出来たものだ」

「成る程……」

特攻ではなく特攻した後に地面に落下して怪我するとは。

なんともマヌケな話である。

「では私はこれで、仕事が残っているのな。

ああ、それと……保健室でよからぬ行為を働くなよ」

「よからぬ行為って」

そこで気付いた。

自分の横たわっている保健室のベッドに一人の少女がいた。

どつやら看病をしていてそのまま眠ってしまったらしい。

「ラウラ……」

何時の間にやら織斑先生は何処かへ行ってしまっていた。
即ちこの部屋にいるのは自分とラウラだけ。

「馬鹿か俺は。何考えているんだが……」

溜息をつく。

もしかしたら気付いていないだけで、かなり疲れているのかもしれない。

「ありがとつな、ラウラ。」

最後の特攻でお前がシャルルの足を止めてくれなければ、俺はただの見っとも無い自爆で終わっていた」

乱れていたラウラの髪に触れる。

そして、何かが割れるような音がした。

「……………」

一夏がいる。

シャルルがいる（何故か女装していた）
箒がいる

ハルマキがいる

酢豚中国人がいる

どうやら、お見舞いに来てくれたらしい。
だけどその四人とハルマキは頬を赤くして。

「「「「」」」」」
.....」

気まずい沈黙。

やがて意を決したように一夏が。

「ごめん。俺空気読めてなかった。
それじゃあ.....お邪魔しました」

「ええい待て！ 何か思いつきり誤解しているだろうっ！
こら篤！ お前から何か言ってるやれ！ ハルマキ！ なにを軽蔑
したような目で見ている！ シャルル！ 何で女装している！ そ
して酢豚！ 俺も酢豚は好物だ！」

更に余談だが.....。

シャルルが実はシャルロット・デュノアという女だと知ったのは、
それから数時間後のことであつた。

FLIGHT 16 I am divine Wind (後書き)

ちなみにレナルドの専用機ですが、本編中で述べた通り変形というよりは変身に近く、ISから通常より一回りくらい小さい戦闘機へと”変身”するような感じでした。なのでレナルドが無理な体勢で折れ曲がっている、という訳じゃありません。しっかりと戦闘機の中で操縦しています。ちなみに複座式。

修学旅行。

中学・高校の合わせて二つある一大イベントである。

当然ながら基本的カリキュラムが日本の高校と同一なIS学園にも

修学旅行”は存在する。

余談だが本作の作者が不幸な巡りあわせで、修学旅行が二連続広島・長崎だったのは激しく余談である。出来れば万里の長城を、見たかった………。

アイスランド首都レイキャビク。

その中でも武力の中心であるアイスランド軍本部の更に中心。総帥執務室にその男はいた。

「以上がレステングル少佐と”ホワイト・スコープオン”の戦闘データです」

「結構だ」

秘書からの報告にレステングル総帥は満足気に頷いた。

そして、ゆっくりと珈琲を口に含む。

この辺りは流石は親子とすべきだろうか。

「しかし可変型とは随分と、面白い機体じゃあないか。天才科学者篠ノ乃博士がレナルドにご執心というのは知っていたが、まさか専用機まで用意してくれるとは思わなかった。こういうのを、確か極東日本では『棚から牡丹餅』というのだったかな」

「はい」

「これで結果的に”六機”のISが我が国にあるという事になった。上々だよ」

五機ではなく六機。

もしアイスランド軍の事情に少し詳しい者がいたのならば首をかしげただろう。

なにせアイスランドの発表では現在アイスランド軍が保有しているISは四機。

レナルドの白蠍を足しても”五機”の筈だ。

これではアイスランドは国際的に嘘をついていることになってしまふ。

だがこれには絡繰りがある。

アイスランド軍はISをレナルドの白蠍を含めて”五機”しか所有していない。これは事実なのだ。

しかし軍が五機しか所有していなくてもISを所有出来るのは軍だけではない。

最後の機体のISはこの男。レステークール総帥個人が所有しているのだ。

「レイキャビク近くで発見された”騎士”だが……」

「あれは既に地下の秘密ドックに」

「そうか。それで例の計画。男性でも操縦可能なIS・あれの成果はどうなんだ？」

「結果が出ていませんので現状では何とも言い難く。ただ『理論上』は可能な筈です」

「『理論上』だけというのは別の名で『机上の空論』というのだよ」

「恐れ入ります」

「しかし気を付けてくれよ。」

『実験機やら秘密兵器は強奪される』という嫌なジンクスがあるからな」

「警備を強化させます」

「頼む。さて、IS学園は今頃……」

「修学旅行です。レステンクール少佐の報告書にその旨が」

「修学旅行、か。私は行ったことがないが……いいものなのかな」

「申し訳ありません。私も修学旅行というものには行ったことがないもので」

「それは残念。しかし何だろうな。」

今回の修学旅行。ただでは終わらないような気がする」

「なにがアクシデントがあるത്？」

「さあ、それは神のみぞ知る事だろうさ」

レステンクール総帥は不敵に微笑んだ。

心地よい風。

ミンミンと鳴く蝉のオーケストラは夏の訪れを感じさせる。

静かだ。

レナルド・レステンクールは穏やかな気分でコーヒーを口に含む。

「嗚呼、ここが極楽浄土か」

近頃騒がしい事ばかりだった為だろうか。

こういう静かな平穏が何者にも変え難い宝物だということを再確認した。

思い起こせば四月上旬。

突然のニンジン襲来事件。

そして転校して直ぐの『珈琲VS紅茶 天下分け目の決選』、『すぶたのなく頃に』、『カミカゼ特攻アリーナ崩壊事件』など多くの惨事。

短いながらもIS学園での生活は『平和の大切さ』を刻み付けるには十分すぎた。

「空を飛ぶのもいいけど、偶にはこうやって和むのもいいなあ」

「そうだな……しかしこの和菓子は美味しい」

隣にはラウラ。

彼女もどこか和んだ様子で和菓子をパクついている。

「明日になれば浜辺でもマラソンとかISの訓練やらで忙しくなるから……今日くらいマツタリ過ごすのも良いよなあ」

IS学園の修学旅行が、世間一般の修学旅行と同じな訳がない。

初日こそ自由時間が与えられているが、明日からは学園内では出来ないような訓練や、水上での模擬戦などやる事が盛り沢山なのである。

しかし初日は自由。自由なのだ。

こうやってラウラとレナルドのように旅館の縁側でまったり珈琲と和菓子をパクつこうと自由なのである。ここには口煩い教官もうざったい父親も、そして騒々しいハルマキと酢豚もないのだ。

「夏草や兵どもが夢の跡」

なんとなくそんな事を口にした。

「なんだ、それは？」

「俳句だよ、俳句。」

松尾芭蕉の俳句」

「ほう。どういいう意味なんだ？」

「意味？ ……………知らない」

「意味は知らないのか？」

「仕方ないだろ。俺日本人じゃなくてアイスランド人だし。

前に日本の学校に通っていた頃に、国語の授業で習った俳句を適当に言ってみただけだよ。

今は夏だし、俺もお前も兵士だし……………ぴったりだろ」

「そうか。しかし、」

「なんだ？」

「なんとなく穏やかな気分になった。

きっと穏やかで幸せな歌なんだろうな」

「そうだよ、きっと…………」

ちなみに『夏草や兵どもが夢の跡』

これは芭蕉が奥州平泉に立ち寄ったときに詠んだ句で、平泉といえば義経が臣下と共に立てこもって討伐軍と戦った地であり。「兵どもが夢」というのはそのことを指している。

嘗て武将達が各々の願いや野望をいだいて戦い、そして儚く散っていった居城も、今となっては夏草が生い茂るばかりだ、というような情景を謳っているのであって、決して幸福でも穏やかでもない。

「なあレナルド」

「……………いや、珈琲が美味しいなあ」

「いや珈琲は兎も角、何故かは知らないが、中庭に存在を誇示している巨大なニンジンがあるが」

「気にするな。あれは幻想だ。」

そして軍人が相手するのは幻想じゃなくて現実だ。

幻想なんて幻想殺しに任せてしまえ」

「……………何を言っているか分からないが、あれは間違いなく現実として存在するニンジンだぞ」

「ふうむ」

流石に無視する事は出来ないと悟ったのかレナルドは立ち上がる。そしてニンジンにあるものを付けるとラウラのいる場所に戻ってきた。

「さてと、折角だし海にでも行くのでしょうか」

「それはいいが……………あのニンジンに何をしたのだ？」

「はははは、汚染された野菜はしっかりと焼却処分しないとな。」

……………まあそんな事はどうでもいい。海だ海。

青い海……………じゃなくて、対して綺麗でもない緑色の海に行こうぜ」

水着を持って旅館を出る。

どこか遠くでプラスチック爆弾の爆発音が聞こえたような気がするが、気にしてはいけない。

もしあのニンジンが自分の想定する中で最悪の人物が入っていた

としても、まあ大丈夫だろう。

旅館に被害が出ないように計算もしてある。

あんな自然の摂理に真っ向から反逆したような巨大ニンジンはこの世から消滅するべきなのだ。

「ニンジンアレルギーじゃなくて本当に良かった」

さあ行くぞ。

ニンジンは滅んだ。

真っ青……じゃなくて、日本らしい緑色の海が待っている。

「れっくん！ 待ってよぉ〜！」

「ええい、来るな！ 逃げるぞ、ラウラ！」

捕まったらニンジン帝国に連れてかれるぞ！」

さてこの修学旅行で一つ悟ったことがある。

それは天災からは絶対に逃れられないという事だ。

FLIGHT 17 極秘事項(後書き)

レナルドの専用機、日本語名は『白蠍』
機体の色は黒なのに白蠍。

つまりは……………オセロ蠍。

私の人生における成功のすべては、どんな場合でも必ず15分前に到着したおかげである。

時間を守れない人間というのは、大抵の場合において信用できない。時間というものを疎かにすれば、人間社会の歯車というのは容易くズレていく。

電車を見れば分かり易いだろう。電車が二十分遅れるだけで、一体どれほどの“歯車”は容易くズレていくのだ。

思い起こせば、そいつと出会ったのは単なる偶然だった。

他の奴らがサボったせいで女子二人だけでやらされていた掃除を手伝ったせいで、少し遅くなった俺は早足で下校しようとしていた。なにせその日は筭と道場で約束があったから。もし時間に遅れるような事があれば、間違いなく筭は怒る。それに男として女を待たせるなんていうのは、あまりしたくはない。

「なにやってるんだ、あいつら」

ここで無視していれば歴史は変わったのかもしれない。もしかしたらその後においても男のIS操縦者は俺一人だったのかもしれない。

けど現実では俺は見てしまった。そして見てしまったからには未来を見通すことの出来ない俺は無視することなんて出来なかった。

それは、まるでドラマなんかにあるような光景。

一人の外国人と思われる白人の児童が、1学年上のガキ大将とその取り巻きに校舎の裏に連れて行かれるのを俺は見た。そういえば、一つ上の学年にアイスランドから転校生が来たと言っていたな。

「たつく、あいつら……」

俺も男の子だ。

別に喧嘩を否定する訳じゃない。

けどそれは一対一での場合だ。複数で一人を相手するなんて、それは喧嘩じゃなくて虐めだ。

止めよう。

そう思った俺はガキ大将を追って、校舎の裏へ行き、そして絶句する。

そこにあつた光景は予想とは違っていた。

被害者になるであろう外国人の少年によって、五人の取り巻き達は打倒されていた。残っているのは小学生でありながらも中学生並みの体格を誇るガキ大将。

けどそのガキ大将も外国人の少年によってあっさりと倒された。

確信する。あの外国人の少年は素人じゃない。きっと自分と同じように武術の心得があるのだと。

その時は帰ろうと思っていた。

もう自分が止めるべき虐めはないと、そう思っていたのだ。けれど……

「このイエローモンキーがっ！　ざまあねえなあ！

寄ってたかって俺一人も倒せねえのかよ！　ああ！」

喧嘩は、終わってなかった。

外国人の少年はガキ大将達を撃退しただけでは飽き足らず、倒れたガキ大将達を蹴り続けていた。

「この三下野郎が、偉そうに三下以下の雑魚引き連れて粹がってんじゃあねえよお！」

おらあ、なんとか言え、この野郎お！」

「止めるッ！」

無意識に、気づいたら飛び出していた。

いや意識がすっかりとしていても飛び出していたらどう。

何故ならばもうこれは喧嘩じゃなく、ただの虐めになっていたから。

だから止める。そう、俺を守ってくれた千冬姉のように。

「ああ。なんだ、テメエ」

外国人の少年がこちらに向き直る。

青い瞳が俺を射抜く。

「もう止めるよ。勝負はついただろう」

「勝負う？ 馬鹿じゃねえのか。」

最初から勝負なんてしてねえよ。馬鹿野郎。

ただ少し生意気な猿に躡をしてやってたんだよ。

こういう風に、なあ！」

「ひでぶっ！」

だけど終わりはあつけないもので、帰りが遅いのを心配して来た千冬姉によつて二人とも喧嘩両成敗ということでお説教されて、それから何だかんだあつて………気づいたら友達になつてたんだよなあ。

本当に世の中つてよくわからない。

結局。

追つてきたニンジン星人を装備の70%を代償に撃退してから、あのウサミミは現れなかった。

ごく普通に海で泳ぎ、酢豚を食べ、珈琲をブレンドし、ナイフを研ぎ、銃を整備し、珈琲を飲み、そしてビーチバレーをして、夕食を食べ、珈琲をブレンドし、一夏にマッサージをして貰い、ハルマキと戦争して、珈琲を飲み、珈琲緑茶帝国と紅茶烏龍茶共和国との間で第一次学園大戦が勃発し、珈琲をブレンドし、ニンジン爆破し、珈琲を飲み、そして就寝する。

実に平和な1日であった。

ニンジン星人の襲来さえなければ。

そして合宿2日目。

今日は午前中から夜まで丸1日ISの各種装備試験運用データ取りに追われる。

特に自分も含めた専用機もちは、その装備の量が半端じゃないの大変だ。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行う

ように。

専用機もちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

合宿に参加しているIS学園生徒一同がきれいに返事をする。

それにしても、とあたりを見渡す。ここに搬入されたISの新型装備のテストが今回の合宿の目的の一つである。当然、生徒は全員ISスーツ姿だ。

しかし、こうして見ると……………。

(ううむ、やっぱりシャルルは女だったのか)

顔立ちが変わった訳ではないが、その胸のふくらみが彼女が彼ではないことを如実に示していた。つまり本当は男なのに女のふりをしているという可能性はないわけだ。

(そういえば男だと思ってたから色々”スキンシップ”をとったな)

具体的には、後ろから小突いたり、服を脱がそうとしたり、ポルノを見せたり、猥談を聞かせたり、女体の神秘を語ったりと。

男なら兎も角、女にやったのならばセクハラ以外の何物でもない。ただ、

(ま、仕方ないか)

そもそもシャルルが自分を「男」と偽装していたのが悪いのだ。詳しい理由こそ聞いていないが、どちらにせよ嘘は嘘。男とシャルルが名乗ったからこそ自分もまたシャルルを男と思い接したのだ。

一夏のように紳士的人間ならば謝罪の一つでもするのだろうが、残念ながらレナルド・レステンスという男は良い意味でも悪い意

味でも『男女平等』な男であった。

「ああ、篠ノ乃。お前はちょっとこっちに來い」

「はい」

打鉄の装備を運んでいた箒は、織斑先生に呼ばれてそちらに向かう。

「お前には今日から専用

」

「ちーちゃ~~~~~ん!!!!」

「!」

その声を聞いた時のレナルドはまるで鏡に反射する光のごとく、実に自然かつ素早い動作でISを展開、そして可変ライフルを呼び出した。その間、なんと驚きの1秒。自己最短記録を大幅更新である。そのままライフルを連射した。突撃したウサミニンジン星人に。

「お、おいレナルド……幾らなんでも、あれは……」

一夏がやり過ぎだと言ってくる。

「レステンクール」

「はっ」

対する織斑千冬は。

「残念だったな。あれはその程度では死なん」

「……………そうですか、残念です」

果たして言葉通りであった。

瓦礫の中から不死鳥のように蘇ったウサミミの女性は思いつきり飛び上がると、

「うむむむ……………出会って早々の連射。ううう、れっくんが反抗期だよ。」

これが俗にいうツンデレだね！」

「安心してください。デレがありませんから」

これ以上はない冷たさでレナルドが言う。

普段の様子からは考えられない。

「織斑先生、胃が痛むので休んできていいですか？」

「普段なら却下する所だが……………今日はいいだろう」

自分の望んだ答えを得られるとレナルドはさっさと退避する。

ちなみに胃が痛いというのは本当である。この年でどうもストレスが大変なことになってるらしい。

「ちょっと、ちょっと！ スト~~~~~~~~ッブ！」

「ええい、なんですか!？」

「ホワイト・スコピオン、貸して？」

「何故です」

「ええと、この前の学年別トーナメントで初めて変身したじゃん。だからちよつと整備を兼ねて点検をねえ」

何でIS学園の日程と詳細を知ってるんだ。

そついていたいのを堪える。この人に常識が通じないことはよく知っている。

「そついうことなら、わかりました」

待機状態のホワイト・スコピオンを渡す。

そして最後に束を一瞥すると、レナルドは早足で去って行った。

海岸線を見ながら、レナルドはゆつくりと腰を下ろす。
それにしても海は静かだ。あの生きる天災の喧騒もここには届かない。

「はあ……」

白状すればレナルドは束のことが嫌いではない。

子供のころは良く一緒にラジコンを作ったり、修理してもらったこともあし、顔立ちだつてレナルドの好みだ。

無論、多かれ少なかれ鬱陶しくは思っているが、それでも本当に嫌っているのならば会話することもなく完全に無視する。

「けど、なあ」

どうにも篠ノ乃束という女性は苦手だ。

束の作り出したISのせいで、戦闘機が戦場の主役ではなくなつたというのもそうであるし、全く昔と変わらないテンションを前にすると、粗暴で乱暴だった子供の頃の記憶が否応にも蘇ってしまう。

「だけど俺を空に帰してくれたのも、あの人なんだよな」

皮肉なことだ。

篠ノ乃束という女の作り出したISのせいで、自分は空を追われ、篠ノ乃束の作り出した専用機のお蔭で自分は再び自由に空を飛べるようになった。

一体、あの人は自分になにをさせたいのだろう。

ずっと昔、とても大切な、忘れてはならない約束をしたような気がする。

もし君がその願い事を、大人になってもずう／＼と持っていていたら……

ずきんと胃が痛んだ。

本当に最近は密度の濃い日々が続く。

こういう時は、また嫌な事件が起きそうな予感が

「レナルド！」

「篤？」

「織斑先生が呼んでいる。専用機持ちは全員集合するそうだ」

「な、に？」

「どうやら嫌な予感があつたようだ。」

「嫌な予感ほど良く当たるといっが、本当だな。」

「どうした、レナルド」

「あ、ああ。直ぐ行く。」

「けど箒。何でお前もついてくるんだ？」

「箒は専用機持ちではない筈だ。」

「もしかしたら案内をしてくれるのだろうか。」

「実は、私も専用機持ちになつたんだ」

「嬉しそうに箒が言った。」

「その顔は嬉しげであり、同時に新兵特有の危つさを感じさせた。」

FLIGHT 18 過去と未来（後書き）

ちよつとだけレナルドの過去話。

実は日本に来たばかりのレナルドは手の付けようのない乱暴者だった、と。

そして束。このままだとヒロインは束とラウラの一騎討ちになりそうですね。

シナリオ。

舞台や歌劇、小説や漫画に至るまで『シナリオ』というのが存在する。

シナリオがあるからこそ物語は流れていく。物語は進んでいく。だけど現実にも『シナリオ』はある。

さて、今回の事件。シナリオを決めたのは誰か。

それさえ理解できたのならば、全ての疑問は納得いくであろう。

一夏が撃墜された。

その事実はレナルドを初めとする専用機持ち達。

そして只ならぬ気配を察したのか、現状を知らされていない一般生徒にも影を落としていた。

事の始まりは数時間前。

ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代の軍用IS。

通称『シルハリオ・ユースベル銀の福音』が制御下から離れて暴走し、監視空域より離脱した。

その後衛星の追跡により、現在IS学園が合宿中の旅館より約2K先を通過することが判明。

学園上層部の決定により合宿中のIS学園生徒によって、この事件に対処することとなった。

学園側の現場指揮官である織斑千冬は、自身のクラスの生徒である専用機持ち、織斑一夏と篠ノ乃箒を派遣。一夏の専用機である白式の零落白夜の破壊力と、紅椿のスピードが必要だったからこそその選択であった。

ただしその決定に対してレナルドは反対。自身の作戦への参加を求めた、が却下されてしまう。レナルドの専用機である白蠍の調整が1時間は必要とのことなのが主な理由であった。

かくして一夏と箒の二人は、共同して暴走中の『銀の福音』シルバリオ・ユスベルに対して攻撃を仕掛けたのであるが、結果は、失敗。

作戦に参加した内の一人、織斑一夏の撃墜という最悪の結末であった。

もしもISの絶対防御がなかったのならば、一夏は間違いなく死んでいただろう。

その後『福音』は空域で停止。

現在専用機持ち達は待機を命じられ、織斑千冬はその後の対策に追われている。

「はあ」

溜息をつく。

今自分の手にあるのは先程、篠ノ乃束によって返還された専用IS、ホワイト・スコープピオン。

強く握りしめる。

もっと早くこれが戻ってきていれば一夏は。

「慣れないな」

パイロットになってそれなりに経つが、何時になつても『撃墜』の2文字には慣れることが出来ない。それが例え戦死じゃなかったとしても、やはり駄目だ。

特に自分が戦場に出る事すら出来なかったとくれば、その無力感
は半端ではない。

「レナルド」

「あつ？」

振り返るとラウラが立っていた。

違う、ラウラだけじゃない。

ハルマキ……いやセシリアが、鈴が、箒が、シャルルが。

どこか『覚悟』を秘めた瞳でレナルドを見ている。

(この目……何処かで……)

見たことがある。

そう漠然と感じた。

「おい。お前等、一つだけ聞いておくぞ。

一体全体なにをする気だ？」

そうレナルドを除いた五人が着用しているのは等しくISスーツ。
今現在待機命令が出ている自分達が着ているのは制服でなければ

可笑しい。

「あら野蛮人は頭脳まで低いので？
今から『福音』を倒しに行くに決まっていますでしょう」

「馬鹿な……！ 待機命令が出てるのを忘れたのかっ！」

「それでも私は行く」

答えたのは箒だった。

「なに一人で格好つけてんのよ。さっきまでメソメソしてた癖して」

「う、うるさいぞー！」

「それにね。私じゃなくて『私達』でしょ」

「……………そうだな」

「話にならない。シャルル、ラウラ。」

お前たちからも言っちゃれ。俺たちは『待機』だ。

『出撃』しろなんて命令は下ってない」

しかしレナルドの期待を裏切るかのように、シャルル・デュノアは。

いやシャルロット・デュノアは首を振った。

「じゅめん。けど、僕も行くよ」

「お前まで！ ラウラ！」

最後の期待を込めてラウラに言う。

そつだ。ラウラだけは自分と同じ正規の軍人。

命令違反など許容する筈もない。

「そつだな。確かに『出撃命令』は下っていない。

軍人として、命令違反なんて最もしてはいけない事の一つだ」

「そつな、なら

」

「しかし私は知った。

軒並みな意見ではあるが、命令を比して尚も重いものを」

「命令より、重い？」

「そつだ」

言つとラウラは、五人は去っていく。

恐らく、福音のもとへと向かうのであろう。

それをレナルドは、ただ見送る事しか出来なかった。

五人が去つて幾何かの時間が過ぎた。

負傷した一夏を除き、唯一命令に従い待機しているレナルドは、
途方もない虚脱感に襲われていた。

（何考えてるんだ、筈や他の奴ならまだしも、軍人であるお前まで

……）

そつだ。

自分は何一つ間違っていない。
軍人は命令を遵守しなければならないのだ。
間違っているのは自分ではなく、命令違反を犯して出撃した五人のほうだ。

そう頭では納得させた。

けれど如何しても……『心』が納得出来ない。

「よお、レナルド」

「一夏、起きたのか」

「随分と寝坊しちまったみたいだけどな」

何故か不思議には思わなかった。

レナルド・レステンクールにはこの状況で織斑一夏が目覚めるのは、ごくごく自然なことに思える。理由は良くわからないのだが。

「お前も行くのか」

「ああ」

「たつく、どいつもこいつも……」。

待機命令が出ている。出撃は認められない」

「そうか。じゃあ、命令違反することになるな。

参った、後で千冬姉のお説教フルコースだよ。反省文三十枚くらい書かせられるかも」

そう一夏は笑った。

命令違反なんて全く恐れていないかのよう。
そして気づく。

一夏やラウラ達のしていた瞳は、嘗ての自分自身だったのだ。まだ若く、パイロットになったばかりの。ただ純粹な正義感だけで命令を無視できたあの頃の。

それが何時からだろう。命令に背くことが出来なくなったのは。

「そうだな。俺は怖かっただけだ」

「怖い？」

「そう怖い、命令違反という行為が。」

命令違反を犯したら自分や他の皆の命が危機に晒されるかもしれない、なんていう感動的な理由じゃない。ただ命令違反した後、どんな処分が待っているのか……それが怖かったんだよ、俺は。体制に逆らうのが恐ろしかったんだ。

けど仕方ないだろ。誰だって大人になって社会の歯車に組み込まれれば、自分の意思で動くことなんてできない。結局は体制に従うことが要求される」

「そうだな。お前の言うとおり、やっぱり命令違反は悪いことだよな。」

けど体制に従って仲間を守れないのが大人だっというなら、俺は大人になんかならなくなっちゃったっていい。ずっと餓鬼のまま、仲間を守り続けてやる」

「そっか」

今一度、自身に問いかける。

レナルド・レステンクールは『餓鬼』か『大人』か。

解答。

レナルド・レステンクールは、

「くつくつくつ、ああそつだよなあ。

今の俺は『軍人』じゃなくて『生徒』だ。

そつだ『生徒』は『大人』じゃねえ。ガキだ。

馬鹿で阿呆で間抜けで、大人の敷いたルールつてやつを平然で無視して馬鹿騒ぎしてる餓鬼だ」

多少口調が子供の時のモノに戻る。

尚もレナルドは続けた。

「そつだ、俺達は『餓鬼』だ。

ルールも命令も糞喰らえッ！」

「お前だけじゃない。俺も一緒だ。

二人で命令違反しようぜ」

「そつと決まれば」

白蠍を天高く放り投げる。

太陽の光に反射され輝く白蠍は、やがて戦闘機へとそのフォルムを変え、大地に降り立つ。

「ホワイト・スコープオンが複座式で助かった。

一夏乗れ。白式のエネルギーをつまらない事に使う事もないし、こいつは紅椿よりも速い」

「そつか。ははっ、正直言つと俺戦闘機つて初めて乗るんだよな」

「ならケツに力込めとけ。っと込めすぎて捻り出さないようにな」

レナルドの中で色々なモノが崩れ落ちていくような音が聞こえた。
だけど良い気分だ。

例えるならば長い刑期を終えて出所したような、とても爽快な気分だ。

「あの『福音』をぶっ潰しに行くぞ！」

FLIGHT 19 糞 餓 鬼 (後書き)

さて、もう完全に前作主人公とは違う存在になりました。

レナルド大人から子供へ退化。精神的に成長するのではなく精神的に幼くなる主人公。わりと駄目な主人公です。

済んだことは済んだことだ。過去を振り返らず、希望を持って新しい目標に向かうことだ。

過ぎ去った過去を変えることは出来ない。

例えどれほど願おうとも、人の身にある限りそれは叶わぬ夢である。ならば、それを為そうとするのならば、人間を止めなければならぬ。

太平洋上。

篠ノ乃東お手製の第四世代IS紅椿を纏う箒は呆然と迫りくる『福音』を見上げていた。

愚かなものだ。

一念発起。

自分を奮い立たせて再度『福音』に挑んだものの結果は変わらなかった。

ラウラや他の皆が叫ぶが、もう遅い。

無人機であるが故に人の心を持たぬ『福音』に情け容赦という言葉は微塵もない。

篠ノ乃箒はここで斃れる。

それは確定された未来に思われた。

味方の援護は間に合わず、援軍は絶望的だ。
元々篤達は命令違反を犯して此処に来ているのだ。
それにあそこに残っている専用機持ちは二人。
レナルドは来ることを拒否し、一夏は前回のダメージのせいで寝
込んでいる。

だから篤には目の前の光景が信じられなかった。
雄大なる空。
そこに一機の風があった。

「うそ

」

呟いた声は風に吞まれる。

真つ青な空と真つ白な雲を貫く漆黒の白蠍。

ホワイト・スコープイオンが戦闘機の姿をもって、戦場へと飛翔し
てきた。

「一夏ア！」

「応！」

ホワイト・スコープイオンのコックピットが開く。

そこから『白』が飛び出してきた。

光を反射し輝く純白の機影、この世界における二人の男性IS操
縦者の一人、織斑一夏の為に用意された専用IS。名称は、

「行くぞ白式！」

白式の刃が『福音』を攻撃。

しかし惜しい、寸前のところで『福音』は後退。白式の刃は空を

切る。

けれど、それは、

「俺を、忘れるなア！」

戦闘機形態だったホワイト・スコピオンが瞬時に通常のISへと”変身”する。

右手に構えるのはBT兵器と実弾兵器のどちらにも変更可能な可変ライフル。

トリガーを引くと、銃口から一斉にビームの嵐が『福音』を襲った。

『

』

声にならない声が『福音』から漏れる。

刃を躲せた福音だが音速で飛ぶ銃弾を躲すことは不可能であった。直撃を受けた『福音』が後退しようとするが、

「一夏、シャルル、ラウラ、酢豚中華人、そんなもってハルマキ！
相手はたった一機だ、困んで仕留めろ！」

「分かった！」

「うん！」

「了解！」

「ちょっと、私って酢豚で固定なの！？」

「誰がハルマキですか！ 誰が！」

いいですこと。このセシリア・オルコットの手に掛ければ、ISの五十機や千機」

「セシリア。そんなの如何でもいいから連携をとるぞ！」

「い、一夏さんが言うなら……………仕方ありませんわね」

「さつさとしろ。それと、ISは467機しかない。千機もあるか馬鹿」

「ちょ、馬鹿とは何ですの。この野蛮人！」

「なにを、この糞婆！」

「ば、ババア！？ わ、私はまだじゅう」

「レナルドもセシリアも喧嘩してないで連携をしろ！」

「……………了解」

一夏に言われ二人の口喧嘩が終わる。

変わりに二人の顔つきが変わる。それは紛れもなく戦士の貌。

学生であるレナルドとセシリアは既にそこにはおらず、いるのは凜猛な狩人がいるのみであった。

対して筈はそれを見ていることしか出来ない。

レナルドが、鈴が、セシリアが、シャルロットが、ラウラが、そして一夏が。

皆が必死に戦っているというのに自分は何もできない。

「私も、」

戦いたい。

あそこで、肩を並べて戦いたい。

無心の願いは果たして届いた。

「これは」

溢れ出す光。

紅椿はその現象を四つの文字で示した。

「絢爛舞踏。これが紅椿の」

箒の心は決まった。

福音の波状攻撃に一夏は有効打を掴めないでいた。

白式の零落白夜が決まれば一撃で落とすことも出来るというのに、福音は頑として白式に近づこうとはしない。前回の戦いで零落白夜の情報が『福音』に記録されてしまった為だろうか。

「くそ、エネルギーが！」

ここに来るのはレナルドのホワイト・スコピオンに同乗することと節約出来たが、それでも白式の燃費は非常に悪い。

ホワイト・スコピオンはもとより、セシリアの『蒼い雫』にも劣るほど。

このままではジリ貧だ。そう思って一時後退しようとした所で、

「一夏ッ！」

「箒！ お前、ダメージは！？」

「大丈夫だ。それよりも、これを受け取れ！」

箒の紅椿の手が白式に触れる。

その瞬間、一夏の全身に電流のような衝撃と炎のような熱が走り、一度視界が大きく揺れた。

「な、なんだ……？ エネルギーが回復！？ 箒、これは」

一夏の脳裏に『単一仕様能力』という言葉が浮かび上がる。

白式の零落白夜は対消滅の一撃必殺の攻撃だったが、この回復こそが紅椿の真価なのだろうか。

だとすれば、凄まじい性能だ。流星は篠ノ乃東お手製というべきだろう。

「よし、これで」

戦える。

雪片式型に力を籠め疾走。

逃げる『福音』

どうやら機械だてらに、白式の攻撃力を恐れているようだ。

「やっぱり、まだまだだよなあ」

一夏は深く自覚する。

自分はまだまだだ。

チームプレイにおいてシャルに劣らないし、剣道だって箒には負

け続きだし、ビットを動かすなんて到底不可能だし、鈴の反射神経にも及ばないし、ラウラのポテンシャルには到底及ばない。

されど一夏は深く確信する。
敗北、ではない。勝利をだ。
織斑一夏は勝利を確信した。

「今だ、親友！」

「おうよー！」

遙か高い上空から黒い流星が突進してくる。

ホワイト・スコープピオンはそのフォルムを戦闘機の姿へと変え、紅椿を、いや元々の自機のスピードすら凌駕して『福音』へと突き進む。

「安全性上昇！ カミカゼ、アタアックッ！」

先日束の手によって調整された白蠍。

今のホワイト・スコープピオンは一度だけ、自滅しないでのカミカゼを可能としている。

尤も二度目はないが。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

突き刺さった、福音にホワイト・スコープピオンが。

瞬間、白蠍がそのフォルムを通常に戻す。

対する福音は予定外の大ダメージに動けない。絶好のチャンスである。

発動する零落白夜。

もう外さない。そう、俺は。

「勝つ！」

零落白夜の刃が『福音』を切り裂いた。

そして余りのダメージを受けた『福音』は最後に一度だけ大きく震えると、その機能を停止した。

「これで」

「ああ、終わった」

まあ尤も。

敵を倒しました。はいお終い、と成程世界とは都合が良くない。

『福音』を撃破したレナルドと一夏達を待っていたのは織斑千冬の教官閣下による『反省文』という重い現実と、ほんのちよつとだけの優しさであった。

ただ、なにはともあれ今回の『福音事件』は終結した。

ここから先は生徒の領分ではない。後始末は大人の仕事である。そして生徒は子供、大人ではない。

星が出ていた。

夜空に爛々と光る星空は、レナルドの心にどうしようもない憧れを思い起こさせる。

「ご苦労様だったねえ、れっくん」

「東さん、か」

レナルドは振り返らなかつた。

礼儀知らず、といえはそうかもしれないが、篠ノ乃束という女性に普通の礼儀作法を遵守することがどれほど馬鹿馬鹿しいことなのかを、彼はよく知っていた。

第一、篠ノ乃束という女性自体が、そのような礼儀をどうでもいと考える人間であることに疑念はない。

「綺麗だね、一人でソラを見てるの？」

星を、とは言わなかつた。

「そうですねよ、綺麗なソラでしょう」

一夏と一緒に命令違反して、こうしてソラを見上げると、なんとなく自分の原点に戻れた気がする。退化どか成長とかじゃない。

レナルド・レステンクールという人間が、物心ついた時から抱き続けた願望、憧れ、理想。

「ねえ、れっくんは何がしたい？」

それは確認だった。

篠ノ乃束という一人の女性が、少年レナルド・レステンクールと嘗て交わした約束。

もし仮にであるが、レナルドが在り来たりな解答をしたなら、篠ノ乃束という女性はレナルド・レステンクールの興味対象から外す

かもしれない。

彼女が興味を抱いたのは子供のころの、ただ純粹にある願いを抱いた少年だったのだから。

そして、もしも彼がその願いを大きくなるまで抱き続けることが出来たのならば、その時は。

夕食を食べ終え部屋で涼んでいたラウラはふつと意識を覚醒させた。

どうやら柄にもなくぼあくとしていたらしい。

なんとということだろうか。もしここが戦場であったならば確実に死んでいた。

どうも最近では弛んでいる。気を引き締めなければ。

ふと、布団の傍においてある本が目に入った。

その本の題名は『ヒトラーVSヒスマルク』というドイツでも中々手に入らないマニアックなものだ。無論中身もドイツ語である。

「ああそうか。借りたまま、だったか」

レナルドが読んでいたのを偶々目撃して借りたのだ。

まさか伝説的な本がこんな身近にあるとは思わなかった。

内容が余りにもアレなために、ネオナチとドイツ政府両方から追われ、今では世界に二十冊もない貴重な本である。

その本を常日頃から一度でもいいから読みたい、と思っていたラウラである。

その日のうちにレナルドに貸してくれと頼み、そしてこの合宿中によろやく読み終えたのだった。

「返そう」

そう思えば行動が早い。

早速ラウラは着替えを済ませ、クラスメイトからの情報収集によりレナルドが海岸へ行っただということを知ると、そこへ早足で向かっていった。

知らず、ラウラの歩調は軽やかだ。

レナルド・レステンクールという友人を思い浮かべると、不思議と嬉しくなる。

その感情を、ラウラ・ボーデヴィツヒは知らない。

本来の歴史であるならば、とある少年のストリートな言葉と織斑千冬が前に言っていた忠告により、その気持ちの正体を自然と理解できたのであるが、今の彼女には切欠というものが致命的になかった。

それ故に、未だにその気持ちの正体に気づけない。”切欠”ができるまでは

暫く歩いていると、見つけた。

日本では珍しい金の髪。そして長身。

間違いなく、レナルドだ。思いつきりその彼の名を呼ぼうとして、

「

瞬間、全ての声を忘却した。

何がしたいか。

天才篠ノ乃束の出す問いにしては普通すぎるそれ。
けれどレナルド・レステンクールは一切迷いなく、返答した。

「俺は、ソラを飛びたいんだ」

答えなんて決まっていた。

やはりどんなに取り繕っても、その原点だけは変わらない。

レナルド・レステンクールが真実『レナルド・レステンクール』
である限り、その願いは消えない。理由など当に忘れた。いや、も
しかしたら最初から理由なんてなかったのかもしれない。

ただソラがそこにあった。

だからレナルドはソラを飛びたくなかった。

それだけの、湧き上がる剥き出しの願いだ。

「それじゃあ」

「！」

気づけば篠ノ乃束の顔がレナルドの正面にあった。

口元を感じる甘い味。この甘みをレナルドは知っている。

「約束したでしょ」

彼女は、覚えていた。

「私が翼をあげる。どんなソラにでも飛んでいける翼を」

白蠍が光った気がした。

もっと、束という女がもっと深くレナルドを

「

」!

パタン、という音。

それはこの場に似つかわしくない、なにか教科書なんか落ちるような音。

「ラウ、ラ」

レナルドは見た。

月明かりに照らされ、呆然と立ちすくむラウラの姿を。

その瞳には、透明の雫が溢れていた。

FLIGHT20 愛の夢 第三番（後書き）

修羅場アーーーーーッ！

修羅場です。本当に修羅場です。

メインが『悲恋』と『騎士道物語』だった前作と違って、かなりの修羅場です。

これぞ三角関係。

好きなことを仕事にすれば、一生働かなくてすむ。
働くというのは娯楽ではない。

しかし仕事が好きなら、仕事は娯楽となる。
つまり働くということが遊ぶことと同義となるのだ。
これほど馬鹿馬鹿しく、つまらないものもない

IS学園。

数ある高校の中でも日本一、いや世界一といって過言のない難易度と倍率を誇るIS学園においても夏休みというのはある。

ところで……。

ここIS学園においても一握りのエリート。即ち代表候補性と呼ばれる生徒たちがいる。

彼女達は其々が一つの国家の代表であり、総じてトップクラスの實力を持っている。

そしてフランスの代表候補性であるシャルロット・デュノアには一つの悩みがあった。

(~~~~~んっ)

訂正、一つではなく結構悩みがあった。

ただ主なものを二つあげるとするのならば、思春期の女子高生にはありがちな『恋愛』と『友人関係』の二つに分類されるだろう。尤も彼女の場合、これに『実家の問題』が加わるのだがそれは置いておく。

先ず一つ目。

恋愛のことであるが……熱心なISファン、いや余り熱心でないISファンにも分かると思うだろうが、織斑一夏のことである。はつきり言つて一夏は朴念仁だ。イケメン、黒一点とくればお約束であるが、とんでもない朴念仁である。スーパー朴念仁である。しつこいようだが朴念仁である。もう病気なんじゃないかと錯覚するほどに朴念仁だ。

シャルロットの目から見て自分も含め都合四人。

一夏に好意を寄せているが、当の一夏本人は全く気付いていない。まあ、それはいい。最初のころはドギマギもしたが、あんまり一夏が朴念仁だとシャルロットもムキになるのが多少馬鹿らしくなる。

今一番の問題は友人関係だ。

その友人関係の問題というのは一重にレナルド・レステンクールというクラスメイトに集約される。

レナルドが自分のことを未だに『シャルル』と呼び続けていること……これはそれほど気にしていない。本人曰く「もう呼び慣れてしまったから直せない」らしい。というのも自分が男装なんかしてたのが悪いのだし、多少苦手ではあるがレナルドも友人の一人だ。

そんな事で目くじらを立てるほどシャルロットは大人げなくない。

大問題なのは同居人であるラウラだ。

「……………」

暗い！

まるでお通夜のようにラウラは暗かった。
ガンという音が今にも聞こえてきそうである。

「ね、ねえラウラ」

「……………」よんだか、

シャルロット」

「えと、そのお。レナルドと何かあったの！？」

言うてから「しまった」と思った。

余りにも直球過ぎる。これではラウラは、

「……………」ちよつとな

(何処が、ちよつと!?)

思わず心の中で突っ込みを入れる。

しかしどうしたものか。

シャルロットとしても同居人がこんな状態なのは好ましくない。
ならばと思い、レナルドのほうに理由を聞いてみたのだが、こちら
も「ちよつとな」と返答されてしまった。変な意味で似ている二
人だ。

(一体全体どうしよう……………?)

そうだ、こつこつという時の対処法は……………確かレナルドが)

レナルド直伝、悩んでる相手の対象方法。
その一、嫌なことは何か食べさせて忘れさせるべし。

「ねえラウラ。お腹すいてない？」

「すいてない」

失敗だ。

ならば、対処法その二、飲ませて記憶を消失させるを。

「ラウラ、お酒飲まない？」

「駄目だ。アルコールは脳細胞を破壊する」

大失敗。

というより未成年は飲酒禁止だ。

レナルドは飲んでるらしいが。

(やっぱり対処法その三に頼るしかないかな)

その三、即ち兎に角遊ばせまくって忘れさせる作戦。

というより最初からラウラに通じそうなのがこれしかない。

「ラウラ、僕と遊ばない？」

「」

「!!!??」

瞬間、扉が開かれた。

そこに居たのは箒と鈴。

二人ともポカンと口を開けている。シャルロットも気づく。さっきの言い方だと、幾らでも違う方向に解釈可能なことに。しかもシャルロットはお風呂上りで多少色っぽくなっている。ラウラに至っては裸だ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………お邪魔しましたー！ー」

「ちょ、待って！二人とも絶対勘違いしてるよ！」

「すまない、私達が空気を読んでいなかった」

「所謂KYね。」

「ごめん、アンタたちがそういう関係だなんて。だけど大丈夫。私ちよつとは……………そういうのにも理解あるから！」

「やばい。」

「このままだと自分の社会的立場が不味い。慌てて二人を追いかける。」

「だから違つって。ただ純粋にラウラを”遊び”に誘おうとしただけだよ！」

「じゅ、純粋な想いなのか！」

「そこまで進展していたなんて……」

「だから違うよ。僕はただ一緒に街や公園でもいかないかなーと」

「街や公園！？」

「野外プレイだなんて、そんな趣味が」

「シャルロット、流石に野外というのは………不埒でないかと私は思うぞ！」

「ああもっつ！ だから本当に全然意味が違うよ！！！！！」

流石のシャルロットもキレた。

そりゃもう色々なものが。説得すること数十分。

漸く鈴と篝の誤解を解くことに成功したシャルロットは気を取り直して問いかける。

「それで、どうかしたの？ いきなり部屋をあけて」

「それなんだけど、シャルロットって来週空いてる？」

「空いてるけど、なんで？」

「実はね

」

「アイスランドにIS学園の生徒を！？」

多少時間は遡る。

IS学園から多少離れた場所にある施設。

そこでレナルドは不幸にもIS操縦者となったせいで、直属の上官になってしまった軍総帥である父親と連絡をとっていた。

「その通りだ。レステンクール少佐。

なに別に全員連れてこい、という訳じゃない。

ただ先日の福音事件。それを解決に導いた六人には多少興味があるんだよ」

戸籍と血縁上は自分の父親である男の言葉にレナルドは反発した。タメ口ではない。こうみえて、この男は公私混同はしない。ここにいるのはレナルド・レステンクールではなく、アイスランド軍所属のレステンクール少佐なのだ。そして相手はアイスランド軍を束ねる総帥である。故に言葉遣いも変わる。

「ですが彼女達はいずれも専用機持ち、つまりVIPです。そう安々と招くことは……」

「なにを勘違いしている？」

私は一人の父親として、息子の友人を招こうとしているだけだが？」

「！」

つまりは、そういうことか。

専用機持ちとして六人を招こうと思えば色々と厄介なことになる。

しかし、あくまでもレナルド・レステンクールという同級生が、友人として家に招くのであれば、そう面倒な手続きも省略出来る。

相変わらず強かな男だ。

『詳しい事は添付しておいたファイルを見る。
また読了後、ファイルは削除するよう。以上だ』

プツン、と画面が消える。

添付されていたファイルを見ると成程、用意周到なことだ。
行きと帰りの飛行機から、食事やその他諸々、全部が用意済みで
ある。

「仕方ない。先ずは一夏に

」

だが本当に六人も来るのだろうか。

特にハルマキが来るとは到底思えないし、レナルド自身、ハルマ
キと一緒に（団体とはいえ）里帰りするなどお断りだ。

そして、もう一つ。

（ラウラ・ボーデヴィツヒ）

眼帯をした銀髪の少女。

付き合っている訳でも恋人でもない友達。

なのに合宿の時の事を思い出すと、不思議と胸が痛んだ。
彼女は、来るのだろうか。

FLIGHT 21 アイスランドより愛をこめて（後書き）

次回から夏休みを使って『アイスランド編』になります。

嗚呼、懐かしのアイスランド。

嘗てルルーシュが暴れまわったアイスランドです。

弱い人間は素直になれない。

素直、というのは何も抵抗せず受け入れるということだ。

人からの教えを受け取るという事だ。

とことん弱い……特に子供は人を信じられても不確定なものを信用できない。だから社会や法律を信用せず、受け入れられない。認められない。その不条理を信じられない。

ラウラは呆然と飛行機の窓から外を眺めていた。機内には他にも一夏、箒、セシリア、鈴、シャルロット、付添として千冬、そしてレナルドがいた。

ちなみに山田先生はお留守番だ。

機内はとてつもなく広い。

普通の旅客機だったら八十人分の席が用意できるスペースに、僅かな席しか用意されていない。

これがファーストクラスを超えたプライベートクラスか。余りこういった豪勢なことには免疫のないラウラには新鮮だ。

「ねえラウラ、この珈琲美味しいよ。飲まない？」

「ああ、すまない」

珈琲を口に含む。美味しい。流石はレナルドの搭乗する飛行機と
いうべきか。珈琲に関しては一級品だ。自動販売機の缶コーヒーと
は比べ物にならない美味しさである。

急なアイスランド行きが決定したのが二日前。

当初招かれた専用機持ち達は困惑したが結局、一夏の「海外旅行
なんて久しぶりだな」という一言によって全員の参加が決まった。
ついでに織斑先生も。

尤もラウラの場合は最後まで行くのを戸惑っていたが。

「一夏あ、そつちにある本とつてくれ」

「たつく、散らかすなよ……………はいよ。」

これだろ『ディオVSジヨルノ』究極の親子喧嘩』」

「サンキュー、試に買ってみたけど、さて内容は……………」

レナルドは一夏と和気藹藹と話してた。
当たり前か。

なにせ二人は数少ない男同士なのだ。ラウラだって周りが全員男
だらけで、一人だけ自分以外の女がいたら交友をもとうとする。

「うっ、DIEOのザ・ワールドがレクイエムによって時を止めたと
いう結果に辿り着けない！

やっぱり矢の力で先の力へ辿り着いたGERには勝てないのかッ！」

現在の自分の立場は箒やシャルロット達と非常に似ているが、違
う。

シャルロット達が焦がれている相手、つまり一夏には特定の女性
がない。というより、その鈍感さ故に恋人など出来たことすらな

いだろう。

だからこそ、セシリア、鈴、シャルロットの複雑な争いが展開されているのだ。

しかしレナルドは違うのだ。一夏とは決定的に。

そもそもレナルド・レステンスはそれなりに女性関係が豊富だ。これはシャルロットからの情報なので間違いない。なんでも男だった頃に本人から聞いたそうさ。

レナルドはアイスランド空軍のエースパイロットだったということもあつて女性にはモテたそうさ。それで何人か女性と付き合っていたとも。長続きはしなかったらしいが。

「ば、馬鹿な！ D I Oが矢の力でパワーアップだとオ！？」

ジオルノのレクイエムが無効化されるウ！

凄い！ これは分からなくなった……………」

そしてラウラは確かに見た。

あの合宿でI Sの第一人者であり発明者たる篠ノ乃東とレナルドが
キスしているところを。

暗くて表情などは見えなかったが間違いなくキスしていたと思う。
いや絶対にはしていた。

目を瞑れば、その時の光景がありありと思い出すことができる。

「ぬあ！ ジオルノだけじゃなくて……………ってポルポルが乱入した！？

三つ巴の決戦だ！ でもポルポル弱い！ 一瞬でバラバラにされたよ。 っつうお。 D I Oが気化冷凍法使った！ 第三部では影も形も出てこなかった便利能力を使った！ だけどレクイエムが無効化した……………と思つたら時が加速した！ やべえ、D I Oがプツチ神父を援軍に呼んだぞ！」

自分は………どうしたいのだろう？
ラウラ・ボーデヴィツヒは、たぶん、

(好きなのだろうか)

変な話であるが、束とレナルドがキスしている所を目撃して漸く気づいた。

自分の気持ちに。想いに。
皮肉なことだろう。

明確な恋敵が現れたお陰で自分の気持ちを知れるなんて。皮肉としか言いようがないではないか。しかも相手はあの篠ノ乃束ときた。ISを発表したことで、実質的に個人で世界を変革してしまった天才中の天才。いや天才中の天才すら超越してしまった常識の通用しない”魔人”である。

「うおおおおおおおおおっ!？」

まさかのカーズが宇宙から戻ってきた、だと！ しかも矢に貫かれてスタンド能力に目覚めた。

究極生物にスタンド能力ってどんなチートだよ。時間が暴発したア

ッ!

本当にレナルドと束は付き合っているのか？

そうでないにしても自分はどうすればいいのか？

ラウラには色々な事がこった返していて良くわからない。

「やべえカーズが無限ループに嵌った。レクイエムは鬼畜だな。しかしDIOとジオルノの共闘が見られるなんて夢みたいだ。まあそれだけカーズ様が危険だったということだけだ。

あ、DIOがループしてる筈のカーズ様殺した。流石は進化したザ・ワールド。まさか本当に世界を操るとは……。究極生物も世界その

FLIGHT22 ラウラの想い そして謎の激闘（後書き）

はい、そういう訳で今回は終始ラウラ視点。

今回主人公は出番なし。最初から最後まで本読んでましたw

怒りに対する最上の答えは沈黙。

沈黙は美德……という訳ではないが、それでも怒りに沈黙しそれを続けていれば、やがて怒りという業火は沈下する。

どのような大火事であろうと永久に燃え続ける訳ではない。その火炎が消えるときは必ず訪れるのだ。無論、人という生命の灯にも。

「漸く、ついたか」

アイスランドの空港に到着し迎えの車に揺られる事数時間。
レナルド達一向は広大な庭に聳え立つ屋敷に就いていた。

「……………レナルド、もしかしてお前って……………金持ち？」

一夏が恐る恐る尋ねた。

「まあ糞親父はあれで軍の総帥だからな」

嫌々レナルドが応えた。

はつきり言つてレナルドは実の父親である総帥と仲が悪い。例えば家を褒められても「お前は父親の庇護のもとで生きている」と突き

つけられるようで良い気分はしない。

第一自分は既に軍人として自律している。この家にも全く帰っていない。というより二度と踏み込むまいとすら思っていたのだ。それが、

(まさか、こんな形で帰ってくるとはな)

一夏含めた六人と付添兼お目付け役である千冬を連れてこいというのは、アイスランド軍総帥から直属の部下レナルド・レステンクールへ下された命令である。幾ら『福音事件』の時に仲間の援軍に行くために命令違反をしたといっても、数年間の軍隊生活で叩き込まれた事が消えるわけではない。ただ嫌いというだけで命令違反などする事は出来ない。

屋敷の前に車が止まる。

ぞろぞろと一同が下車した。レナルドもそれに続く。すると一人の男が立っていた。最後に会ったのは学年別トーナメントの時か。

「おかえり、レナルド」

「お久しぶりです、

レステンクール総帥」

「ほう」

敢えて階級付きで他人行儀に返答した。

馬鹿げているとは思うが、この家に帰ってきたのはレナルド・レステンクールではなく、アイスランド軍所属レステンクール少佐として命令に従ったから、ということを強調したかったのだ。

その意思表示に果たして総帥のほうは大して気にした様子もなく。

「さてミスタ・織斑、ミス・篠ノ之、ミス・オルコット、ミス・凰、ミス・デュノア、ミス・ボーデヴィツヒ。初めまして。そしてミス・織斑。貴女のご高名はかねがね。初代ブリュンヒルデとこうして出会えたことも、私の息子の担任が貴女であることも、私にとって望外の喜びです」

「こちらこそ。レオナルド・レステンクール総帥。貴方のような方に招かれたのは私としても光栄です。数日間の滞在となりますが、ご息を含めた生徒達には余り羽目を外しすぎないように指導しておりますので」

「ははっ、いいですよ羽目を外しても。学生の際は羽目の一つや二つ外すべきです。大人になってからでは、常に人目が付き纏って羽目を外すどころではありませんからね。貴女も、そして私も」

「」心中お察しします」

有名人同士で通じるものでもあったのだろうか。

レオナルド・レステンクールと織斑千冬は固く握手をした。

「さて何時までも立ち話もなんでしょう。どうぞ」

久方ぶりの実家へ足を踏み入れる。

「わぁ……」

最初にそう漏らしたのは誰だろうか。

だが成程。確かに屋敷内は整っており、豪邸といっても差し支えないだろう。

壁には家主の趣味なのか騎士甲冑や鎧、ついでに日本刀や剣まで飾ってあった。

「凄いわね、あんたの実家って」

「そうだな、あれでも軍総帥の住処だからな。この程度の邸宅は普通なんだろうよ」

「？ どうしたの、そんなにムシヤクシヤして」

「そ、そうか？」

鈴に言われて気づく。

どうやら態度に出ていたようだ。いけない、いけない。ここには”命令”だから仕方なく帰ってきているのだ。表情に出す訳にもい

かない。
第一これはレナルド個人の事情であつて一夏達は関係ないのだ。
レナルド自身、出来ればよい思い出を作って帰って欲しい。ハルマキを除いて。

(どうせ一夏目当てで付いてきたんだろうが、くっくっくっハルマキ。覚悟しておけ。

我が家の食卓に”紅茶”の二文字はないッ！ 何故なら非常に腹立たしくはあるが養親父も大の珈琲党だからだ。それでもお前が紅茶を欲するというのであれば、珈琲を抱いて溺死しろ！)

「おいレステンクール。何をぼさっとしている」

「はっ！？ す、すみません」

いけない。どうやら少しだけトリップしていたようだ。
一応は実家だというのに情けない。

「ああ、そうだ」

レオナルド・レステンクールが振り返り皆に言う。

「夕食までまだ時間があります。

どうだろう？ ここを少し行った所でショッピングでもして来ては
どうか。

友人や家族への御土産なども必要だろう」

穏やかな笑みを絶やさずにそんな事を言った。
皆に断る理由は見当たらなかった。

「一夏ッ！ あれ珍しいよ、アイスランド名物アースガルズ弁当だ
って」

「ひ、引っ張るなよシャル」

シャルロットが嘗てない強引さで一夏の手を引く。

「くおらぁ！ 待ちなさいよ」

「一夏！ こんな往来で手をつなぐのは、その、……………不埒だぞ

「！」

「一夏さん！ あんまり一人で歩くと襲われますわよ！」

そしてシャルロットの抜け駆けを許すまじとばかりに箒達が追ってくる。

あれから一夏達はレナルドの父の提案に従って、屋敷からやや離れた街に来ていた。首都一の大都会ほどではないにしても総帥のお膝元だけあって結構な規模の街。ちょっととした観光地も兼ねているらしくお土産には事欠かなくて済みそうだ。

「おいシャル。もうちょっと、ゆっくり歩こうぜ。」

レナルドとも合流しなくちゃいけな

「

「一夏、人の恋路を邪魔するのは馬に蹴られて死ねばいいと思うよ」

「そうだな。そんな奴は死ぬべきだ」

((((鏡見る))))

この瞬間、シャルロット含む四人の気持ちが一つになった。以心伝心というのはこのことか。まあ兎も角だ。

「じゃあ、あっちのお店行ってみようか」

「え、だからレナルドと合流する為にも……」

「行くよねッ！」

「……………おっ」

余談だがこの時のシャルロットの表情は、激怒した千冬姉にも劣らなかつたと後に一夏は述懐している。シャルロットはそのまま強引に一夏を引っ張りウィンドウショッピングに連れて行く。

そう、シャルロットの一番の目的は一夏とデートすることではない。ラウラとレナルドを自分たちから引き離すことだ。

だけどシャルロットが手を貸せるのはここまでだ。後はラウラとレナルドの気持ち次第だろう。

(ラウラ、頑張ってね)

シャルロットは自分のルームメイトであり友達でもある少女に、心の中で、されど力強いエールを送った。友達の想いが成就することを祈って。

FLIGHT 23

レステングール総帥（後書き）

次回はデートタイム。

甘酸っぱい青春……………だけで終わる筈もなく、親子対決も勃発し
そうですね。

FLIGHT 24 ソラを 目指して

噂をすれば影

日本の諺らしいが、これには自分も大きく頷ける。

噂をすれば影というが、自分の知るとある人物は噂をしなくても家に落下してくるような相手だ。

そういう意味でいうなら彼女は影ではない。影なら噂をしなければ現れないが、彼女は噂をしなくても勝手に表れてしまうのだから。厄介事を連れて。

アイスランドの街並み。

シャルロットが嘗てないほどの強引さを発揮したせいで、一夏は連れ去られ、それを追う為に篝達まで走り去ってしまった為、ぼつんとラウラとレナルドだけが残される。

「……………」

「……………」

気まずい。

合宿で束とのキスをラウラに目撃されてからというもの、どうにも話にくいのだ。

けどこうやって呆然と立ち竦んでいる訳にもいかない。タイム・イズ・マネー。時は金なり。時間の浪費は金の浪費より場合によっては性質が悪い。

「なんだ。なあ、あそこにアースガルズクリームってあるんだけど、食べるか？」

「そ、そうだな」

どうにか話を切り出す。

小走りで屋台へと行って二人分のアイスを買う。

「ほら……」

「すまない、代金は……」

「そのくらい奢るぞ」

「いいのか？」

「俺の財布事情を気にしてるなら問題ない。

こう見えても一応アイスランドの代表候補性って肩書きだし、それにパイロットだから結構金銭的には余裕があるんだ」

「では、頂こう」

どんな素材を使ったのか黒色と赤色に染まったソフトクリームの一つをラウラに手渡す。

ちなみにレナルド自身、これを食べたことはなかった。美味いとは聞いているが、どうにも色がアレ過ぎて抵抗感があったのだ。

(覚悟を決めるか……………神よ！)

先ずは一口目。先っぽの所を食べた。

口の中で広がる甘い味。これは以外にも、

「美味しい」

ラウラが言った。

けどレナルドも同意見だ。

見た目の不気味さとは違って味は一級品である。

「なあ、これどんな素材を使っているんだ？」

試に店員に聞いてみる。

「禁則事項です」

まあそうだろう。

秘伝の味は秘伝だからこそ意味があるのだ。

大衆に伝われば秘伝とはいえない。

しかし立ち食いというのも疲れる。

確かこの辺には……………。

「あそこに座ろうぜ」

「分かった」

ラウラと二人、アイスクリーム屋の近くにある公園のベンチに腰

を下ろす。

つい数年前は戦争で荒れていたこの街も今ではこの通り。

この復興の異常な速さにレナルドは祖国の底力に舌を巻く。ただ一つ、復興に自分の実父が関わっているというのが複雑であったが。

「実はな」

ラウラが口を開いた。

「聞きたいことがあるんだ」

ベンチに座り一呼吸着いたラウラは意を決して尋ねた。

「聞きたいこと……………俺に応えられる範囲なら」

了承の意。

正直シャルロットがここまで強引に場を作ってくれたことは驚いたが、それでも感謝しなければならぬ。これを確認しなければ自分は今へ進めないだろうから。

「レナルド、……………お前は、」

いやまて。

別にここで言う必要はないのではないか？

今の今までそれなりに友好的な関係は続いていたのだ。だったら、このままでも……………。

（ええい、何を戸惑っているラウラ・ボーデヴィツヒ！

敵前逃亡は重罪だぞ！)

咄嗟に自分を叱咤する。

この土壇場になって臆するなどあつてはならぬことだ。

何時から自分はこんなに意気地なしになった。ただISや兵士としての強さだけではない。もっと精神的な意味での強さでも、あの人に憧れていたのではないか。

ならばこんな事に躊躇してはいけない。兵士としても軍人としても隊長としても、そして一人の女としても。故に。

「お前の嫁は……篠ノ乃博士なのか!？」

「よ、嫁え!？」

「部下に聞いた。

その……深いキスをしている者同士は嫁同士なのだ……」

「嫁同士つて。色々とツツコミ所はあるが、俺の日本語の知識が正しいならば、それ嫁じゃなくて夫じゃないのか？」

「日本では気に入った相手の事を嫁という、そう私の部下が言っていた」

「そうなのか………日本で暮らしてたのはそこそこ長いが、そんな文化があったというのは初めて知ったぞ」

「まあそれはいい。けど………それでお前と篠ノ乃博士は」

あの時確かにラウラを見た。

海岸で二人がキスをしているのを。

しかも 　　　　　 自分の目が正しければ 　　　　　 あれはデーパーキ
スというものだ。

「嫁じゃないよ」

「!!!?????」

「ついでに言えば付き合っている訳でも恋人同士でも、ましてや将来を誓い合った訳でもない」

「けど、確かにキスをしていただろう?」

「それは、そうだな。」

実際あの人のほうが突然してきたとはいえ、避けようと思えば避けられた。

そうしなかったのは、多少なりともあの人に好意を持っているからかもしれない」

「かもしれない?」

曖昧な表現に首をかしげる。

「ああ。俺と一夏が昔馴染みなのは知ってるだろう?」

だからその一夏の幼馴染である筈の姉である束さんとは、それなりに親交があったんだよ。何回か壊れたラジコンを直してもらったり、面白いゲームをくれたりしたから。

今はISとかあのテンションもあって苦手だけど、やっぱり嫌いじゃない。そもそも本当に嫌いだったら幾ら話しかけられようと無視し続けてる。

だからきつと、心の奥底では好きなんだろうな」

一人納得したように頷く。

しかしラウラとしては、レナルドが他の女性を好きというのは余り聞いて嬉しい事じゃない。というより内心では嫌だ。

「そうか。じゃあ、やっぱりお前は……………あの人と、付き合うのか？」

「どうだろうな」

溜息をつきつつレナルドは応えた。

「今まで何人かと付き合ったことはあるけど、あんまり長くは続かなかったんだよ。

最長で七か月。最低で二週間。部下からは恋愛ごっこを楽しんでいるくらいにしか思われてないけど、結構本気だったのもあったんだ。けど、やっぱりダメなんだよなあ」

「何故？」

「俺がずっと別の女に惚れていたからさ。

昔っからソラっていう最高の美女に片思いしてたからな。

二股なんてそう上手くいく筈ないわな、そりゃ」

あっけからんと笑う。

その瞳は真っ直ぐ大空を見つめている。いやもっと遠く。地球という重力の牢獄から解放された場所にある無限のソラを。

(そうか、こんなに簡単な事だったんだな)

なんてことはない。

ラウラ・ボーデヴィツヒは、子供のように真っ直ぐ一つの夢を追いかけているレナルド・レステンクールを好きになったんだ。

「レナルド」

「おお？」

「もしお前がソラへ行くというのならば

」

レステンクール邸での夕食は、かなり上等なものだった。

流石は軍総帥お抱えのシェフの料理。そこいらの高級料理店よりも美味しい。

そして一度自分の部屋に戻ろう、という時に実父であるレステンクール総帥、いやレオレナルド・レステンクールに呼び止められた。

「レナルド」

「なんだよ？」

夕食後だからか、それともラウラとのあれこれがあった後だからだろうか。

やや適当にその声に応じた。

「一休みしたら、そのエレベーターで地下に来てくれ。

無論、ミス・織斑やお前の同級生の皆も一緒にだ」

「地下？ いつそんなものを……」

「私が総帥になって直ぐだよ。尤もその頃にはお前も軍の宿舎に入っていたが」

「……………それで、何をするんだ？」

「模擬戦だよ。私とお前の。」

「ISはしっかりと持って来い。お前のホワイト・スコピオンを」

自分の父であるレオナルド・レステンクール総帥はそんな訳のわからない事を言った。

ISの男性操縦者はこの世界に二人だけであるのにも関わらず。

FLIGHT 24 ソラを 目指して (後書き)

そんなこんなで次回は親子対決。

しかしレナルドは結構長い間日本に住んでいた事もあって書きやすいです。前作の生粋貴族でブリタニア人のレナードとは大違いです。レナードと違ってレナルドは日本語も喋れますし。

P.S.

WIKIPEDIAで「レオナルド」と検索すると……………。
後は「<http://ncode.syosetu.com/n1537t/>」

だけど は厨二病前回なので見るには注意が必要です。けど期待されていた方も多かったので一話だけ。

瓢箪から駒が出る

全く予定外のこと起きる、というのは珍しい。

非常識な人間に囲まれて育ったレナルド・レステンクールは、日常が既に常識外であった為、大抵の物事は予定内なのだ。

しかしそれでも、周囲の非常識な人間たちは容易くレナルド・レステンクールの予定を侵害してくる。

模擬戦。

未だに実感が湧かない。いや信じられない。

レナルドには実父であるレオナルド・レステンクールが読み切れなかった。

ただの模擬戦だというのならば分かる。

しかし父は「ホワイト・スコピオン」を持って来いと言ったのだ。模擬戦に不必要なものを持ってこさせる理由はない。

となると模擬戦でISを使う事は確定していると察することが出来る。

(だけど……)

一体全体どうしてISが必要なのか。

その一点だけが理解不能。

父の口ぶりからして模擬戦の相手は父自身。そして世界に男性のIS操縦者は自分を含め二人。父にISが操縦できる筈がないのだ。そうやって悶々と考えている間に地下室に到着する。地下室というと弊害があるかもしれない。

例えるならば地下闘技場。本当に何時の間に作ったのやらIS学園のアリーナと同等程度の広さがある。ここならばISで模擬戦しても何ら問題ないだろう。

そして一夏達ゲストは透明のシールドで防護された観客席にいる。生徒は全員どことなく首をかしげているが、ただ一人織斑千冬のみは鋭い眼光で地下闘技場を睨んでいる。

一流のIS操縦者としての直感が警告しているのかもしれない。これから出てくる常識外に。

「待ったか」

果たしてその男はやってきた。

レオナルド・レステンクール・自身の実父にして事実上このアイスランドという国を動かしている人間。ただ来たのは一人ではなかった。隣に自分とそう年の変わらないであろう少女を連れている。

「紹介しよう」

「アンネ・アウアー中尉であります！ レステンクール少佐！」

ピシッと少女は敬礼する。

黒髪に翠色の瞳の西洋人だ。背は低い。見立てではラウラとほぼ同じくらいか。

「……………総帥、俺の相手は彼女なんですか？」

「何を言っている。さっき言っただろうに。
この私と模擬戦あと。さて定位置につけ。時間は無限ではないのだから」

「しかし、」

「諄いぞ」

「……………了解」

仕方なしに定位置につく。

対するレオナルドは向かい側の定位置に。アンネ・アウアーと名乗った少女も同様だ。

「ISを起動しろ」

「

」

いい加減に口答えしても無駄だと悟った。

レナルドは自分の白蠍を展開。一瞬の光がやむとISを纏った自身の姿があった。

「それでは、俺のISを展開するのでしょうか」

「……………!!!!???」「……………」

レオナルドがその一言を言った瞬間。

レナルドだけじゃない。場にいるすべての空気が停止した。

「馬鹿な！ ISは男には起動出来ない！
俺と一夏が唯二人だけの例外だ！」

そつだ。それこそISという兵器における絶対にして致命的な欠陥。

ISは男性には起動できない。その原則があるからこそ世界は女尊男卑の社会へなったというのに。

「まさか、アンタもISを起動出来るとでも……………」

有り得ない話ではないかもしれない。

二人しかいないIS操縦者の片割れたる一夏は世界最強のIS操縦者たる織斑千冬の弟だ。もしISの素養に血の遺伝が関わっているのならば、或いは自分の父親であるレオナルド・レステンクールにもISを起動させることが可能なかもしれない。しかし、それを否と、レオナルドは否定した。

「それはない。

私も多少の興味があつて試にISに触れてみたが、ウンともスンとも言わなかった。

どうやら私に似て女好きらしい」

「なら、どうやって……………。まさか男でも操縦できるISを作り上げたつていうのか！？」

「それもない。いや無論そちらの研究もさせてはいたが、ISのコアは完全にブラックボックスになっていて、とてもでないが解析など不可能だ。

第一もしもそんな事が可能ならばとつくに他国がやっているぞ」

「なら、どうやって戦うっていうんだよ」

そうだな、とレオナルドは頷く。

しかし悲嘆した様子はない。むしろ悪戯に成功した子供のような無邪気な笑みを浮かべている。

「確かに起動は出来ない。だが、操縦できないと言った覚えはないぞ」

「はっ？」

何を言っている、そう呟きかけて気づく。

レオナルドの傍らにいる少女が握っている宝石。あれは待機状態のIS。

「まさかっ！」

荒唐無稽な、しかし理にかなった解答を察し驚愕する。

その考えが正しいのか否か。問うまでもない。レオナルド・レステンクルの表情がただ一つの答えを告げていた。

アンネ・アウアーという少女が一言呟くと、二人の体は眩い光に覆われた。

「起動させるのはあくまでも女。

しかし戦車然り戦闘機然り。別に兵器とは一人でしか搭乗出来ない訳ではない。

だからこそその役割分担！

起動を全て同乗者に担当させオペレーターは操縦に専念するッ！

操縦している間は、同乗者を完全な睡眠状態に入らせることにより、二つの意思の混在により操縦の際に起こる可能性のある混乱を防ぐ」

光が止むと、そこに”一つ”の人影があった。

黒一色の胴体。晒された頭部。間違いなくISだ。

「これが多重運用^{デュアル・コントロール}。」

そして世界初の多重運用型IS、プロト・メイガスだ！」

それは一つの革命だった。

確かに男性一人ではISを起動させる事は出来ない。

けれど、これは紛れもない希望。自分や一夏のような特例ではなく、どんな男性でも操縦可能なインフィニット・ストラトス。それは世界各国が競って開発しようとして、遂には断念せざるをえなかった夢。それが未完成な部分を残しているとはいえ、確固たる存在としてそこにあるのだ。

「ISの登場から世界は緩やかに女尊男卑社会へと向かっていった。それ自体を何もかも否定する訳ではない。俺は平等主義者ではなく寧ろ差別主義者。弱者が強者の食い物にされること大いに結構。しかし今の差別はそうじゃあない。例えば実力があつたとしても、男だからという理由で軽視する。愚かなものだ。世界の女性は女性でありながら、実力を正当に評価しないという愚を犯そうとしているのだからな」

今よりもずっと昔。

当時は男尊女卑が当たり前だった。女性は妊娠すると退職を余儀なくされ、どんなに革新的なアイデアを出しても女性だからという理由で却下される。しかしその下らない男女差別はなくなった。男女問わず個人の実力が正当に評価される時代が訪れたのだ。

だが今の時代それは失われつつある。昔とは逆に女性が男性を軽視して、再び個人の實力を評価しない時代が来たのだ。だからこそ、この男は反逆する。国家に対してではない。世界の意思そのものに

「私は次回のモンド・グロツソに出場し、新たにブリュンヒルデの称号を掴み取る。

そして世界の目を覚ましてやるのさ。侮蔑されるべきは弱者、性別ではないと。

これが俺の出した、女尊男卑社会に対するたった一つの絶対的な弱^し肉強食だ^{んじつ}」

レナルド・レステンクルはこの男の事を見誤っていた。

幾ら父であろうとこの女尊男卑社会の波には勝てない、そう漠然と考えていた。

けど違う。この男はそんなに生易しい器ではない。

この男の實力は、そんな社会という牢獄に縛った所で抑えられるものではなかった。

「さて模擬戦を始めようか。

構えろ、レナルド」

「！」

「そう緊張するな。

実をいうとこのプロト・メイガス。未だにライフルの一つどころか武装の一切を搭載しておらず、ついでにPバッシュIEフ・イナCーシャルすらないという出来立てホヤホヤだ。

噛み砕いて言うと、単なるパワードスーツのようなものでしかない」

それならば、どうにかなるかもしれない。

ホワイト・スコピオンは何でも紅椿と同じく第四世代型らしい。基本スペックだって第二世代型よりかは上だ。このアリーナでは変形するのは不可能そうであるが、これでも『福音事件』などを通して、ISという兵器にも多少は慣れてきた。

相手がどんな分野でも一度も勝てたことのない相手でも、今度はかりは。

「まあ尤も、それも関係ないかもしれないな」

瞬間、レオナルド・レステンクールが消えた。

「遅い」

「なっ!？」

気づけば目の前にプロト・メイガスがあった。

一体全体何が起こった。このISは何の武装も搭載されていないのではなかったのか。

「なに武装は何一つ使ってない。無論、単一仕様能力も。

これは東洋でいうところの縮地とかいうものだ。どうだ、中々に速いだろう?」

レオナルドがその右腕を構える。

不味いと思って防御しようとするが、

「力を抜け。さもないと痛いぞ」

腹にプロト・メイガスのパンチが突き刺さる。

途方もない衝撃が腹を襲い、吹っ飛ばされた。

「が、は

」

動けない。

シールドエネルギーはまだ全然余裕があるというのに、体が動いてくれない。

「どうなって……ただのパンチで、操縦者にダメージを……」

「なに、ただ衝撃の一部を防御を貫通させて、中身の操縦者にぶつけただけだ。

当然全部ではない。ISのパンチの衝撃を全部通せば、今頃お前の内臓は木端微塵だ」

「じ、の

」

化け物が。

そう言う前に、レナルドの意識は闇に沈んでいった。完敗という二文字と共に。

目が覚めると自室のベッドの上だった。

どつやら模擬戦で気絶してから運ばれたらしい。

「お、起きてしまったか」

「ラウラ」

ゆっくりと体を起こす。

ラウラの手にはタオル。どうやら今の今まで看病してくれていたらしい。

「みんなは？」

「ついさっきまでいたのだが、もう遅いという事で教官が寝るよつにと。」

私だけがここに」

「そうか」

時刻は既に一時。

これが合宿や修学旅行だったならとつくの昔に就寝している時間だ。

「そうか、負けたのか……」

再びその事実が押し掛かってくる。

今度こそは一泡吹かせると思っていたのに、今回もあっさりと完敗。

流石に凹む。生まれてから今まで父に何かで勝利したことは一度としてないのだ。

「っていつか、ありがとな。看病してくれていたんだろ？」

「別に大したことじゃない。

私がやりたくてやっただけだ」

しかし何の因果だろうか。

こうしてIS学園の皆と決別した筈のこの家にくるなんて。

父は、レオナルド・レステンクールは世間一般の基準に照らし合わせるに最低の父親だった。

実をいうとレナルド・レステンクールに母親はいない。だがそれは幼いころに母親が死んだというだけではなく、元々レオナルドは未婚なのだ。

自分が生まれる前も好色だったレオナルドは避妊処置こそしていたものの複数の女性と関係を持っており、それがどこかで間違っただけで出来てしまった子供というのがレナルドだ。なぜ自分を生んだ女性が自分という子宝を宿してくれたのか、なぜおろさなかったのかは知らない。ただ分かるのはレオナルドのほうにその女性と結婚する意志はなく、かなりの額の手切れ金を用意していた段階でその女性が自分を生んでしまったということだ。出産後に死亡というおまけつきで。

なんでも、その女性は天涯孤独の身だったらしく、何を思っただか父レオナルドは孤児院や里親に出すのでもなく自分自身の手で育てた。理由は聞かされていない、というよりは聞いても答えてはくれなかった。ただ薄気味悪く笑って誤魔化すだけだ。

だがそんな事があってからも父の好色は治らなかった。全く老けないその美貌を良いことに、当時まだ幼い自分がいるにも関わらず愛人（未婚なので正確には違うが）を連れ込むなんてしょっちゅうだった。それに反発して何度も喧嘩して、最終的には父方の親戚がいる日本に行ったりもした。

そして空軍に入り、それなりにモテるようになってから何人か女性と付き合った事もあるが、やはり上手くいかなかった。どうしようもなく自分がソラばかり考えていたというのもあるが、もしかしたら遺伝なのかもしれない。父のように二股や四十九股こそしなかったが、他人から見たら女をとっかえひっかえしているように思われただろう。

だけど……………。

そんなのはもう御免だった。

そつだ。気が付けばそこにあつたのだ。

「ラウラ」

「なに、んっ

?!?!?」

その唇を自分の唇で塞ぐ。

熱く情熱的に。互いが熱で蕩けるまで。その唇を吸う。

目の前にラウラの顔があつた。最初は驚いていたラウラだが、やがて全てを受け入れるかのように目を瞑る。手に伝わるラウラの温もり。

この温もりを失いたくないと思う。

もしお前がソラへ行くというのならば

強く、強く握りしめる。

狂おしいほどに、抱いた女が愛おしい。

私も一緒についていく。どこまでも一緒に。お前は私の嫁なのだからな。

だからこれは契約。

レナルド・レステンクールからラウラ・ボーデヴィツヒへの。

切つても切れぬ、永久まで続く絶対遵守の契約だ。

FLIGHT 25 弱肉強食（後書き）

なんていうか……… 主人公誰だよ、な回でした。

さて何だか意味深なセリフを言いまくったレナルドパパですが別に第一線で活躍させる訳ではありません。

謂わばるる剣における比古清十郎のような立ち位置ですね。

利によりて行えば、怨み多し。

しかし人は生きているのならば、必ず利によって行動することが求められる。

企業家ならば会社の利益の為に。軍人ならば祖国の利益の為に。

利というのは人を動かす最大の要因の一つであり、切っても切り離せぬものなのだ。

作戦は完璧といって良いほど恙無く成功した。

深夜のレステンケール邸に忍び込んだ男は地下の秘密格納庫から首尾よく待機状態の『プロト・メイガス』を盗み出すとそのまま一階へと戻る。

男の隣にはもう一人仲間がいる。彼女の名は『アンネ・アウアー』レオナルド・レステンケールもまさか彼女が獅子身中の虫とは気づかなかつたらしい。

その男とアンネ・アウアーは嘗ては東軍のエースパイロットであった。東軍、つまり戦争で負け全てを奪われた者の側である。

あの戦争で全民衆の平等を望む共産主義の旗は完膚無きにまでに踏みつぶされたが、それでも希望を失わなかった一部の者達はこうして反体制主義者

早い話がテロリストとして暗躍して

いるのだ。

実の所アンネ・アウアーがレオナルド・レステンクールによる極秘プロジェクトに関わることになるとは予想外だった。

アンネはあくまでもスパイ。IS適性検査を受けたのも出来る限り軍の中枢に近付いて情報や内部工作をする為だったのである。

しかし神の悪戯かアンネには素質があった。そのお陰でアイスランドが抱える、もしかしたら世界を変革してしまうかもしれない実験機を強奪することも出来たのだ。

勿論、あの計算高いレステンクール総帥の邸宅から実験機を盗み出すなんていうのは、幾ら元軍人達で構成されたテロリストとはいえ至難の業だ。

だがそんな彼等に手を差し伸べたのが『亡国企業』と名乗る一団であった。胡散臭い相手だったが、資金力と情報力に悩んでいた反体制主義者達には『亡国企業』の援助は渡りに船だった。

そして二人が再び大地の上に、一階へと戻る。

後はこの近くにあるもう一つの基地から『ある物品』を盗み出したメンバーと合流するだけだ。

「何をしている？」

「ッ！！」

階段の上に人影があった。

輝く銀色のロングヘア。眼帯で覆われた片目のせいでミステリアスな雰囲気醸し出す少女。

二人は知っている。少女の名はラウラ・ボーデヴィツヒ。こんな可愛らしい外見をしているが、代表候補性の一人であり、軍人とし

て優秀な能力を持つ怪物である。

「ミス・ボーデヴィツヒ。どうしたのです、こんな夜遅くに？」

アンネ・アウアーがどうにか誤魔化そうとする。

「そ、それはちょっとな。そんな事より、そっちにいるのは？
私はこの屋敷で働く人間は一応頭に叩き込んでいるが、その男は見
たことがないぞ」

「！」

まったくもって、これだから優秀な人間と言うのは度し難い。
その賢さ故に自分から死地に飛び込んでくるのだから。

ラウラ・ボーデヴィツヒが優れた兵士であることは知っている。
生身では自分たち二人を同時に相手にしても容易く打倒してしまう
ということも。

なら簡単だ。

生身で戦わなければいい。自分たちの手には現代戦最強の武器で
あるISがあるのだから。

ラウラの視線がアンネ・アウアーに集中している間に男が剥離剤
を喰らわす。亡国企業から一つだけ渡されたISを装着解除させる
兵器である。

「起動しろ『プロト・メイガス』！」

「なっ、お前たち！」

ラウラ・ボーデヴィツヒがISを起動させようとするが無駄だ。
先程喰らわしたモノが効いているのだから。その間に男とアンネ・
アウアーはISを起動しようとする。

「させるか！」

だが自分たちは舐めていた。ラウラ・ボーデヴィツヒという少女
を。

ラウラはISが起動出来ないと知るや否やIS起動中のアンネを
弾き飛ばす。

「貴様

！」

「何を企んでいるかは知らないが、戦場では一瞬の油断が命取りだ。
覚えておけ」

ナイフを構えたラウラ・ボーデヴィツヒが自分に迫る。
だが、そこで驚くべき事が起きた。

「なっ！」

起動中だったのが原因なのかもしれない。
プロト・メイガスから溢れ出す光は男とそしてラウラを巻き込み、
そして立っていたのは一機のISだけだった。
そう。あるうことがプロト・メイガスはラウラを使って起動した
のである。

「なんてことだ……おい、アウアー！」

「……………」

反応がない。

どうやら気絶しているらしい。

「まあいい」

多少状況が変わったが寧ろ好都合だ。

実験機だけじゃなくドイツの第三世代と操縦者が手に入ったのだから。

屋敷から物音が聞こえてくる。

もしかしたら騒動を聞きつけた者がいるのかもしれない。

不味い。こんな場所で暴れるわけにはいかない。レステンクール総帥は首都レイキャビクに行っており留守だが、今この屋敷には専用機持ちが後六人もいるのだ。余りにも分が悪すぎる。

男はアンネ・アウアーを回収する事すら忘れて、屋敷から逃げ出した。

ラウラをIS内部に収めたままに、仲間との合流場所へ。

「なんですって!？」

首都レイキャビクの指令室に呼び出されたレナルドの第一声がそれだった。

他にも担任であり付添の千冬や一夏達の姿もある。

「あの、本当なんですか？」

ラウラが連れ去られたっていうのは?」

興奮したレナルドと違い、やや落ち着いた様子で一夏がレオナルドに問うた。

「そのようだな。」

私とした事が多少浮かれていたらしい。まさかアンネ・アウアーが反体制主義者のテロリストで、あまつさえ実験機が強奪されるとはな。

しかも原因は分からないがプロト・メイガスにはミス・ボーデヴィツヒが同乗しているときた」

「それで、追撃は？」

今度問いかけたのは千冬だ。

彼女には担任教師としてラウラの安全を守る義務がある。

その顔は『福音事件』の時と同じく責任感あるものとなっていた。

「勿論、事件の発覚を知るや否や首都レイキャビクに配備してあった二機のISを出撃させ、これの撃破にあたりました。ですが厄介なことに」

「総帥！ あれは我が軍の最重要機密では！？」

一人の側近らしい大男が焦って止めに入る。

階級を見ると大佐だ。

「大佐。これは既に我が国だけの問題ではない。連れ去られたのはIS学園の生徒であり、ドイツの代表候補性なんだ」

「……はっ。申し訳ありません」

「失敬。で、追撃の件だが………結果を言えば追撃部隊は全滅。命だけは助かったものの全員が作戦続行不可能の重傷だ」

「……………!!!」「……………」

一夏達は勿論の事アイスランド軍所属であるレナルドも、そして千冬ですら驚愕する。

首都に配備されているISとなれば性能は最低でも第二世代相当。それが純粋な性能面では第一世代にすら劣るISを全滅させた？

なんの冗談だ。これは。そんな事が出来るのは……………。

「残念だが外れだ。別に敵の操縦者が常識外の技量の持ち主という訳ではない。」

実はだ。強奪されたのはミス・ボー・デヴィツヒとプロト・メイガスだけじゃあない。

我が軍の発見したとある物品が共に盗まれていてね」

「ある、物品？」

「レステンクール少佐、いや他の皆さんも。」

ロストテクノロジーという言葉聞いた事は？」

「ええと、確か失われた技術のこと、でしたっけ」

この中で一番漫画などに詳しい一夏が応える。

レナルドは頷くと、

「間違っていない。失われた技術、伝統工芸などにも当て嵌まるが、今回ののは技術的なものでね。」

寧ろオーパーツのほうが近いかもしれない」

「だから、それが今回の事件がどういう関係が」

「発見されたのだよ、そのロストテクノロジーが。オーパーツが。このアイスランドの大地から」

「なっ！」

「それに使用されていた材質、燃料。そして開発用途や兵器としての方向性。」

その全てが現代の技術力ではありえないモノだった。その未知のモノを我々は便宜上ロストテクノロジーとして極秘裏に研究所に持ち込み解析させた」

「ええと、それって兵器なんですか？」

居てもたつてもいられないとばかりにシャルロットが尋ねた。
彼女はラウラとも特に仲が良かったので心配なのだろう。

「そうだ。それも面白い事に戦車や戦闘機といったものではなく……
……我々の認識するところでいうロボットのようなものだった」

「ろ、ロボットお？」

「事実だ。」

当初は未知の燃料が一体全体どのようなモノなのか解析不可能な事もあり、実際に兵器として運営・量産することは諦めていたのだが……それをプロト・メイガスの外装パーツにしようという動き

が生まれてね。面白い案だと思い、私もなんとなく許可を出したのだが」

「成功したのですか？」

「それは今回の事が証明しているだろう。」

私も最初は半信半疑だったよ。なにせそのロボットは発見された当初から腕がなかったりと損傷が激しくてね。ISの外装として改造するどころか、再び動くのかどうかすら疑問に思っていたのだから」

押し黙る。

嘘を言っている様子はないし言う理由もない。

追い打ちとばかり追撃部隊が敗れた際の映像を見せられた。

成程、確かにレオナルドの言う通りその兵器はロボットというのが正しいかもしれない。

これで中にプロト・メイガスが入っているというのだから驚きだ。

「まあこれの搭乗者を除いたメンバーは全員捕まえたのだが………
…厄介なのはプロト・メイガスのほうでね。あれは今アイスランド上空、いや、大気圏外にいる」

「そんな大気圏外に出たっていうんですか!？」

ISは昔は宇宙用のものだったが、兵器としての運用が実用化してから宇宙進出のほうは二の次になっていた筈だ。

「そうだ。その後詳細不明だが『プロト・メイガス』はそこで停止。何をしてもなく停止している」

「追いましょー! 今すぐに!」

「フム。しかしその機体は果たして大気圏外で

『全然ノープロブレムだよ〜!』

「!」

驚いてモニターを見る。

するとそこには、いつもこういったタイミングに現れるウサミミの顔が映し出されていた。

「これは篠ノ乃博士。ノープロブレムとは？」

だが流石の総帥というべきか。

レオナルド・レステンクールは見た目上は平然と問い返した。

『そんなの簡単だよ。ホワイト・スコピオンは大気圏外での運用を第一に設計したISだもん！ 宇宙の果てだろうと海中だろうと全力全開で使えちゃうよ!』

男は宇宙空間で一人佇む。

亡国企業からこの宙域で待機するように言われたが、未だに連絡がない。

仕方ないので、これの内部をあれこれと見てみる。操作はしない。もし間違っただけから放り出されたら大事だ。アイスランドの大地から発見されたコレは、アイスランドの技術が総力を挙げてても詳細

が分からないほどのオーパーツなのだから。

「ん、なんだこれ」

そんなおり男は見た。

このロストテクノロジー、常識外の技術で作られた兵器の中にある常識的な文字列を。

アルファベットの文字列は恐らく名前だろう。多少煤けているが読めないことはない。

『Sir Leonardo Enneagram』

嘗てこの機体。

とある世界において『カスタム・グロースター?』と名付けられた機体のパイロットの名だった。

恋なき人生は死するに等しい。

では恋多し男は誰よりも生きているのだろうか。

恋をしない男は、死んでいるのだろうか。

恋に気付かない男は、生きている事に気づかないのだろうか。

世の中と言うのは、こつも無情だ。

アイスランド首都レイキャビクの基地。

今、一機の戦闘機 否、一機のISが飛び立とうとしている。

レナルド・レステンクール。アイスランド軍に所属する少佐にして唯一の男性のIS操縦者。

「これが……？」

「そう。東さん自慢のホワイト・スコピオンの隠し機能」

アイスランドで強奪されたオーパーツ、そして実験機『プロト・メイガス』は宇宙に上がっており通常の兵器では手出しができない。

だが白蠍は違った。

篠ノ乃東曰く、このISは元々そういう用途で開発したらしい。

「ところで何で『プロト・メイガス』は宇宙で停止してるか分かりますか？」

レナルドにはそれが解せない。

プロト・メイガスを強奪した理由は分かる。

不完全とはいえ、世界初のどんな男でも操縦可能なISだ。

盗む理由など、それこそ星の数ほど思い浮かぶ。

だが実験機にしる何にしる、盗み出してから一旦逃げてから宇宙に留まる理由が分からない。

これを単純な事件に例えるならば、銀行強盗を働いた犯人が警察の手の届きにくい安全地帯だからといって、その存在を誇示し続けるようなものだ。

「うーん、それは天才の束さんにも分からないかなあ」

「……………」

どうにも掴みにくい。

大体アイスランド軍の関係者でもないのに、こうやって堂々と基地に入っているのはどういうことなのだろう。

やはり実の父であるレオナルドと良からぬ取引でもしたのか。

IS学園入学の時も少なからず接触があつたのは間違いないだろうし、もしかしたら多かれ少なかれ交友があるのかもしれない。

束の性格からして、それが健全で友好的ものとは考え難いが。

(だけど、ソラか)

不思議な気分だ。

まさかこんな奇妙な形で夢が実現するとは。

(千冬さんには止められたけどな)

レナルドは元々アイスランド軍に所属していたが、今ではIS学園の一生徒という扱いである。

確かに軍籍は残っているし階級もあるが、それでもIS学園の生徒である以上、レオナルドからの要請を断ろうと思えば突っぱねる事が出来た。

けど、やはりレナルドとてIS学園の生徒であると同時に軍人。

愛国心というのも人並みに持ち合わせているし、プロト・メイガスが今後のアイスランドに必要なものだというのは分かる。

(まあ、本当はラウラを助けたかっただけ。いや、他にもソラに行くチャンスだったからか……。

まったく、自分でも呆れるほど我が侷な男だよ、俺も)

助けに行きたかった。

ソラに行きたかった。

理屈ではない。

様々な感情がグルグルと回っている。

もう何が何なのか分からない。

だけど心の底から湧き上がる爆弾のようなエネルギーが、レナルド・レステンクールという男を突き動かしている。

準備が完了したホワイト・スコープオンに搭乗する。

そして束の顔を真っ直ぐに見た。彼女にも伝えなければならぬだろう。

自身の想いを。行動の結果を。

「東さん、ちょっとだけいいですか？」

レオナルド・レステンクルのいる司令室からその様子はよく見えた。

白蠍と名付けられていながら漆黒の胴体を与えられた機体。

自分の息子が操り、そして今まさに無限に広がるソラへ飛び立つとする機影。

彼が息子を施設や養子に出さず、自分の息子にしたのは一つの賭けだった。

この禄でもない、多くの真に愛した女性を不幸にしてきた男の遺伝子を継いだ男は、果たして愛した女を幸福にできるのか。

それが知りたかった。

だから今日は待ちわびた日。

もしレナルドが帰還した時に一人だったのならば、賭けは己の負けだ。その後は総帥の座を降りようかと思う。今まで請われてこの地位についていたが、もう十分義理は果たしただろう。この国に返すべき恩義はもうない。40代で退職というのも珍しいが、蓄えは十分すぎるほどあるので問題ない。その後の人生はIS操縦者と息子であるレナルドの教育にも費やすつもりだ。

だがもしレナルドが白蠍の背に愛した女を連れていたのならば、賭けは己の勝ちだ。そしてレナルドは自分を超える。能力的な意味ではなく、一人の人間として。

愛した女を不幸に落としたものと、幸福にしたもの。

軍人としてではなく、人間としてどちらが優れているかなど語るまでもない。

その後は自分は軍人として生きる。人間としての人生で上回れたとしても、軍人としては最上の存在で居続けよう。

そして白蠍が黒でありながら白と名付けられた理由が分かった。ぐんぐんと真っ直ぐソラへ向かって飛翔するホワイト・スコープオン。その大気圏外へ飛び立つための機能を発動させたホワイト・スコープオンは全身から白い光を放っていた。

「中々、凝った演出だな」

それが白蠍と名付けられた所以。

ISとして戦う事などホワイト・スコープオンの本領ではなかった。

戦闘機形態への変身やタフネスさもついでに過ぎない。

ホワイト・スコープオンは最初からソラに飛び立つ為だけのISだったのだと、レオナルドは知る。

本当はこのまま珈琲でも飲みながら感傷に浸りたいところだが、生憎とレオナルドは軍人だった。もし賭けに負けて軍を去るにしても今は軍人だった。

だから直ぐに思考を切り替える。

予想だともう暫くか。

「総帥、IS学園のミス・織斑から通信が入っております」

「繋げ」

予想通りだ。

彼女ならこうすると思っていた。

『レステンクール総帥』

「これはミス・織斑。

申し訳ありません。このような事態に巻き込んでしまい。

ですがご安心を。ミス・ボーデヴィツヒは必ずや救出致します」

『それなのですが

』

織斑千冬の要請は単純だった。

ようするに、今回の追撃に一夏達を行かせてくれという事だった。

実のところ、本当はアイスランド軍から正式な要請をすることも出来たのだが、レオナルドはそれを敢えてせず、レナルドだけを向かわせたのだ。

理由は様々だが、一つはもしもISS学園の生徒に出撃を要求し、万が一戦死してしまえばその責任の一端をアイスランドが負う事になるからだ。

既にラウラが浚われている以上、ドイツからの非難は避けられないだろうが、これにフランス、中国、イギリスまで加わるとアイスランドは根本から揺るぎかねない。

それを避けるために、敢えてレナルドだけを行かせた。そうすれば一夏達ISS学園の生徒達が助けに行きたいと言い出すのは分かっていたから。

結果として一夏達が戦死しても非難は免れないだろうが、こちらから要請した場合よりかは被害は少なくて済む。

宇宙での戦闘は地上での戦いと異なる。

生命線であるISSが解除された後に待っているのは、宇宙という

生命の存在を許さない冷たいソラだ。危険度にしてSランク。敵はオーパーツで武装した未知の敵。かなりの難易度のミッションだ。プロであつても決死の覚悟で挑まなければならぬ戦場。

それがレナルドと、それに続こうとしている生徒達の向かう場所だ。

(まあ、恐らくは無問題だろうが)

それでもレオナルドは余裕。

というより一夏達の死は恐らくないだろう。

何故ならば一夏という少年の死を、誰よりも篠ノ乃東が許容しない。

レオナルドはレナルドや一夏などから、それとなく篠ノ乃東のことを聞きだし、ある程度の人物像を固めていた。

興味を持った一部の人間以外には驚くべきほど冷たい女性。

逆に興味を持った一部の人間には驚くべきほど興味を抱く女性。

それがレオナルドの見出した束像

もしかしたら今回の強奪事件にも一枚噛んでいるのではないかと、レオナルドは考えているほどだ。

彼女ほどの天才だ。

仮に一夏が宇宙空間に放り出されても、どうにかなるだろう。

実際そうだった。ホワイト・スコープピオン程ではないが、通常のISでもそれなりの時間安全に戦える追加装備を彼女は用意していたらしい。

それを使って、一夏達もソラに上がるという事も。

「ああ、そうか。これが目的か」

事ここに至り漸くレオナルドは気づいた。

何故プロト・メイガスが宇宙空間で停止しているのか。

何故亡国企業が反体制主義者を唆してプロト・メイガスを強奪させたかに。

ばかな、味わってはない快樂などあるものか！

世の中には誰にも理解されぬ物事に快樂を抱くモノがいる。

その者達は不幸だ。この世界で生きていく上でその快樂を抑えなければならぬのだから。

だが、レナルド・レステークールはそのような人間ではない。

普通の人間と同じように泣き、同じように笑う事が出来る。

ならばまだ間に合う。彼はまだ完璧ではないのだから。

「束。何をしている？」

千冬がアイスランドの基地内で、ただ静かに宇宙を眺めている束に声をかけた。

しかし相変わらずフリーダムな束である。

不法侵入や不法入国くらいの法律違反は束にとって違反の内に入らないのだろう。

「ううん、ちよおつと失恋しちゃったあ」

「は？」

初め千冬は昔馴染みの友人？ が何を言っているか理解出来なかった。

しかし束の瞳に溢れる透明な雫を見て、漸く何時もの突拍子のな

い冗談ではないことを悟る。

「ちいいいいいいいいいちゃあああああああああ
ん！」

「た、束！ 突然抱きつくな！」

「わああああああああああああああん！！！」

「おい待て！ アイスランド軍の軍人達が見ている！
泣くのはいいが、一端離れ
」

その後、哀れ千冬は十数分の間、束に胸を貸す事になる。
援軍として、一夏達がソラへ向かった五分後のことであった。

感じる、星の鼓動を。この大地の蒼さを。

レナルドの騎乗しているホワイト・スコーピオンはただ真っ直ぐ
に、一心不乱にソラを目指して、やがてそこに到達する。
重力という縛りのない、永遠に続く漆黒の海中。

「ここが、宇宙か……」

ほんの一瞬、ラウラとかプロト・メイガスだとかの事が頭から消
える。

ただ噛みしめた。今の感動を、漸く自分はこのに至ったのだと。
もし叶うのであれば祝砲でもあげたいところだった。

「つと。名残惜しいが、何時までも漂ってる訳にはいかないか」

レーダーでターゲットを探す。

流石は東印のIS。素晴らしい性能だ。

ホワイト・スコープイオンは宇宙でも問題なく全力を発揮できる。

(見つけた！)

ターゲットを発見。

全IS中でも恐らく最速であろうホワイト・スコープイオンのMAXスピードで接近していく。

見えてくる影。全長約4m強、漆黒と紅という白蠍と同じペインドの機体。

再び人型に変身しライフルを突きつける

「私はアイスランド軍少佐レナルド・レステンクールである！

テロリストに告ぐ！ 武器を捨て……じゃないな、この場合。

大人しく武装を手放しアイスランドに帰還しろ！ さもなければ、こちらは撃墜を辞さない！」

どうでるか。

レナルドは様子を伺う。

『黙れえ！ 西軍のイヌが！』

ノーモーションでアサルトライフルを連射してきた。

どうやら交渉の余地は皆無らしい。

「そっかい、なら……ん！」

強引にでも機能停止させて拿捕するだけだ。
戦闘機形態へとなり、アサルトライフルの弾丸を避けていく。
対するターゲットも巨体に見合わぬ高速で飛翔していった。

「たつく、なんだってんだ！」

オーパーツというのは半信半疑だったが、こうなると認めるしかない。いや正確には大部分はこの時代のものではない、か。

コアとなっているのはIS。つまりはこの時代の兵器だ。
なら恐れる理由なんて何も無い。

『戦闘機に変形とはまた変なものを！』

「変とは何だ！」

ハーケンのようなモノを飛ばしてくるターゲット。
この程度避けられない筈がない。だが、

『遅い』

避けた所にそれはやって来た。

ターゲットの機体が今正にホワイト・スコピオンに振り下ろそうとしてるのは、真紅に染まった刃。

(やられる……！)

『死ね』

爆発音。

ホワイト・スコープオンではない。
驚くべきことに、目の前のターゲットの腕がもげていた。
周りを飛んでいるのは蒼いビット。

「まったく、野蛮人は世話がやけますわね」

「たつく、一人で突っ走るなんて一夏みたいな事しないでよ」

「お前は……ハルマキツ！ それに酔豚！」

「ちょ、私はハルマキ固定ですよ！」

「酔豚って何よ！ 私には凰鈴音っていう名前があるのよ！」

援軍はそれだけじゃなかった。

下から正確なる射撃と飛ぶ斬撃がターゲットを襲う。

「シャルル！ それに箒まで！」

「僕は相変わらず男扱いなんだね……………」

「ふっ。どうやら普通の名で呼ばれているのは私だけのようだな」

箒が胸を張って言う。

一方シャルロットは多少ぐったりしていた。

『援軍なんぞでこの機体が……！』

「おいおい、俺を忘れんなよ」

かかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか
 かかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか
 かかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか
 かかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか
 かかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか
 かかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか
 かかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか
 かかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか

「！」

思わず後ずさる。

明らかに常軌を逸している。

まさか追いつめられて狂ったのか。いや、狂っただけにしては、この心臓を鷲掴みにされたような、この途方もない悪寒はなんだ。

『 k j j j かが j k が j k j じゃ j g f j じゃ j g 死か g ふ あん f かな
 あけん d k j d k さ j k f か ふ え ふ え h f w j かん f な f k ー うえ
 f かが j ふ あ馬 k ん ふ あん かが j 苦し k s f かん ふ あ k f かが 亜 k n
 g ふ あ k ふ あ k 呵 フ オ a j f 化 呵 f 化 j f 化 j 墓ん つか あ k j じゃ k
 j 化 j ? じゃ じゃ 化 j 呵 呵 k j j かが じゃ k j k ふ あ j かが j k g ふ あ
 k j かが j f かが j k が j かが j k g j k w s f j け w s h f j かが h じゃ
 f なが k ー な k ー ふ あ k j f かが ー j f かが j かが j g かん k が k d
 j j k d s k f は j f j かが h ぎ お え つ い お え h g k n k せり お お い
 い お あ し え j な ふ お い あ j ふ お あ k j ふ い お あ k d j ん ふ え お え r
 h n g f かん g ふ え わ お f な j ふ え つ い h g ふ え い わ h ん ふ あ い h
 ん f g し え w n f かが j k n f かん g n f な え う ね k n f かが j の え ね
 w かん ふ あ h ふ あん k j ふ あ じ え b f g じゃ k f かが h f かが j g ふ あ
 k な n じ え w g じゃ k ん ご あ ね お ん かね い w に え わ ん じゃ k な お え
 お j かが お い げい お ね わ ん ふ あん f g かが え w かが ー お あ えん k ね
 か 』

その証拠に最高のタフさを持つホワイト・スコープイオンは無事だ。

「仕方ない。ハルマキ、酢豚、シャルル。

一夏と箒を連れて地球に戻っている」

「ここは宇宙だ。

このまま気絶させていて、ISが解除されたら……二人はアウトだ。

「だけどレナルドは！」

「テムエの女くらいテムエで守れないでどうする？
安心しろ。戻ってくるさ」

ホワイト・スコープイオンが戦闘機形態へ変身する
そして振り向きざまに、

「ありがとな、セシリアに鈴、シャルロット。

一夏と箒にも伝えておいてくれ」

最後に本名を言うと、レナルドは星の海へ消えていった。
ただ逃げ出したターゲットを追って。

幸いターゲットは呆気ないほど簡単に見つかった。

ターゲットはその姿形を大きく変化させている。

目につくのは真紅の翼。黒い胴体に真紅のフレーム部分。
なにより悪魔のようなその形相。

『初めまして、だな』

「ッ！」

思わず息をのんだ。

その機体から漏れた声は、今まで聞いた事のないものだった。

先程のIS操縦者でもないし、勿論ラウラでもない。彼女はまだプロト・メイガスの内部で眠っているのだろう。強制的に

「アンタは、一体

」

無性にこの声の主が気になった。

だから思い切って尋ねてみた。

その男の、真名を。

『レナード・エニアグラム。通りすがりの最強だよ、まあ再現されたデータだけだな』

そんな訳で本作主人公VS前作主人公（劣化版）とのバトルです。

ちなみに伏線は、シャル&一夏戦の時にラウラのVTシステムが未発動だったことですね。

そして束失恋。まあレナルドって優柔不断なタイプじゃないので、仕方ないと言えば仕方ないのですが。

自らに勝つことこそ、最も難しい勝利。

己の運命に勝利する、それは簡単に聞こえて、実は最も難しい事だ。悲恋という運命を刻まれた男がいる。その男は生涯愛した女を失い続けた。

反逆という運命を刻まれた男がいる。その男は生涯反逆し続け、この世全ての悪を担った。

平和という運命を刻まれた男がいる。その男は生ある限り世界平和を求め戦った。

どちらも才覚や能力においては最高峰であったが、結局は運命に抗えなかつたのである。

運命に抗う力は、能力や頭脳では得られない。否、卓越した頭脳や能力を持つからこそ運命からは逃れられない。だが、もし抗う事が出来る者がいるとすれば、それは世界の不条理や面倒なルールを無視できる最高峰の『馬鹿』なのではないだろうか。

レオナルド・レステンクールはアイスランドの基地で、自分の足元に倒れた一人の女を見下ろした。その女はアイスランドの軍人でなければ、国内の反体制主義者でもない。

彼女は亡国企業といわれる組織の一員。そしてその目的は、

「実に手の込んだことだ。

プロト・メイガスの強奪すら囿。本来の目的は私の命、か。やれやれ随分と亡国企業には嫌われたようだ。

さて、どう思いますかミス・織斑？」

レオナルドは隣にいた織斑千冬に声をかけた。

彼女はつい先程まで着込んでいたスーツ姿ではなく、ベオウルフというアイスランド軍の二世代型を纏っている。事前に自身の暗殺を察知したレオナルドの依頼を受けた為である。

「今はまだ、なんとも。

それより、宇宙に上がった生徒達は」

「無事ですよ。

どうやら敵ISの攻撃を加えられ、私の息子以外の生徒達は既に地球に降下しているようですがね」

「というと、レステンクールは！」

「ああ。単機で追っていったようだ」

「……………」

千冬が黙り込む。

本来ならレナルドに戻れと命令したい所であるが、今現在レナルドはIS学園の生徒ではなくアイスランド軍のパイロット・ナイト小隊長コールサイン『ナイト1』として動いている。

表立っては命令出来ないのだろう。

「なに心配することはないだろう。」

「信頼しているのですか、お子様の事を？」

「そんなんじゃない。ただ、昔を思い出してね」

「昔、とは？」

「こつ見えて俺はこんな立場になる前は戦争大好きな困った奴でね。よく部下の諫言やらを無視して、前線に出て行ったものだ。」

「だが残念なことに今の私の立場は総帥。おいそれと前線にも出れない」

「……………」

「そこはお前のソラだ。思いのままに飛ぶといい。責任は全て私がとろう。なあ、レナルド」

プロト・メイガスを纏った、その『男』には男なりの正義や理由があった。

一人の軍人として、東側の掲げた自由と平等の為に戦ってきたというのに、東軍は敗北し西軍による不平等が当たり前前の政権が始まってしまった。

弱者は虐げられ、社会主義者というだけで放逐され、男のような生粋の主義者には生きていく場所すらなかったのである。

だから反逆した。

彼の信念と正義に従い行動を起こした。

けれど、そんなモノはもうない。

男の人格という人格は、この世のどこにもない場所にある、死者が行くかもしれない所から流れてきた『とある人物』の情報が男の全てを破壊し尽くしてしまった。

そして男の全てを代償にして『とある人物』の3%がここに再現される。

機体はカスタム・グロースターから彼の最期の搭乗機であるマーリン・アンブロジーウスへ。無論、性能自体は本物に到底及ばないものの、そこに刻まれたデータとを合わせれば、実に凶悪な存在となっていた。

そんな『彼』のもとにそいつはやって来た。

彼は薄く笑う。再現されたデータといえど記憶はある。人格もある。

だからこそ、彼は冗談交じりに言う。

『レナード・エニアグラム。通りすがりの最強だよ、まあ再現されたデータだけだな』

レナルドは思わず声を失った。

この声はラウラのものでもなければ、さっきまで戦っていた男のものでもない。

ただレナルドの中にある全てが警告を告げていた。目の前の存在

の危険性を。

「レナード・エニアグラム……それに再現されたデータだって？」

『ああそうだ。 ヴァルキリ Valkyrie トレース Trace システム System について知ってるか。俺はそいつで再現された』

そのシステムは聞いた事がある。
確か過去のモンド・グロツソ出場選手の動きを再現するとかいうものだった筈だ。

「だが、どういうことだ？ 如何してそんなシステムが搭載されていたかは知らない。
ただどあのシステムは、動きを再現するだけであって、人格まではトレースしない筈だ」

『細かい事を気にするんだな、お前は』

「！」

咄嗟に避けた。

機体のすぐ横を通過していく赤黒い光。
もしも動いていなければ、やられていた。

『取り敢えず、だ。俺はお前の敵として再現された。
そして察するにこの機体の中にいる女を取り戻したい。
だったらお前の選択肢は一つだろう。
その愛を悲恋で終わらせたくなければ、さっさと俺を打倒することだ小僧』

何故か銃などの武装を全て捨てて、漆黒の魔人が迫る。
両手に握られているのは真つ赤な剣。

「武器を捨てた？」

『ハンデだ。精々一生で一番気張れよ。
さもないと、殺されるぞ』

レナードと名乗ったデータの言葉の一つ一つには、真に迫るものがあつた。

だから言葉通りに気張る。今の自分が出せる全力を超えた全力で。
必死に機体を動かす。

敵機の動きなどから判断するに、性能はこちらのほうが断然上。
けれど、恐るべきことに漆黒の魔人は、あらゆるフェイントにも
動じず、あらゆる攻撃も容易く対処してしまう。

格上だ。レナルドは悔しいがそう認めるしかなかった。
相手の実力は全てにおいて自分を上回っている。
レナード・エニアグラムという男を、自分は知らない。

モンド・グロツソの出場選手にそもそもレナードなんて名前の人間はいないし、どうして人格まで再現されているのかも全く分からない。
だが実力は本物だった。VTシステムは未完成と聞いていたが、
これほどの力を再現できるのならば十二分に完成といえるのではないか。そう思えてしまう。

「だけどなあ。俺は負けられねえんだよお！」

一人の少女がいた。

その少女は自分のような人間に惚れてくれた。
はつきり言おう。レナルド・レステンクールはラウラ・ボーデヴ
イツヒを愛していると。

そしてあるうことが愛した女は訳の分からないシステムの中にい
るときだ。

なら単純だ。余計な思考を捨てる。プライドなんてどうでもいい。
自分は聖人君子でも一夏のような徹底した善人でもない。寧ろ善人
にも悪人にも、大人にもなりきれない半端者だ。だけど、そんな半
端者にも譲れないものがある。守りたいものがある。

だからこそ、レナルド・レステンクールは唯一つの事に目的を絞
った。レナルドの中から、アイスランド軍だの試作機だの、余計な
目的は全て排除された。

国益でも義務でもない。ただ、己は。

「唯一人の女の為に、命を懸けるッ！」

『ふっ

』

ISを戦闘機形態へと変形させる。

そしてコックピットの内部にある一つのボタンを押した。

『カミカゼ』。嘗ての大日本帝国の若きパイロットが文字通りカ
ミカゼとなることで、敵航空母艦に打撃を加える捨て身の業。東の
改造により一度は耐えられるよう設計されている。だがこの宇宙で
カミカゼを使う事は、文字通り命懸けである。それでも
決めたのだ。

「カミカゼ、アタアックッ！」

一筋の閃光となって、ホワイト・スコープオンが魔人へと突っ込む

だがそれにすら、魔人は対応してきた。

両手に持った赤い刃。それが白蠍を真っ二つに両断しようとする
と迫り

何故か、その刃が途中で停止した。

『見事だ』

「えっ」

思わず声が出た。

漆黒の魔人は白蠍のアタックを受け、まるでボロ雑巾のように吹
っ飛ばされた。

その機体をスクラップへと変えていった。

「何で？」

間違いない。

レナードはさっき間違はなく自分を仕留められた。

なのに何故か、その刃を途中で止めたのだ。未完成なシステムの
故障だと普通なら思う所であるが、レナードにはどうしてもそうは
思えなかった。

そう、もしかしたらレナード・エニアグラムは己の意思で刃を止
めたのではないか。

『なに簡単な事だ。』

俺は正直お前よりあらゆる意味で圧倒していた。

その能力で主君の仇討も完遂したし、祖国を取り戻すことも出来た。
けれど、生涯愛した女の為に生きれたことはなかった。

ああ、それだけの有り触れた英雄譚さ』

漆黒の魔人がバラバラに分解される。

その中からプロト・メイガスの機影が現れる。内部で寝かされていたラウラの姿も。それを受け止めようとするが、

「ラウラッ!」

プロト・メイガスが割れていく。

不味い。このままでは、宇宙空間に放り出されて窒息死してしまう。

慌てて助けようとするが、間に合わない。

『そら、愛した女くらい守れ』

ふとバラバラになった筈の黒い物体が動きだし、再び元の腕を形作る。

そしてそれがラウラの体を包み込み、優しくホワイト・スコピオンのコックピットへと誘った。

「レナー、ド?」

『悪いな。悲恋^{そいつ}は俺だけの特権だ。誰にも譲らない、渡さない。ではなレナルド・レステンクール。ほんの一時の夢幻だったが、良い気分だ』

そして今度こそレナード・エニアグラムという男のデータは消えた。

漆黒の魔人と共に。

ふとレナルドは自分が敬礼をしていることに気付いた。意識してないでしてしまった、無意識下での行動だ。

「んっ……」

「起きたか、寝坊助」

「レナルドッ！ そうだ、プロト・メイガスの搭乗者の一人が、屋敷に忍び込んで……！」

むっ。といより、ここは宇宙！？ 一体どうなって」

説明するのが面倒だったから、唇を奪って強引に口を塞ぐ。そのまま、ゆっくりと唇を離し笑う。無性に気分が良かった。

「なんだ。積もる話はあるが見ろよ。ここがソラだ」

「……………凄い」

言葉を奪われたのだろう。

そんな在り来たりな事すら、ラウラは言えないようだった。

それほどにソラは美しい。無限に広がる漆黒の海。所々にある星の島。

これ程までに美しい場所は、地球にもそうはないだろう。

「さて、と。それじゃじゃサクサク報告しないとな」

「報告？」

「ああ、そうだ」

通信を繋ぐ。

場所はアイスランド軍本部。

レオナルド・レステンクールへ。

繋がった。

声の主はレオナルド・レステンクール・自分の父親だ。

レナルドは笑った。

思う存分笑いながら、作戦結果と想いを告げる。

「こちらナイト1から本部へ」

『……………』

息をのむ声が聞こえる。

そして朗らかに言った。

「任務完了。俺の女は、無事に取り戻した」

無限のソラを飛びながら、背に乗せた少女と笑いあう。

もう一度ラウラとキスをして思う。

たぶん、自分は我が侂だから、愛した女とソラ、二つが欲しかったのだろう。

自分はもう絶対にこの二つを手放さない。

だから、もうこれで俺の物語は終わりだ。これから俺は一夏、箒、セシリア、鈴、シャルロット、そしてラウラ。皆と一緒に笑って泣いて喧嘩して、そうして卒業していくのだろう。いつかまた、入学した時と同じ桜舞い散る季節に。

FIN

後書き

『コードギアス 反逆しない軍人』からの読者様はお久しぶりです。

本作品からの読者様は初めまして。

作者であるRYUZENです。えっ？ 何でRYUZENなんて名前なのかって？ それは『反逆しない軍人』のTURN54をご覧ください。とある人物が全部説明してくれます。

さて毎作品恒例、完結後の後書きです。

まあ今の所二つしか完結してませんが。

何故このタイミングで完結させたかというところ、そもそもインフィニット・ストラトスという作品自体が未完結だったからです。

プロット段階では、ジャンヌ・ダルクが復活して第三次世界大戦勃発やら逆襲のレオナルドなど様々な予定がありました。が没になりました。

主な理由は、原作の作風を壊したくなかったというのが大きいですね。人死にが当然のコードギアスと違って、インフィニット・ストラトスという作品はあくまで【学園ラブコメ】なので。その領域を超えないように、出来るだけ【学園ラブコメ】を意識しました。上手く出来ているかは微妙ですが。

さてさて、では余り一遍に書くと訳が分からなくなるので、また分割して。

【レオナルド・レステンクールについて】

前作からの皆様はかなり気になるこの男。

主人公の父親という、普通の作品なら余り目立たないポジションにいるのに関わらず無駄に活躍しまくった男です。

レオナルドとはイタリア語、ポルトガル語における男性名で、英語読みにするとレナードになります。

さてそんなこの男と、前作の主人公「レナード・エニアグラム」とどういった関係があるのかというと、もうぶつちやけますが、レオナルドはレナードの別の可能性です。Fate/stay nightとプリズマ イリヤにおける凜のようなものですね。

ようするに平行世界上に同時に存在する同人物であり別の人間とでも考えて下さい。

能力的にはレナードからワイアードギアスを抜いただけ、という具合でしょうか。

つまりレナード・レステンクールというキャラは、間接的にレナードの息子ともいえるわけです。

【レナード・レステンクールについて】

本作品の主人公。

レナルドは、ぶつちやけ未熟で子供です。

けれど子供だからこそ、彼はラウラを助けることが出来ました。

前作の主人公であったレナードはある意味では完璧です。どのような戦場、どのようなコンディションでも最高の戦果を叩き出し、絶対に軍務に私情を交えない。謂わば完璧な戦士といえるでしょう。けれど戦士として完璧なのが、人間として正しいかどうかは別です。もしも前作の主人公であるレナードだったならラウラを助けることは出来なかったでしょう。

【レナード・エニアグラムについて】

何故、全作品では生身でヴィンセントを撃破する程の最強キャラと化してしまったレナードが、ああもあっさりと敗れたかと言うのももちろん劣化版というのがありますが、一番の理由はレナード自身に勝つ気が皆無だったからです。

これで100%の再現だったのならば、帝国最強騎士の名に懸けて全力を出したでしょうが、本作品の彼はオリジナルより遙かに劣化しています。それに本体ではなくデータに過ぎません。

なによりレナードは愛した女の為に戦っていました。だからこそ、レナードも「負けてやるか」みたいな気分になったんですね。ぶっちゃけると別にレナードと戦う理由だってありませんし。

レナードの本心は、消える間際の言葉に全てが詰まっています。

【最後に】

最後に読者の皆様。

今まで本作品【Infinite Sky Knight<インフィニット・スカイ・ナイト>】をご愛読いただきまことにありがとうございます。私も感無量です。

『反逆しない軍人』からの読者様は、もう色々ありがとうございます！

一応今現在【Fate/not rebellion<反逆しない軍人の聖杯探索>】という作品もやっていますので、時間がある方はそちらもご覧になってくれると嬉しいです。というかは是非読んでください。

では本当の本当に最後にもう一度、ありがとございました！
お別れの前に、次回作予告を一つ、

それは、ちよつたした運命の悪戯から起きた、とても小さな出会い。
い。

けれど一筋の光すら届かない闇の中にいた少年にとっては、とても大きな出会い。

「おなかへった」

「はあ？」

十万三千冊の魔道所をその脳髄に宿した少女、
禁書目録。インデックス

学園都市において第二位に位置する超能力者、
未元物質。ダークマター

二人はベランダで出会った。

「うん？ 僕達、魔術師だけど」

「そうしなければ、インデックスは死んでしまつからですよ」

「曖昧な可能性なんて、いらぬ。あの子の記憶を消せば、とりあえず命を助けることが出来る」

「私と一緒に地獄の底まで着いてきてくれる？」

些細な運命の食い違いは、未元物質を魔術と言う非常識の世界へと導びく。

彼女は絶対記憶能力者。それ故に重い運命を背負っていた。

「一年ごとに記憶を消さないと生きられない体、だったか。たつく
テムエも腐った星のもとに生まれちゃったようだが」

けれど、第二位の少年は運命に抗う。

「だが一つ個人授業だ。耳の穴かっぱじって良く聞きやがれ。
この未元物質に、その腐った常識は通用しねえ」

【とある魔術の未元物質ダークマター】IF・もしもインデックスが出会ったのが
帝督だったら〜】

2011年春〜夏に執筆予定。

そんな訳で次回作は禁書になりそうです。

実の所、当初の予定では一方通行とインデックスが出会うという
IFをやる筈だったのですが、もうそのネタがやられていたので没
になり、帝督になりました。正にスペアプランw

だけどそれで良かったのかもしれない。原作では一方通行の黒

翼にあっさりやられ、冷蔵庫になってしまった帝督。「変わることをできなかったもう一人の一方通行」とまで言われる帝督。これは彼にとつての救いの物語でもあります。

ちなみに科学サイドの人間なのに【とある魔術】となっているのは、彼が出会ったのがインデックスだったからです。変な話それがフレンダだったら【とある科学】になっていたでしょうw

さて。では、皆様。最後まで本作品をご愛読いただき誠にありがとうございました！

しつこいようですが、もう一度ありがとうございます！

R Y U Z E Nの次回作を待っていて下さい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1117s/>

Infinite Sky Knight <インフィニット・スカイ・ナイト>

2011年5月26日00時17分発行